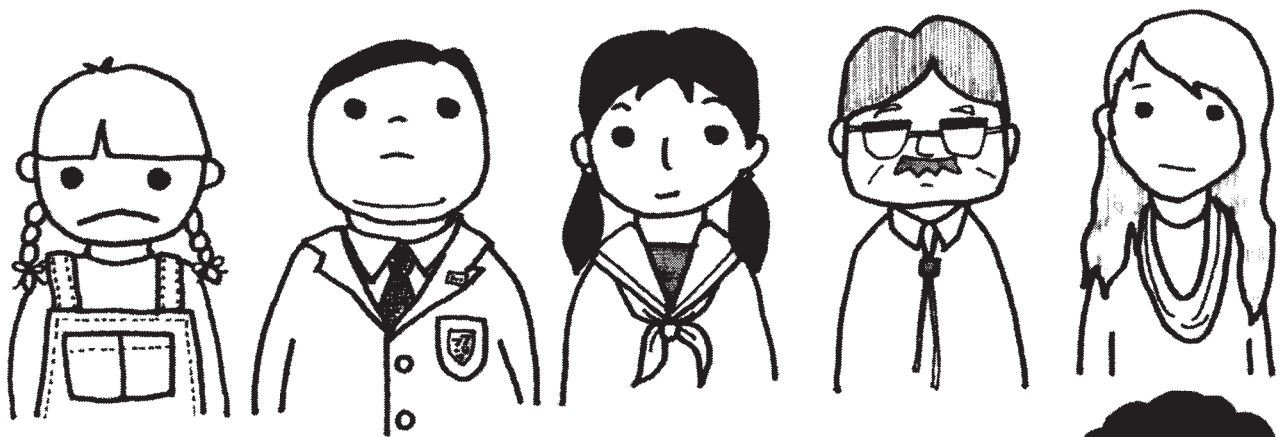
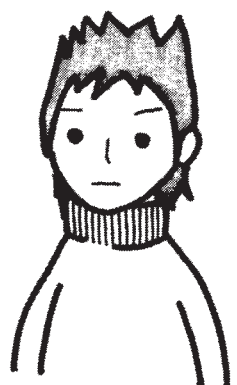
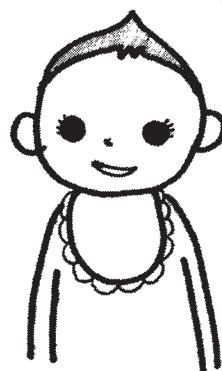
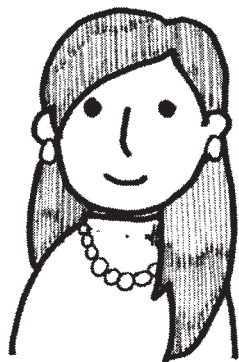
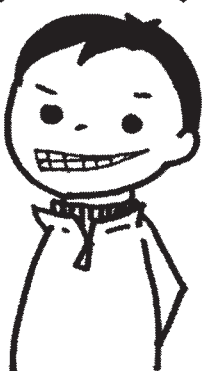
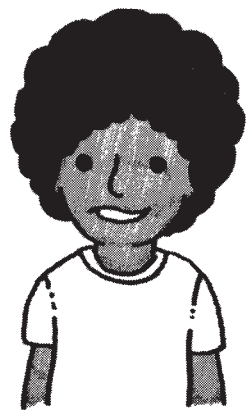




ふりーふらっと 10



横浜市青少年交流センター 開館10周年記念誌

公益財団法人よこはまユース

目次

1. あいさつ	1
2. 交流センターについて 基本方針・運営方針・施設概要	3
3. 交流センターのあゆみ 年表・事業風景	7
4. 居場所づくりに取り組む仲間から 関係機関・団体のみなさんからのメッセージ 全国居場所フォーラムの仲間たち・フォーラムの変遷	15
5. 歴代青少年委員座談会	27
6. 青少年委員会のあゆみ 年表・歴代委員ショートメッセージ	35
7. 夏期青年ボランティア活動・社会教育実習生受入れ 事業紹介・実習生インタビュー・夏期ボラ振り返りシートから・夏期ボラショートメッセージ	41
8. わたしたちの居場所 ～利用者メッセージ～	51
9. コーディネーターの活躍 カウンターから見た風景・コーディネーターメッセージ	61
10. お世話になったみなさん＆センター長から 関係者の声	78
11. 特別寄稿 神奈川大学 講師 久田邦明 先生 駒澤大学 教授 萩原建次郎 先生	88
資料編	98



交流センターの四季

公益財団法人 よこはまユース 代表理事 三田 修

平成24年12月、交流センターは、青少年の交流の場・居場所として10周年を迎えました。野毛の高台に建つ建物も青少年の交流の場としてその年数をしっかりと刻み風格を漂わせています。

交流センターの春は、野毛山公園の桜の花につつまれての様々な新しい出会いから始まります。センターには、青少年との交流に胸躍らせて新人スタッフが配属されます。新人スタッフは、先客の青少年から様々な洗礼を受けながらも、お互いの距離を縮める試みを繰り返し、やがて一つの出来事によって偶然にも達成されたりします。また、新中高生も様子をみながら1階の交流スペースに顔を出します。お互いが様子見。先輩スタッフの後押しで、新人は声かけを始めるも、そう簡単に距離は縮まらず、悩み多き時が過ぎていきます。

夏は、交流センターの活動が活発になります。5月に立ちあがった青少年委員会がセンターの運営に加わり、青少年を呼び込む夏休み企画が目いっぱい並びます。そこにまた青少年の輪が広がり、企画案の実現に向け、新人スタッフも加わり喧々諤々の議論が続きます。交流センターでの熱い議論が、時にセンターの外壁を赤く染めます(夕陽ですよ)。

秋は、落ち着いた雰囲気醸し出します。子ども連れのお母さん方が音楽を楽しみに足を運びます。新人スタッフも半年の経験を積み、来館する青少年の様子を伺い、声かけロビー活動でその距離を縮めます。雨の時は、野毛山動物園の室内展示場機能の肩代わりをしたり、併せて交流センターのPRにも精を出します。

冬は、年末、年始のイベントで活気づきます。青少年とセンタースタッフが一体となって、かどもっちい〜を開催。そして2月、全国から「居場所一命」の面々が一堂に会する全国居場所フォーラムが開催されます。スタッフも青少年委員も会場準備や、全国から集まる人たちと交流を深めます。そして3月、様々な立場で一年の振り返りが頭をよぎります。

このような活動、交流が展開され続けたこの十年、多くの青少年が交流センターから育ち、地域に飛び出していきました。そして交流の場である建物は一年ごとにその幹を太く、その存在感を増してきました。

そしてまた、胸をときめかす春がセンターに巡ってきます……。



横浜市青少年交流センター

10周年によせて

横浜市こども青少年局長 鯉渕 信也

平成14年度に開館した横浜市青少年交流センターも、今年度で10周年を迎えることができました。この10年間、多くの子ども・青少年に愛される施設として、管理・運営してくださいました、公益財団法人よこはまユースの皆様には感謝申し上げます。

子ども・若者が健やかに成長し、自立していくためには、世代や価値観の異なる他者とふれあいながら、様々な体験を重ねることを通じて、主体的に物事に参加する力や他者への配慮、コミュニケーション能力などの社会性を身につけていく必要があります。

近年、多機能型携帯電話（スマートフォン等）や新たなインターネットへの接続機器が普及し、便利な情報伝達手段の広がりによって、世界のどこにいても瞬時にコミュニケーションが取れる等、人とのつながり方が多様化する一方、従来のように、直接、顔を会わせるかたちでの同年齢・異年齢の仲間や地域の大人たちとの付き合いが少なくなっています。

そうした状況のなか、横浜市青少年交流センターは、開館以来、数多くの子ども・若者が安心して集える居場所として、また、多様な人との交流や様々な体験を重ねることができる場としての役割を果たしてきました。

交流センターの利用者は、この10年の延べで約150万人にも上り、多くの子ども・若者が交流センターでの経験を通じて、夢や希望をもって社会への第一歩を踏み出していています。また、青少年委員として、交流センターの運営やイベントの企画に携わってきた若者たちは、成功や失敗に向き合う経験を通じて、主体性や協調性、自己選択力といったものを身につけてきたことと思います。

今後も、これまで交流センターが果たしてきた役割を踏まえながら、青少年団体や地域の関係機関等とも十分に連携・協働し、子ども・若者が安心して過ごせる居場所づくりや多様な人と交流できる場や機会の提供等について、全力で取り組んでまいります。

➤ 交流センターについて

施設概要

基本方針・運営方針



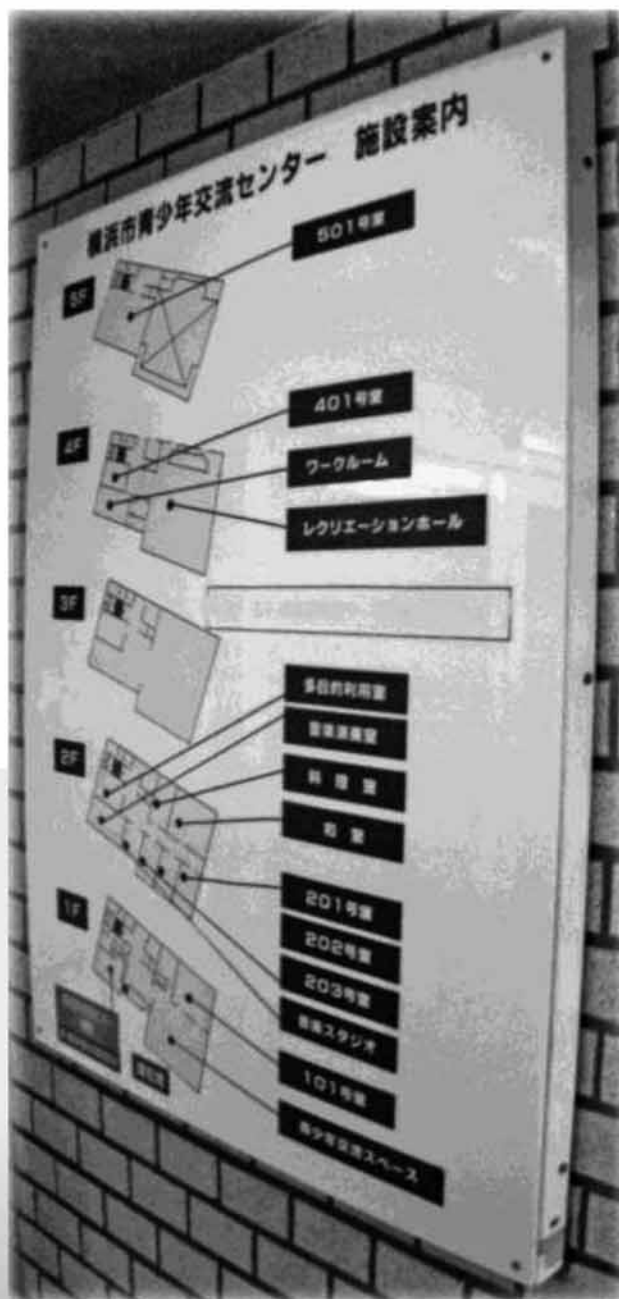
横浜市青少年交流センター ふいーふらっと野毛山 施設概要

〒220-0032 横浜市西区老松町25 Tel:045-241-0673 Fax:045-242-0959

【開館時間】 9:00～22:00

部屋名	定員 (人)	利用時間帯 (1コマ)
多目的利用室	20	9:00～12:00 12:15～15:15 15:30～18:30 18:45～21:45
201～203 号室	28	
401号室	15	
料理室	20	
和室	40	
501号室	120	9:00～13:00 17:45～21:45
レクリエーション ホール		
音楽演奏室 (グランドピアノ)	30	9:00～11:00 11:05～13:05 13:15～15:15
音楽スタジオ (ドラムセット・アンプ 類・ピアノ・キーボード)	10	15:25～17:25 17:35～19:35 19:45～21:45

開館以来、みんなをむかえる施設案内板



●青少年交流スペース(フリー)

(定員 50 人)

TV、雑誌など使用は自由。

利用申請が不要で飲食も自由だから、友だちと気軽に集まります。パソコンもあるからインターネットも楽しめ、もちろん一人だって大丈夫！いろんな出会いが待っています。



【1F】

◎ 501号室 (大会議室)

(定員120人)



大規模な研修・会議に
使用できる当センター
最大の会議室です。

[5F]

◎ レクリエーションホール



バスケットボールやバドミントンなどのスポーツ活動
ができます。13:30～17:30は自由に利用できます。
(青少年以外の方は利用登録が必要です。)

[4F]

◎ ワークルーム (フリー)

(定員30人)



自由に打ち合わせや作業が
できる場所です。(青少年以
外の方は利用登録が必要です。)

◎ 音楽演奏室

(定員30人)



吹奏楽からコーラスま
で幅広い活動ができま
す。グランドピアノも
完備しています。

◎ 多目的利用室

(定員20人)



鏡張りだから、演劇・
ダンスのレッスンには
最適!!

◎ 音楽スタジオ

(定員10人)



個人演奏からバンド活
動まで思う存分、音楽
を楽しめます。大きな
音を出しても大丈夫。

◎ 料理室

(定員20人)



料理講習からお菓子
作りまで。趣味の活
動を通して楽しく仲
間づくり!!

[2F]

横浜市青少年交流センターの基本方針

センターの運営を通じて、青少年が、世代や価値観の異なる他者と触れ合いながら、自らの意志で物事の決定や行動ができ、他者への配慮やコミュニケーション能力などの社会性を身につけていくことができるよう支援していきます。

交流センターの運営方針

交流センターは、次に掲げる3つの柱に基づいた運営方針をたてています。

1 青少年活動の支援

青少年活動を行うための安全で効果的な場を提供するとともに、青少年と大人が共に育つ環境を醸成します。

青少年が主体的に関わることができる体験活動の場として利用してもらうため、活動相談や情報提供による支援を行い、できる限り利用に関する制限を設けない施設を提供します。

青少年が事業に関わることにより青少年自らが学び育つ機会を幅広く提供するために、青少年への活動相談、ロビーワークによる日常的な相談・助言を行います。

2 青少年を支える人材の育成

青少年を支える人材や核となる青少年を養成することで、青少年と大人がともに育つ環境を醸成します。

青少年及び青少年育成に関する情報の提供、知識や技能習得の機会の提供と支援を行い、青少年育成への理解を深め、青少年活動の普及を推進します。

3 青少年への体験機会や活動の場の提供

青少年が体験を通じて、自ら感じ考えることで学び育つことができる機会として、体験活動事業を企画・実施します。

協力して目標を達成していく過程で青少年が社会性や協調性を育み自ら成長していくことができるよう、個人の特性に応じて活動領域や手法を変え、すべての青少年を対象とした体験活動を実施します。

➤ 交流センターのあゆみ

年表
事業風景



横浜市青少年交流センター(ふりーふらっと野毛山)年表

【2001年～2003年度】施設の転換整備と交流センター開館

2001年 3月	勤労青少年センター(Do館)を、10月から休館し、施設のあり方を検討することを決定(市)
6月～ 9月	勤労青少年センター検討委員会を設置し、施設のあり方等について検討(市)
10月	勤労青少年センター休館
2002年 6月	勤労青少年センター転換整備事業補正予算議決、青少年交流センター管理運営費を計上(市)
9月	勤労青少年センター廃止、青少年交流センター設置について、横浜市青少年施設条例を一部改正
10月～ 11月	施設改修、補修工事等実施 青少年交流センター開設準備担当課設置(法人) 開設準備スタッフが、居場所の先駆的な施設(京都市南青少年活動センター、杉並区立児童青少年センター)を視察
12月	横浜市青少年交流センター開館 ・「みんなの掲示板」をフリースペースに設置 ・第1回利用者対抗卓球大会開催
2003年 2月	・市内学校(小・中・高・大)、図書館等に出向き施設PR活動、徐々に青少年たち、特に大学受験生が来館するようになる ・ゲーム機(スタッフや利用者が寄付)をフリースペースに設置、小中学生や浪人生に大人気となる
3月	・スタッフロビーワークレポート発表会 テーマ: 青少年からの評価や要望/ルールを見直す(作る)必要があると思うこと/青少年への指導が必要と思うこと
5月	・「こどもの日まつり」実施(交流センター初めての事業に、利用者を中心とした多数のボランティアが活動) ・「園芸部」活動実施(センターの花壇に青少年とともに植栽)
6月	・第1回「@楽祭」実施(利用者からの提案により実現)
7月	・第1回七夕まつり実施 ・夏期青年ボランティア※以下: 夏期ボラ(夏休み期間中に子どもたちの遊びや学びのサポート)を募集
8月	・夏期ボラ活動(86人が活動) ・トライ・トライ・トライ事業をコーディネーターの手で実施(3回) ・夏休みアトリエ交流(紙すき、染物等)実施(3回) ・夏休みドッジボール大会実施 ・きもだめし大会を夏期ボラの手で実施 ・夏休み宿題大作戦! 実施 ・サマーフェスティバルを夏期ボラの手で実施 ・ミニコミ紙「ザ・Co.りゅう」発行(コーディネーターが編集)
9月	・県立青少年センターで活動していた『青少年指導者クラブ』の協力で、「クラブ教室」開始(毎月第2日曜に実施) ・開館1周年記念事業実行委員会設置(青少年20人)
10月	・卓球大会実施 ・第1期青少年委員会設置(委員19人) ・運営委員会設置(学識経験者、地域住民、利用者、青少年など8人) ・交流センター「愛称選定委員会」設置(委員8人) ・施設や用具の破壊行為がエスカレートし、レクホールの利用方法を見直すためにレクホールを一時閉鎖 ※3週間の閉鎖期間中に、青少年へのアンケート実施とスタッフのレポート活動、青少年委員会での話し合いをおこない、「種目別」の利用になる
11月	・開館1周年記念式典、記念フェスティバル(ライブ、利用者作品展示、模擬店、よさこい体験、しゃべり場、料理体験等)を実施 来場者493人 運営ボランティア(青少年38人) 愛称が「ふりーふらっと野毛山」に決定 ・ミニコミ紙「ザ・Co.りゅう」発行(コーディネーターが編集)
12月	・「星のフェスティバル」(子どもによるスタンダラス作成展示)実施 ・冬休み事業実施 クリスマスケーキづくり/バスケットボール大会/クラブ「ミニ門松づくり/もちつき大会
2月	・節分豆まき大会実施 ・バレンタインチョコレート大作戦実施 ・青少年委員会初の主催事業「若殿様からの挑戦状」実施

【2004年度】

3月	・青少年委員会宿泊研修(於:野島青少年研修センター) ・老松中学校卒業生企画「フットサル大会」実施
5月	・第2回「こどもの日まつり」実施(来場者242人) この年から小学生もボランティアスタッフとして参加 ・スタッフ全体会実施 テーマ: 慣れた子どもたちに対するロビーワークについて
6月	・第2回「@楽祭」実施(青少年委員が司会を務める)
7月	・初の青少年ライブ開催!(10バンド) ロビーワークにより青少年の声を吸い上げ、チラシづくりから看板づくりまで出演者の高校生の手で実施
8月	・夏期ボラ活動(66人が活動) ・クワガタ、カブトムシ研究会発足(研究員43人の小中学生) ・夏休み事業(コーディネーターが講師を務め大好評) ランチパーティー/デザートづくり/竹馬づくり/竹をつかった水鉄砲づくり ・青少年委員会主催「きもだめし」(大好評!)
9月	・青少年の声に応え、フリースペースで「囲碁・将棋・トランプ・ウノ」貸し出し開始
10月	・青少年委員会と「ゆう杉並」中高生運営委員の交流会実施(於:ゆう杉並)
11月	・川崎市子ども夢パーク/フリースペースえん見学(スタッフ全員)
12月	・青少年委員主催第1回「かどもつちい〜」実施 年賀状教室、ミニ門松づくり、もちつき(参加者約200人) ・交流センターキレイにし隊実施 いつも遊びに来ているセンターを自分たちの手でキレイにしたいと、子どもたちや青年ボランティアがセンターを大掃除! 手書きの屋外看板も作成
2月	・管理運営団体(社)横浜ボランティア協会と(財)横浜市青少年科学普及協会が統合し、新団体(財)横浜市青少年育成協会誕生 ・青少年委員がボランティア入門講座「はじめの半歩」講師に挑戦
3月	・春休み卓球大会実施 ・青少年委員会卒業イベント「春一番! ふりふら祭り」実施 ・青少年ライブ「SAY! 少年! ライブ」実施(観客125人)

【2005年度】

4月	・ロビーワークの一環として、コーディネーターがそれぞれ趣向を凝らし企画運営する「ふらっとCAFE」開始(フリースペースで毎月実施) ・スタッフ全体会実施 テーマ: 慣れた子どもたちに対するロビーワークについて
5月	・第3回「こどもの日まつり」実施(来場者数393人) 模擬店で初めてやさそばを販売(発売から40分で90食が売り切れ)
6月	・1F自習室を使つての「青少年パフォーマンス」実施 のちに「ふらっとライブ」として定番化(初回の参加はたった2組!) ・「@楽祭」実施(参加8組 青少年委員が司会進行) ・「ふらっとCAFE」実施(トランプで遊びながら恋愛と人生について考える/こうぞうさんの理科実験教室)
7月	・「ふらっとCAFE」実施(プラ版でキーホルダーづくり/南京玉すだれとカキ氷で下町体験どちらも大人気) ・チャレンジ親子体験塾「クワガタ・カブトムシ研究会」実施
8月	・夏期ボラ活動(54人が活動) ・夏休み事業大連発(青少年委員と夏期ボラの協力で大好評) デニボン大会/チャレンジ親子体験塾『採集編』/クラブトウちわ作り/茶道体験教室/サマーランチづくり/きもだめし大会/ボランティア交流会 ・青少年委員会合宿(於:野島青少年研修センター)
9月	・「ふらっとCAFE」実施(ボンボンクラブ)
10月	・「ふらっとCAFE」実施(飛べ! 紙ヒコーキ/バターゴルフ)
11月	・利用料金制度スタート(青少年の利用は一部無料) ・チャレンジ親子体験塾「そば打ち体験」実施 ・秋の@楽祭実施

12月	・青少年委員会主催「かどもっちい〜」実施(参加者123人) 松ぼっくりで作るクリスマスツリー、門松づくり、もちつき ・ふらっとライブ「クリスマスコンサート」実施 ・冬休み青年ボランティア活動 ・キレイにし隊実施
1月	・「ふらっとCAFE」副編「受験生応援企画“学問のスズメ”」実施 受験生たちの情報交換と休息の時間を提供 ・本町小キッズクラブとの連携事業「もちつき&クラフト」実施 ・青少年委員とゆう杉並中高生委員会交流会実施 青少年委員がMM地区〜中華街を案内
2月	・「居場所フォーラム2005」実施 全国から“青少年の居場所づくり”に携わる人たちが参 集(交流センター職員がシンポジウムパネリストとして日 頃の取り組みを発表)
3月	・春休み青年ボランティア活動 ・青少年ライブ「郷」実施 ふらっとライブの成果が表れ演奏技術も向上 (名称の「郷」は、このライブを最後に進学のため故郷 を離れるバンドメンバーが多く参加していたから) ・春休み事業「卓球大会」実施(利用団体「わかば卓球ク ラブ」の全面協力にて)

【2006年度】

4月	・体制が変わり、センターの職員が3人から6人へ増員。 ロビーワーク充実のため、コーディネーター勤務に「中 番(13時〜18時)」を導入 ・ボランティア活動や体験活動情報の発信、コーディネー トをおこなう「青少年体験活動推進センター(2007年度か らコーナーへ名称変更)」をセンター内に設置
5月	・こどもの日まつり(来場者246人)
6月	・@楽祭実施(過去最高12団体参加) ・乳幼児の親子がクラシックを気軽に楽しめる「ふりふら音 楽コンサート」を利用団体「おもちゃの箱」の協力により 実施
7月	・6月から一部の青少年の目に余る行為により閉鎖してい たワークルームを再開(スタッフと青少年が一緒に作った テーブルやイスが並ぶ) ・「クワガタ・カブトムシ研究会」「野外観察会」実施 ・西区子ども会連携事業「クラフト教室」実施
8月	・夏期ボラ活動(43人が活動) ・夏休み事業もりだくさん(スタッフの特技を生かし、青少 年委員と夏期ボラの協力で大好評) ふらっと朗読会／木工教室／理科実験教室／ドッジ ボール大会／ピザ作り教室／茶道体験教室／クラフト 教室／きもだめし大会 ・ふらっとライブ「CRASH! 常夏ライブ」実施(観客122人) ・夏期ボラ活動のノウハウを活かし、鶴見区主催の「地区 センボラ活動」を支援
10月	・ふらっとライブ「デリシャスモンブランライブ」実施 ・保護者を対象とした「食育講座」実施(テーマ別に4回) ・コーディネーターの特技を生かした「布ぞうりづくり」実 施(約3時間かけてぞうりを編む) ・青少年委員会主催イベント「ハロウィンパーティー」実施 (フェイスペイントや仮装コーナーなど、センターが華やかに)
11月	・秋のスポーツ体験「バタール大会」実施 ・秋の「@楽祭」実施(6団体参加) ・青少年持ち込み企画事業「3on3大会」実施(高校生以 上の世代が参加)
12月	・野毛山動物園連携事業「ふらっとたんけん隊」実施 交流センターと動物園を会場に、園長がレクチャー& ガイド(4回実施 参加者のべ73人) ・青少年委員会主催「かどもっちい〜」実施 わたのクリスマスリースづくり、門松づくり、もちつき ・ふらっとクリスマスライブ、ふらっとクリスマス音楽コン サートなど、クリスマス音楽イベントが盛り上がる。 ・体験活動推進コーナー「高校生ボランティアアクト」実施 ・「キレイにし隊」実施

1月	・本町小キッズクラブ連携事業「もちつき」実施 ・女性農家「よこはま・ゆめファーマー」制度10周年記 念事業「ゆめ・ファーマー文化祭」実施(横浜市環境創造局共催)
2月	・「ボーカルレッスン講座」実施(ライブを目指す中高生が参加) ・「居場所フォーラム2006」実施(日本都市青年会議と共催) 3日間、センタースタッフが実行委員として携わる ・利用団体「みのり会」共催「ふらっと庵茶道体験」実施
3月	・青少年委員卒業イベント「ふりふらフレンドパーク」実施(参加者273人) ・青少年ライブ「満開! さくライブ」実施(11バンド、観客206人) ・利用団体「わかば卓球クラブ」共催「春の卓球大会」実施

【2007年度】

4月	・大道芸開催に合わせ、野毛山にある公共施設連携事 業「さかのはるまつり」に参加 交流センターは青少年委員が「脳トレ緑日!」実施 (2日間のべ137人参加)
5月	・「こどもの日まつり」実施(参加者過去最高556人) ・不就学児親子対象の音楽コンサート「ふらっともキッズ」 開始(毎月開催) ・第5期青少年委員会発足(過去最高20人が活動)
6月	・春の@楽祭(9団体参加)
7月	・青少年利用者による公演「ふりふら劇場」実施 ・第1回ものづくり講座「ヒコキづくり」実施 ・「クワガタ・カブトムシ研究会」実施 ・西区子ども会連携事業「夏休みクラフト教室」実施 ・ふりふらアートイベント「おもしろお面づくり」実施
8月	・夏期ボラ活動(47人が活動) ・「高校生水源林ボランティア」(推進コーナー事業)で、 高校生とともに道志村へ(センター利用者も多数参加) ・夏休み事業もりだくさん 木工教室(図面ひきから挑戦)／理科実験〜いろんな音 をつくってみよう／料理体験「お花寿司」／写生大会(夏 の果物と野菜)／クラフト教室(海のメリーゴーラウンド) ／ドッジボール大会／きもだめし大会〜恐怖の交流病院〜
9月	・社会教育実習生受け入れ(9月中) ・青少年委員会宿泊研修(於:野島青少年研修センター)
10月	・ふらっとライブ実施 ・第2回ものづくり講座「藤かごづくり」実施 ・青委主催「ふりふらdeハロウィン」実施(お化けかぼちゃ のくりぬきに挑戦)
11月	・青少年のためのHIVエイズ予防のための勉強会実施 ・ボリビアの高校生とHIVエイズ予防について衛星テレビ 会議@JICA横浜実施 ・秋の@楽祭(8団体出演) ・横浜国大生と受験生が語り合う「キャリアカフェ」実施
12月	・青少年指導者講座「クリスマスツリーづくり」実施 ・「サッカーチャレンジ教室」実施(協力:Jリーグ横浜FC) ・野毛山動物園ふらっとたんけん隊Part2実施 ・第5回「かどもっちい〜」実施(参加者158人) 飛び出すクリスマスカードとツリー、ミニ門松、もちつき ・「クリスマスライブ」実施(出演10バンド、観客107人) ・学齢期児童に対する職業観の醸成「THE☆お仕事 ゲーム」実施(よこはま若者サポートステーションと共催)
1月	・本町小キッズクラブ連携事業「もちつき&クラフト」実施
2月	・ものづくり教室「布ぞうりづくり」 ・「不登校、ひきこもりフォーラム」(東京:津田ホール)に て、職員がパネリストとして事例を発表 ・西区子ども会育成協議会連携「西区子ども大会」実施 ・「青少年の居場所づくりフォーラム」実施(日本都市青年会議と共催) 全国から青少年育成にかかわる105人が参加
3月	・食育講座パート3「食育ふりふらタイム」実施 ・青少年委員会宿泊研修(於:野島青少年研修センター) ・利用団体「わかば卓球クラブ」共催「春の卓球大会」実施(21人参加) ・青少年ライブ「エイプリルフルじゃないよ」実施(12バンド参加) ・第5期青少年委員会卒業企画「お弁当づくり」にチャレンジしよう!実施

※2001〜2007年度の年表は、2008年10月発行の開館5周年記念誌に
掲載したものを整理し再掲しています。

横浜市青少年交流センター(ふりーふらっと野毛山)年表

【2008年度】

4月	・ 職員体制が6人から3人へ(ロビーワークの仕方、「交流」の意味を再考、再検討) ・ 青少年委員会「ワイワイおやつタイム」、「クラフト教室」(ともに8月を除く)、「ふらっとb kids」(8月を除く 5、9、12、2月はコンサート)を毎月実施
5月	・ 「こどもの日まつり」(579人)
6月	・ 「@楽祭」(11団体230人)
7月	・ 団体との共催事業「テーブルサッカー教室」(9人) ・ 「子ども会クラフト」(西区第4地区子ども会) (94人) ・ 夏休み事業「木工教室」(12人)、「理科遊び」(30人) ・ 「日韓高校生交流事業」(28人) ・ 「夏期青年ボランティア」(43人) ・ 「中学生夏期青年ボランティア」(6人) ・ 青少年委員のアイデアで中学生のボランティアを実施 ・ 「夏期インターンシップ」(4人) この年からインターンシップの受け入れを開始(子どもたちとの交流はもちろんのこと、事業や夏期ボラのサポートと、大活躍！)
8月	・ 子どもも青年も、みんなでレクホールを使えるようにレクホールの種目を夏休み限定で変更！ ・ 夏休み事業「クラフト教室(うちわづくり)」、「絵を描こう」、「ドッジボール」 ・ 横浜市勤労者福祉共済(ハマふれんど)共催 「夏休み子ども体験講座」「うちわ」、「布ぞうり」、「木工」 ・ 青少年委員会「納涼！きもだめし大会」(83人、Vo10人) ・ 「法政大キャリアカフェ」(30人) ・ ふらっと美術館Vol1「モンゴルの子どもたち—NGOゆいまーるからの報告」 ・ 「青少年ライブ」(12バンド、135人) ・ 「高校生による道志村水源林ボランティア」(34人)
9月	・ 「ふりふら劇場」(100人) ・ 青少年委員会「スポーツ大会(ポートボール)」(14人)
10月	・ ふらっと美術館vol2「わたしたちが感じたアジア写真展&トークショー」(トークショー13人) ・ 「水源林の森合唱団」(14人) 11月の@楽祭で練習の成果を披露！ ・ 横浜アジアンウェーブ「茶道を体験しよう」(30人)、「ギョーザを作ろう」(9人) ・ 青少年委員会「ふりふらdeハロウィン」(70人、Vo10人)
11月	・ 「@楽祭」(14団体210人) ・ 「茶道を体験しよう」(みのり会協力) (34人) ・ 「法政大ジョブカフェ」(小学生11人、大学生6人)
12月	・ 青少年の持ち込み企画「遊戯王デュエルモンスターズ クリスマスカード大会」(21人、企画1人、青少年1人) ・ 「ふりふらジョブカフェ」(20人) ・ 「青少年ライブ」(15バンド145人) ・ 「かどもっちい〜」(もちつき130人、門松27人、クラフト15人、Vo13人)
1月	・ 青少年委員会 「恵方巻きを作ろう！」(16人、Vo2人) ・ 「冬期青年ボランティア」(1人) ・ 団体との共催事業「百人一首大会」(5人)
2月	・ 青少年の居場所づくりフォーラム2009(170人)
3月	・ 青少年の持ち込み企画「デュエルモンスターズ/デュエルマスターズカード大会」(31人、企画1人、青少年1人) ・ 卒業企画 「バドミントン大会」(12人、企画2人、青少年1人) ・ 「青少年ライブ」(8バンド 114人) ・ 青少年委員会卒業企画「タイムカプセル〜未来の自分へ手紙を書こう」(38人) ・ 「春の卓球大会」(35人)

横浜市青少年交流センター(ふりーふらっと野毛山)年表

【2009年度】

4月	・この年から、実習生の受け入れを開始。(3月まで 駒澤大4人、湘南工科大5人) ・青少年委員会「ワイワイおやつタイム」、「クラフト教室」(ともに8月を除く)、「ふらっとb kids」(8月を除く 5、9、12、2月はコンサート)を毎月実施
5月	「こどもの日まつり」(405人)
6月	・「理科あそび」 ・「@楽祭」 ・「横国大キャリアカフェ」(6、12、1月に実施 参加者170人) 横浜国大生が大学生活について、受験生にアドバイス
7月	・「エコキャップライブ」(4バンド70人) ・青少年委員会「ふりふら夏祭り」(55人) ・「ルーマニア活動報告(ハピタットMGU)」(20人) ・「クワガタ研究会」(年5回実施 参加者94組) ・夏休み事業「大縄飛びの日」、「木工教室」
8月	・夏期青年ボランティア(43人) ・夏休み事業「もくねんさんで遊ぼう」、「理科あそび」、「夏休みドッジボール」、「絵を描こう」、「フラワーアレンジメント」 ・「青少年ライブ」 ・青少年委員会「納涼! きもだめし大会」(145人) ・「ふりふらジョブカフェ～海外で生活する編」(10人) ・「ふりふらジョブカフェ～小学校の先生編」(8人) ・「高校生による道志村水源林ボランティア」(45人)
9月	・「ふりふら劇場」(51人) ・青少年委員会「お点前体験(萌木の会)」(64人) ・青少年委員会「Y150トークショー」 Y150のイベントにて、青少年委員がトークショーに参加
10月	・利用料金の支払期限を変更(より利用しやすくするために、当日の支払OKに) ・青少年委員会「ハロウィン」(64人)
11月	・フリータイム時のレクリエーションホールの種目について、夏休みに適用していた内容を導入する ・「@楽祭」
12月	・青少年委員会「かどもっちい〜」 ・「青少年ライブ」
1月	・「ふりふらジョブカフェ～公務員編」(17人)
2月	・青少年の持ち込み企画「カードゲーム大会」(18人) ・青少年の居場所づくりフォーラム2010(120人)
3月	・青少年ライブ「春うらら らいぶ」 ・「卓球大会」(35人) ・青少年委員「ふりふらフェスタ」(88人) (この年の青少年委員の集大成として実施。ゲームやクラフトなど、子どもたちに楽しんでもらえる内容を考え実施)

横浜市青少年交流センター(ふりーふらっと野毛山)年表

【2010年度】

4月	・実習生の受け入れ(11月まで 駒澤大9人、湘南工科大2人) ・青少年委員会「ワイワイおやつタイム」、「クラフト教室」(ともに8月を除く)、「ふらっとb kids」(8月を除く 5、9、12、2月はコンサート)を毎月実施 ・「ふりふらジョブカフェ～保育士編」(7人)
5月	・「こどもの日まつり」(424人、Vo47人) スピードガン、やかんカーリングを新たに実施 ・「ふらっとカフェ」大学って何をするところなの？(11人) 実習生による企画 大学について、中高生と語る
6月	・「@楽祭」
7月	・夏休み事業「理科遊び」(音の通り道、振り子の坂道を実施) ・青少年委員会「ふりふら夏祭り」(87人、Vo31人)
8月	・「青少年ライブ」 ・青少年の持ち込み企画「カードゲーム大会」(18人) ・青少年委員会「納涼！きもだめし大会」(220人、Vo41人) ・夏休み事業「ピザづくり」、「木工教室」、「うどんづくり」、「絵を描こう」、「ドッジボール大会」 「ピザづくり」では、センター花壇で育てた野菜を使用！ ・夏期青年ボランティア(54人)
9月	・青少年の持ち込み企画「消しゴムスタンプ」「俳句」(8人) 実習生による持ち込み企画 小学生を中心に大好評！ ・「ふらっとジョブカフェ～図書館司書編」(17人)
10月	・ふらっとカフェ「薄板しおりづくり」(16人) 山田前センター長が、和歌山から送ってくれた薄板を使って実施！ ・西区連携事業「おもちゃの病院」
11月	・「@楽祭」(10団体 161人)
12月	・「青少年ライブ」 ・青少年委員会「かどもっちい〜」(165人、Vo40人) ・「ふりふらジョブカフェ～福祉編」(6人)
1月	・青少年の持ち込み企画「カードゲーム大会」
2月	・青少年の居場所づくりフォーラム2011 ・中高生世代対象事業「能楽ワークショップ」 能楽師の方から、能楽の歴史、演奏の仕方について学び、能楽の舞台を見学
3月	・「卓球大会」、「青少年ライブ」、「青少年委員会 センター感謝ディ」(震災のため中止)



横浜市青少年交流センター(ふりーふらっと野毛山)年表

【2011年度】

4月	・財団法人横浜市青少年育成協会から「公益財団法人よこはまユース」へ ・スタッフが8割ほど入れ替わる、新たなメンバーでスタート ・実習生の受け入れ(11月まで 駒澤大6人) ・青少年委員会「ワイワイおやつタイム」、「クラフト教室」(ともに8月を除く)、「ふらっと kids」(8月を除く 5、9、12、2月はコンサート)を毎月実施
5月	・Co会議(新体制で1か月をむかえ、子どもたちの向き合い方に戸惑いがでる！それぞれの持ち味で接していくこと、大人のルールを押し付けない、ルールだからではなく、こどもに気づいてもらう、こどもの尊厳、人権を傷つけない、守りながら対応していくことを確認) ・こどもの日まつり(329人)
6月	・「@楽祭」 ・人形劇ぴっころ公演
7月	・青少年委員会「ふりふら夏祭り」 ・青少年の持ち込み企画「カードゲーム大会」 ・夏休みイベント「よみきかせ、ゲルマニウムラジオ」
8月	・夏休みイベント「木工教室、うどんづくり、風鈴づくり、卓球大会、ドッジボール大会」 ・夏期青年ボランティア(40人) ・青少年委員会「納涼！きもだめし大会」(171人、Vo46人) ・中高生イベント「ふらっと勉強★大作戦」(大学生、社会人が勉強を教えたり、進路について相談にのったり、中高生大喜び！ 参加者:10人) ・青少年ライブ「アイスで省(SHOW)エネ夏祭りLIVE」(5バンド、54人)
9月	・第2回Co研修 子どもたちへの向き合い方について
10月	・青少年委員会「ふりふらハロウィン」(52人、Vo23人) 事前の準備にも、ボランティアが加わって実施！ ・近隣施設連携「ハロウィン」
11月	・「@楽祭」(8団体、132人)
12月	・青少年ライブ「cold→HOT Winter Live」 ・団体持ち込み企画「音作り講習会」(学生、若手バンドマンを中心とした団体「MUSACI」のサポートにより、青少年対象のギター・ベース・ドラムの講習会を開催) ・青少年委員会「かどもっちい〜」
1月	・青少年の持ち込み企画「カードゲーム大会」 ・ワールドカフェ「居場所づくり よりどころは？」(団体「集いのCafé」の持ち込み企画) 居場所について、ワールドカフェ形式で討議 ・ふらっとカフェ「ニットカフェ」(8人) コーヒーを飲み、編み物をしながら、参加者同士が交流 ・「青少年の地域活動拠点連絡会」(12人) 横浜市内に8か所ある青少年の地域活動拠点スタッフが集まり、顔の見える関係づくりを目指す！
2月	・「青少年の居場所づくり」全国フォーラム2012
3月	・青少年ライブ「ふりふらSPRING 2012」 ・近隣施設連携事業「シニアのための簡単クッキング」

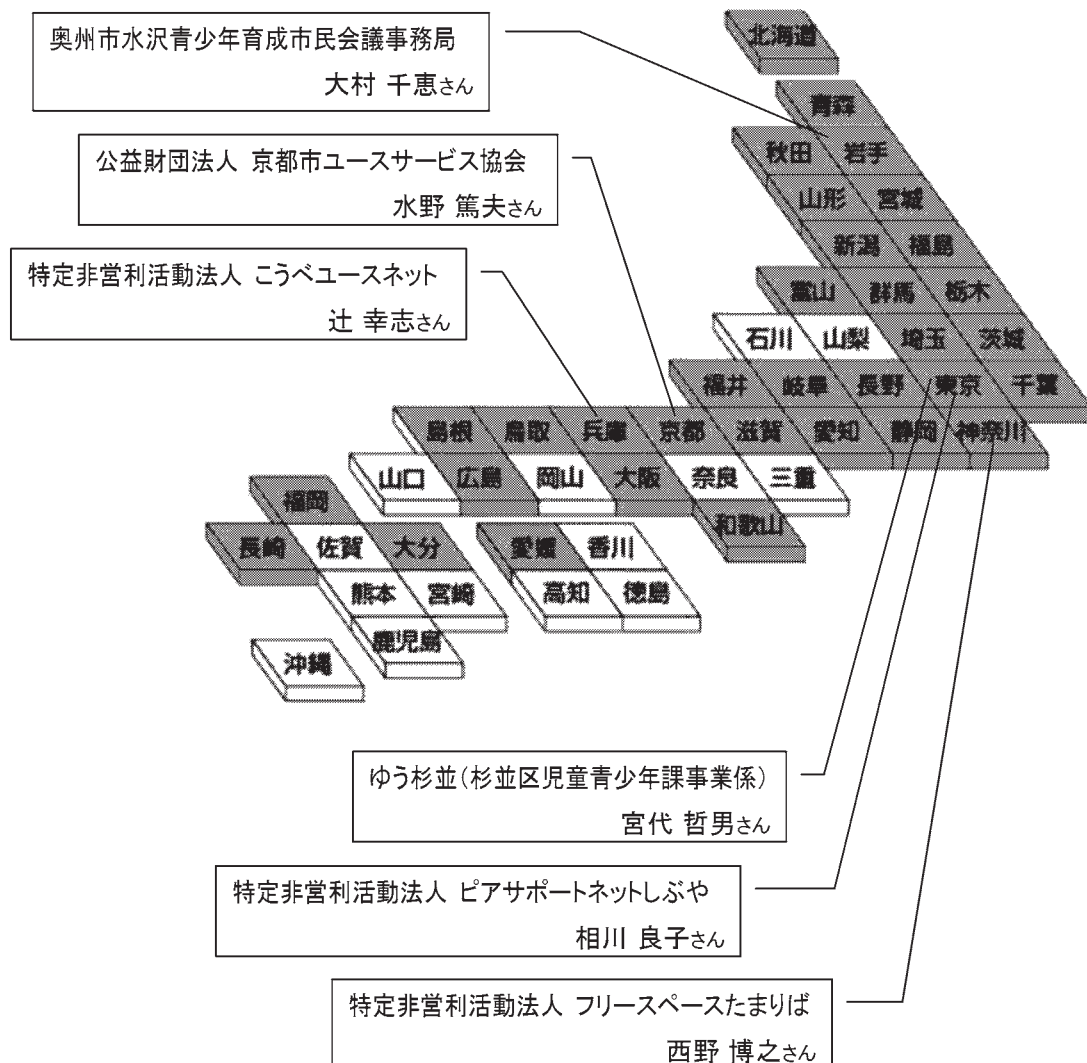
横浜市青少年交流センター(ふりーふらっと野毛山)年表

【2012年度】

4月	・新たなメンバーを加え、職員4人、Co11人に ・青少年委員会「ワイワイおやつタイム」(8月を除く)、「ふらっとb kids」(8月を除く 5、9、12、2月はコンサート)を毎月実施 ・Co会議(フリースペースでのゴミの散らかしが課題、子どもたちへの対応、声掛けについて討議)
5月	・「こどもの日まつり」(491人、Vo69人)ボランティア参加、過去最多人数 ・「社会教育実習生の受け入れ」(11月まで、駒澤大10人、立教大・日体大3人) 駒澤大に加え、今年度は立教大、日体大からも実習に参加 ・「園芸部」始動(トマト、ナス、トウモロコシ等の野菜の苗、ひまわりの種を植える)
6月	・「@楽祭」(出演者7団体52人、来場者60人) ・団体持ち込み企画「音作り講習会」(17人) ・人形劇びっころ公演「三枚のお札」 ・「楽しいふれあい会」(於:西公会堂 参加者70人、青委3人) 地域のイベントに出店(キーホルダーづくりを実施)
7月	・夏休みイベント「カップサンドづくり」「クラフト教室」 ・小中学生を対象にした勉強会「ふりふら勉強会」がスタート ・庭園のひまわりが見ごろに(庭園の名前が「ひまわり農園」に決定、青少年委員とCoが立看板を作成!)
8月	・夏休みイベント「木工教室」「つなひき大会」 ・青少年ライブ「サイダー サンダー しゅわ しゅわ LIVE」 ・アートワークショップ「わくわくどうぶつえん」(全2回、29人) 現役の教員、美大生、教育学部生によるワークショップ(身近にあるものを使って、動物を作成) 作品の一部を9月の「動物園劇場」に出品 ・青少年の持ち込み企画「カードゲーム大会」 ・青少年委員会「納涼!きもだめし大会」 ・フリースペースのボロボロソファに、ソファのカバーを制作
9月	・ヨコハマアートサイト「動物園劇場」(179人、Vo12人) 野毛山動物園等、地域の施設との連携 小学生が色染めに参加、センター利用者がダンスとジャグリングを披露
10月	・青少年委員会「ふりふらハロウィン」(102人、Vo13人) ・西区地域連携「ログハウスのハロウィン」
11月	・「音作り講習会」(4バンド13人)
12月	・「10周年記念@楽祭」(出演者119人、来場者254人、青委6人) ・青少年委員会「かどもっちい〜」 ・青少年ライブ「年末騒音ライブ〜赤いアイツのプレゼント〜」 ・ふらっとカフェ「SETA CAFE」(コーヒーを飲みながら、最近のことについて語り合い交流!) ・青少年持ち込み企画「ポケモン大会」
1月	・ふらっとカフェ「鍋パーティ」(大学生、受験生、高校生が参加し、学校のこと、最近のことなど、ざっくばらんに交流) ・ふらっとカフェ「ティーンズカフェ」脱カップ麺企画第1弾(ピザトースト、飲みものを提供)
2月	・ブルドックソース連携食育事業(青少年委員がおかず作りにチャレンジ!) ・「ふらっとカフェ」脱カップ麺企画第2弾(炊き込みご飯、豚汁を提供) ・「青少年の居場所づくり」全国フォーラム2013
3月	・「ジョブカフェ〜福祉の仕事編〜」 ・「ふらっとカフェ」脱カップ麺企画第3弾(ベーコンチャウダーを提供) ・「交流センター10周年記念式典」 ・「春の卓球教室」(協力:わかば卓球クラブ)

➤ 居場所づくりに取り組む仲間から

関係機関・団体の方々からのメッセージ
全国居場所フォーラムの仲間たち・フォーラムの変遷



これまで全国居場所フォーラムに参加して下さった皆さんの都道府県

今から7年前の平成 18 年 9 月、当時の貴施設の大槻館長さんと職員の七澤さん、富岡さんが当地の居場所「ホワイトキャンパス」を訪れてくださいました。玄関先に出迎えて、ビックリ！館長さんの運転で、はるばる横浜から水沢までおいでになったとの事。心なしかお車のあちこちが悲鳴を上げているように見えました。大変な労力と時間をかけてでも、“場”を一層充実・発展させたいという思いがヒシヒシと伝わってきました。頭が下がる思いでしたし、強い刺激を受けました。その「横浜市青少年交流センター」がこのたび 10 周年を迎えられましたこと、誠におめでとうございます。同時にこの 10 年のたゆまぬ営みに対しまして心から敬意を表します。

当市の「ホワイトキャンパス」は平成 11 年にオープンし、多くの子どもたちが多様な他者と触れ合い切磋琢磨しあいながら互いに成長を遂げています。一方、ここ数年利用者同士のトラブルが頻発、特に発達障害を抱える子ども同士の加減のない言動に起因するものが目立っています。

昨年夏、心の病を抱えて休学を余儀なくされた少女が「ホワイトキャンパス」を利用するようになりました。他者と様子が違う彼女に、一部の少年が暴言を浴びせます。精神の高揚を抑えきれなくなった少女は、奇声を発しながら彼らに反撃します。最終的には自虐的な行動に走ったり、時には気を失い救急車の要請をしたこともありました。通院中の少女に、「まずは静養に努めて、症状が落ち着いてから居場所に来て欲しい。」と穏やかに伝えたところ、「私の利用を制限するのであれば、あなたたちを訴えます！」と言われ、二の句が出ませんでした。彼女にとって、居場所は身体を張ってでも守りたい最後の砦だったのでしょか。子どもの幸せを願い開設している場所ではありますが、見守る大人がいてこそ成り立つ話。事態が好転しなかったことから、疲弊きったスタッフを守るために一度リセットすることを決断、一ヶ月間閉所しました。ただし、その間も“気になる子”たちとの関わりは持ち続けました。根っこを改善しなければ、前に進めないと考えたからです。「華麗なるパーティ」と称して、ツッパリの子たちと共にカレーを食べながら膝を交えて向き合いました。様々な取り組みが功を奏したのか、再開した後は大きな問題もなく今に至っています。

一部の心無い子どもたちの所作が目立ちますが、多くは健やかに成長しています。開設当初から居場所の運営にかかわってきた中高生が、「スタッフさんたちに頼りすぎていた。もっと、居場所の運営を主体的に考えていきたい。」と、居場所に掲げる二代目の看板作成に取り掛かり、新たなスタートを切っています。

思春期の子どもたちに向き合うことは容易ではありません。多くの大人は関わりを避けてしまいがちです。しかし、この世代こそが大きく揺れ動き、その多くが孤独感にさいなまれているのです。

彼らを受け入れ、共に歩む覚悟をもった大人や居場所が求められています。多様な他者との関わりが、青少年の自立を促進していきます。良いことも悪いこともつまびらかになる居場所では、そこにアプローチしていく可能性が広がり、そのことが多くの子どもたちの成長を支える希望へと繋がっていくと思っています。

ゆう杉並の変遷

ゆう杉並は、平成6年に開館に先駆けて、区内の児童館利用者の中高生43名で「中・高校生建設委員会」を組織し、約半年間、8回の会議を重ねました。そして、彼らの声を最大限に活かして、平成9年、全国初の中高生のための大型児童館としてオープンしました。

ゆう杉のコンセプトは、「中高生の声を活かした中高生が運営に携わる中高生のための児童館」です。ゆう杉並が中高生にとってより良い居場所であり続けるために、開館以来、「中・高校生運営委員会」を利用者の代表として組織し、試行錯誤を重ねながら、16期活動を続けてきました。ほかにも職員主催で「利用者懇談会」を不定期で実施し、利用者の声を運営に活かしています。

また、平成10年からは、ゆう杉並の公式部活動であるオフィシャルチームが発足し、ダンス、バスケ、クッキング等の多様なジャンルの活動を行ってきました。現在はボーカル、演劇の2つのチームが、館内の活動に留まらず、区内の高齢者施設などで発表も行い、社会貢献も視野に入れて活動しています。

平成17年からは、中高生が自らイベントを企画、運営する「自主企画実現システム」を導入し、職員のサポートのもと、例年30近くの多様な自主企画が実施されています。

平成18年には大学生ボランティアによるロビーワーク「スペースピア」が始まりました。学校や進路のことについて気軽に話せる場として、月2回、活動を続けています。

また、区内関係機関の担当者による「支援が必要な中高生を支える情報交換会」や、適応指導教室「さざんか教室」や都立荻窪高等学校との連携事業など実施し、支援が必要な中高生たちへのサポートも行っています。

これからのゆう杉並

ゆう杉並の次のステップのキーワードは「循環」です。

- ・ 自主企画や委員会等で力量を磨いた現役の中高生たちが、ゆう杉から羽ばたき、杉並区内はもちろん、広いフィールドで活躍し、力を蓄えてまたゆう杉に戻ってきて、身につけたものをフィードバックしてくれるような循環。
- ・ ゆう杉並を巣立った卒業生たちが、サポーターとしてゆう杉に戻り、現役中高生たちのためにサポートし、そんな先輩たちを見た利用者が、またサポーターとして、ゆう杉に戻ってくるような循環。
- ・ ゆう杉並の中高生支援を理解してくださる区内の地域住民や NPO 等と連携し、より良い中高生の居場所づくりを進めていく。そして、利用者が大人になったら、大好きなゆう杉並のために、地域住民としてサポートしてくれるような循環。

16年間、重ねてきた実践と経験を活かして、そんなプラスの循環を実現していきたいと思っています。

京都の青少年活動センターが「若者の居場所になる！」というフレーズで“居場所づくり”事業を始めてから、15年程が経ちました。半ば“偶然”に生み出されたこのフレーズは、しかし時代の要請するものに合致していたのでしょう。それ以来、変わらずセンターの基盤的な機能として位置づけられています。

当初は、「居場所が無いなど甘えている」「いい若いもんがだらだらしている」といった批判的な意見もあったのに、そのうちに行政が積極的にこの言葉を使い始めると、警察の人が「我が署でも居場所事業をやっている。子ども達を集めて剣道教室をやっているんです！」などとこの言葉を使うようになってきましたから、随分変わったものだと思います。しかしその反面、居場所という言葉の新鮮味が失われ、意味も拡散してきたと言えます。

また、早くから居場所という考え方に関心を持って取り組んできた人たちの間で、課題として語られるようになってきたのは、「居場所のその後」「居場所から社会へのつなぎ直し」ということでした。若者が居場所から次のステップに進むことにおける難しさがクローズアップされてきたのです。

そんな中で、現在進めている事業では、最初から「つながりを豊かにする」ことを意識した居場所づくりを考えています。居場所を持ちづらい、失ってしまった若者にとって必要なのは、安心できる場とともに、人とのつながりを紡ぐことだと思うからです。ひきこもる若者の一番の問題は、家から出られるかどうかというより、家族以外の親しい他者がいるかどうかということです。同様に学校に行けていない、無業の状態になっている、働いてはいるけれど過酷な環境にいる、という若者への関わりで重要なのは、彼／彼女らを孤立させないことです。しんどい状況に陥ったとしても、誰かが“つながっている”ようにする、そのためのつながりを紡ぐ場として「居場所」を運営することが有効なのだと思います。

ユースサービス協会のスタッフで、居場所のあり方を考えた際に、次のような「段階別機能」が考えられました。すべての居場所が、すべての機能をねらうのではなく、目標を明確にし共有できたらいいのではないかと思います。ということでそれぞれの居場所で何をを目指すのか、この機能の整理を使ってもらえたらどうでしょう？

居場所の段階別機能(それぞれの段階における関わり・運営のねらい)	
1	幅広い若者が活用することのできる居場所的空間がつくられる
2	様々な他者との出会いを通じて、居心地の良いだけでない、多様な関係性を築く機会がつくられる
3	自身の内面について触れ、課題や可能性について認識できる機会がつくられる
4	若者の内面的な自立(精神的自立)が促進されるための取り組みが行われる
5	若者の社会的自立が促進されるための取り組みが行われる
6	自立を支援するための支援組織間のネットワークが活用される

以下、祝辞です。

ふりーふらっと10周年おめでとうございます。とはいえ、あまり将来展望が明るくないことを残念に思います。今、10代の若者にとって地域での居場所、学校外活動の場、20代の若者にとって社会つながりを豊かにする場が、極めて重要になっています。横浜でそうした場が維持され、広がっていくことを願っています。

心情のゆるやかなつながりが生まれるとき

人が暮らしていく時に、「寄りあう場」は掛け替えのないものだ。高齢者も、子育て中のママも、働く大人も、子どもも、もちろん若者も、である。公民館や児童館、青少年交流センターなどは、そうした要望に裏打ちされて街のあちこちに生まれ、バブルを背景に大型化していった。

10年の節目という区切りではなく、この時代の大きな流れが押し出してきたキーワードは、「多様化」であり、人の有り様に当てはめると「個人化」であった。そのような変化を見据えた時、青少年施設はどこに向かうのか。

私と、私の仲間、「居場所ファンイン」を自分の住む街の中に持っている。それは、行政のものではなく自分たちのものなのだ。

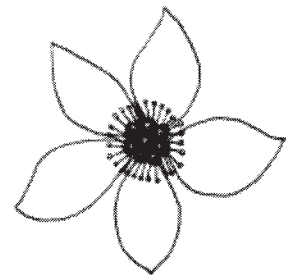
活動を始めて14年目が過ぎた。スタッフも子ども・若者も、自転車で、あるいは歩いて行ける場所で、「できることをできる範囲で」、という身の丈の活動が特色である。ささやかで小さな「寄り合い」であり、ときどき「休部」をしたり、「復活」したりしながら8か所がつながりながら支え合っている。

なぜ続けているのだろうか？それは「やめないからだ」と自問自答することになっている。活動している「みんな」もきっと同じ気持ちだと思う。

学校や家で、つらいことがあった時、仲間と話したくなった時、体を動かしたくなった時、「ふらっと」いける場が近くにあること、悩みを聞いてくれる人のぬくもりを感じることが出来ること、自分の「やさしさ」を見つけ、ほめてくれるおばさんがいること、そういうことすべてが、大人になるために必要なことなのだ。だからやめられない。

地域や社会の多様な大人の中に、子どもや若者を包み込む「心情」が醸成されていることは、安心して暮らせる街のシンボルである。心情を接着剤として人がつながっていくやさしい街をつくりたい。

多様化、個人化が進んでいる。青少年交流センターの10周年にあたって、センターが地域や社会とつながることを期待している。居場所に集まる子ども、若者が、多様な大人と出会うきっかけを通して、仲間をつくり、「大人になるという夢」を楽しんでほしいと思う。



横浜市青少年交流センター開館 10 周年おめでとうございます。

この 10 年を振り返って感じるのは、子どもたちがもっていき場のないストレスをためているということ。子ども自身が変わったというより、社会の急速な変化を受けて、子どもたちが暮らす家庭において、親たちが 2 極化する傾向がみられるように思う。

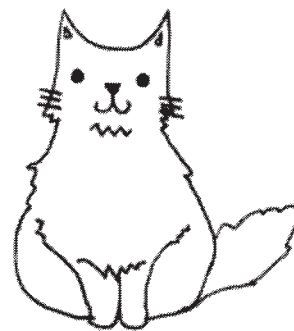
私のことで精いっぱい、子どものことまでかまっていられない。誰かなんとかして。子どもがどこに泊りに行こうがどうでもいい。誰がうちの子の部屋に泊りに来ているかも知らないといったネグレクト（養育放棄）傾向の親。

一方で、巷にあふれる情報に振り回され、「よその子に遅れをとると取り返しがつかない」と不安を抱える親。子どもに失敗させまいと先回りして塾や習いごとへと子どもを追いたてる。「正しい親」を演じなければという強迫感まで漂う。親から「正しさ」や「理想の子」を求められ、うちの中で「弱さ」にふたをし、つらい感情を外に出せずにストレスや怒りをためこむ子どもたち。親から「あなたのために」と差し出されたメニューをこなせず、親の期待に応えられないと自信を失う若者たち。

小学校 1 年生にして抗うつ剤を投与されて通ってくる子にも複数出会ってきた。「ふつう」「世間の常識」からちょっとでも外れたと思うと、精神科クリニックが紹介され、早期に診断名や障がい名がつけられる子どもが増えている。これも子ども自身の変化というよりは、ちょっとした違い（多様性）を受け入れる社会のキャパが小さくなってきているという側面を見逃すことはできない。

この 10 年、子どもと関わる中で感じることは、「ハウスはあっても、ほんと安心できるホームはない」という現実。

いたるところに「支援」という言葉があふれる社会の中で、資格がない、専門家じゃないから関われないという説明のもとに行き場を奪われた子どもたちが私たちのフリースペースを訪ねてくる。「支援の中身」は何か。それは本当にその子の「最善の利益」をかなえるものなのかを問うまなざしが求められている。もはや家族の枠にとらわれることなく、様々な背景を持つ異年齢の子ども・若者が、親でも先生でもない「第 3 のおとな」と一緒に過ごす「ホーム」（居場所）が求められている。毎日食事をつくって一緒に食べる。「おいしい・うれしい・たのしい」でつながる仲間がいて、ひとりじゃないと実感できる暮らしをとりもどすこと。地域社会で暮らし、育ちあう居場所の必要性がますます強くなってきていると思う今日この頃である。



「中高生のためにわざわざ居場所をつくる必要があるのか?」「悪さをするためのたまり場をつくってどうするのだ、商売の邪魔になる!」など、「青少年の居場所づくり施設」を開設する準備として地域の大人の皆さんに説明を行う時に、よく耳にしてきたフレーズです。そんな大人が自分の居心地の良い場所も含めて、青少年の居場所をなくしてきたのではと感じます。

しかし、多くの大人は、青少年を地域で育むことを理解されており、直接的な関わりは持たないながらも、地域での「青少年の見守り」を行っていることを居場所づくりに携わるようになり、実感しています。さらには、「青少年の居場所づくり」の活動が10年前と比べれば、認知されてきたことを強く感じます。

さて、神戸市の青少年の居場所づくりについて少しふれておきたいと思います。平成12年9月にこうべユースネットが運営・管理する青少年(中高生)の居場所づくり施設「ユースプラザKOBE・WEST」が須磨区にはじめて開設されました。現在は、「第6次神戸市青少年育成中期計画(2011～2015 年度5ヶ年)」の重点施策のひとつである「青少年の居場所づくりの推進」として、9施設を5団体で運営・管理を行っており、個性ある居場所づくりに取り組んでいます。



次に、「ユースプラザKOBE・WEST」(以下、ユープラ=愛称)の活動をふりかえりたいと思います。まず開設理念ですが、当初の運営手引きによると、多くの青少年の「自己肯定感」が弱まっていることを挙げ、ユープラにおいて、「煩わしいと思われる人間関係(コミュニケーション)の中から「自分らしさ」を発見しコミュニケーションのたまり場である「心の居場所」を提供することとなり、コンセプトは、「心のキャッチボール」ができるたまり場=心の居場所と掲げております。この設立当初の考え方は、今もなお、こうべユースネットの居場所づくり活動の理念に合致しています。



また継続した活動(事業)としては、中高生のライブ「Youth Culture Markets」事業があります。日頃の練習してきた成果を発表できる場づくりと、その活動が居場所となることを目的に実施していますが、音楽内容には変化があり、ハードなロックから、かなりやさしい音楽へと変わってきました。そして、関わる中高生にも変化を感じます。「時間もかけ情熱的に熱心な関わり」から、「他にもやりたいことがあり、時間はかけずにさらっとした関わり(人間関係を構築することに時間がかかる)」が多いように感じ、この関わり方を今後のひとつの課題と捉えて、煩わしいと思われる人間関係づくりから生まれる心の豊かさ=関わる大人がめんどくさいから逃げない!ことで、青少年(中高生)に無理なくそっと寄り添いながら、互いに成長することのできる場づくりに取り組みたいと思います。

最後に、「横浜市青少年交流センター 開館10周年」本当におめでとうございます。

横浜と神戸の良く似た地で、次代を担う青少年と共に、時代に即した「居場所づくり」に、より一層力を入れて取り組みましょう。

青少年交流センターとともに

ここ数年私たちを取り巻く社会の状況も大きく変わり、このところの少子化、高齢化の進行や人口減少社会の到来、産業構造の変換や働き方の変化などに見舞われている。特に若者たちを取り巻く環境は様々な情報があふれ、生活は便利になったが、人間関係の希薄化により社会性や協調性、連帯感をはぐくみにくくなっている。

私たちはこのような若者たちをめぐる様々な課題について考え、青少年活動の推進に向けての支援、青少年活動の調査、研究、社会への提言などの活動を行っている。

この中で青少年活動の推進や若者たちの自立、社会参加の促進のため「青少年の居場所」に注目、全国の都市における「青少年の居場所」に関する調査、研究など様々な活動をしてきた。

これらの活動の一つとして「青少年の居場所づくり全国フォーラム」を行っている。横浜や東京を中心とした青少年関係団体やNPO関係者、学生、研究者などが実行委員会に集まり毎年企画段階から議論をしながら創り上げている。そして全国から青少年団体関係者、行政職員、NPO関係者、学生、研究者などの青少年に関わる幅広い参加者が集まり熱い議論や交流が繰り広げられている。

おりから横浜市青少年交流センターが青少年の交流施設として再整備されオープンした。それ以来毎年横浜市青少年交流センターとともに開催している。ここは青少年の居場所としての施設の役割もあり全国からの参加者に見てもらいながら青少年の居場所づくりについて発信している。

この青少年交流センターが10周年を迎えた。この間、現場で働く職員をはじめ関係者の皆さんの努力で着実に歩んでいる。利用者も定着、全国的な知名度も高まった。

若者たちが自らを見つめ、他者とのかかわりを学び、社会参加するきっかけづくりとしての青少年施設の役割は大きいものがある。また、居場所づくりなど地域で青少年を支援している関係者や団体などとの交流や連携、情報発信基地としての役割もある。

野毛山に今でいう「青少年の居場所」として1970年に横浜市勤労青少年センターがオープンした。そして10年前青少年交流センターとしてのリニューアルオープン、この2つオープン時にかかわりを持ってきた一人として多くの市民の関心を集め、ますます発展していくことを心から願っている。

「青少年の居場所づくり」全国フォーラム

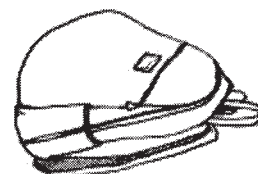
2006 年に第一回を開催した「青少年の居場所づくり」全国フォーラム(以下、フォーラム)は、その会場でもある“ふりふら”とともに毎年歴史を刻んできました。

かつての「青年教育」は、日本の高度経済成長を支え活気のある人間関係を紡いでいましたが、80 年代を過ぎると、その勢いは衰えていったと感じます。東京都や神奈川県の子供たちの家もこの頃、廃止されました。しかし、青年たちはいつの世も元気に存在し、時代の変化とともに新しい活動を生み出してきています。そんな青年たちの躍動感に期待を抱いている社会教育職員や研究者、Jr リーダーやボランティアリーダーとして子どもたちに関わっている学生、地域組織と NPO の協働を考えている市民、ワークショップによる学習方法を研究している活動家など、人との接点を大事に活動実践している仲間が集まり、フォーラム実行委員会を組織しました。日本都市青年会議がそれまで実施してきた「青少年教育職員セミナー」を土台に、「居場所」を切り口とした新しい学習会(フォーラム)で、全国にいる仲間たちとの交流を進めてきています。会議も手探りで、その話し合いの方法から確認し、毎回の自己紹介を大切に、それぞれの「思い」を出し合うことからスタートしました。新宿の居酒屋で始めた会議が懐かしく思えたりもします。

さて、おかげさまでここ数年のフォーラムは定員いっぱいの参加申し込みがあり、会場確保やスタッフの体制強化などの課題が生まれてきています。基調講演やシンポジウムにプラスして、分科会に分かれて議論する 2 日間で構成していますが、参加者は、元気印の若者はもとより、青少年教育に携わる行政や団体の職員・ボランティア、青年教育の研究者、多世代交流によるまちづくりを進めている方、支援を要する子どもや若者に関わっている方など、こちらもさまざまな分野で「居場所づくり」を考えている人たちが全国にいることを実感させられます。分科会では、「そもそも、居場所って必要なの？」という議論も当初から続けてきており、継続実施をしてきたことで、「居場所」の意義もみんなにとって味わい深くなってきました。

年に一度のフォーラムではありますが、それぞれの地域での活動を再確認し、刺激し合います。横浜市が野毛山の地に“ふりふら”を設け活動・事業を積み重ねていることが、フォーラムにとっても強みとなる「居場所」実践です。

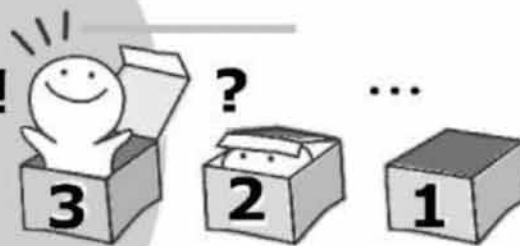
「自分が自分でいられる居心地が良い場所」であったり、「自分自身の存在を確認できる活動や仲間がいる」ということは、一人ひとりの育ちを豊かにしていくのではないのでしょうか？フォーラムでの問いかけは続いていきそうです。同じく、“ふりふら”の実績が全国に注目されながら今後も積み上がっていくことを期待しております。





「青少年の居場所づくり」全国フォーラム2013 「青少年の居場所、その先へ」

出会い！発見！



2013(平成25)年
2月16日(土)・17日(日)

対象：青少年教育関係者、青少年団体指導者、研究者(学生)、
青少年活動に関心のある方 100人

参加費：無料 送料・シンポジウムのみの参加可

会場：横浜市青少年交流センター

〈住所〉ふりーふらっと野毛山 / 横浜市西区南幸2-15 最寄り駅



《交通案内》JR・市営地下鉄「野毛駅」下車徒歩15分
京浜東北線「日ノ出町」下車徒歩7分

《新幹線で》
新横浜駅 徒歩10分
横浜駅 徒歩15分
横浜センター 徒歩10分

主催：日本都市青年会議所
(公財) よこはまユース



若者の自立支援

「青少年の居場所づくり」フォーラム2010

～みんなでつくる青少年の育ちの場～

いろいろな地域の人々と情報交換ができる！

居場所づくりの様々な事例を学べる！

人のつながりを広げることができる！ などなど

貴重な財産を得られる2日間

みんなで割りあける みんなのフォーラム



青少年活動をしている人、青少年活動に興味がある人、
青少年活動を推進している人、青少年活動に課題を感じている人
みんなまとめて フォーラムにおいでよ！

日時／2010(平成22)年

2月20日(土)～21日(日)

会場／横浜市青少年交流センター (愛称・みーろーと野毛山)

神奈川県横浜市西区老松町25 ☎045-241-0673

内容／20日(土)

午後 開会・公開シンポジウム・分散会

終了は18時頃を予定

※プログラム終了後、交流会を予定しています。

21日(日)

午前 分科会・全体会

終了は13時頃を予定

※詳細につきましては、ポスターに案内いたします。



対象／青少年教育関係職員、青少年団体指導者、青少年活動に関心のある方 100名

お問い合わせ／日本都市青年会連

☎ FAX 0426-68-5289 E-Mail mail@nattosei.com

※横浜市青少年育成協会

☎ 045-241-0674・FAX 045-242-0959

E-Mail furifura@yokohama-youth.jp

主催 日本都市青年会連／共催 横浜市青少年育成協会



「青少年の居場所づくり」全国フォーラム 経緯 (2006年から現在)

2006 年(H18) 2/10(金)～12(日)		2010 年(H22) 2/20(金)～21(日)	
テーマ	出会い！発見！ 私達 & 若者の居場所	テーマ	出会い！発見！私達 & 若者の居場所Ⅶ ～継続はチカラなり～
講演・ワーク ショップ等	フィールドワーク ・渋谷ファンイン ・世田谷BOP ワークショップ ・都市の緑と遊ぶ ・私の「いばしょ」クラフト ・プレイバックシアター ・手作り楽器～ダンス [総括講演]久田邦明(神奈川大学講師)	講演・ワーク ショップ等	分散会 [パネリストを囲み意見交換] ・辻幸志 グループ ・鈴木仁 グループ ・中野啓一グループ
シンポジウム パネリスト	・松岡美子(グリーンママ) ・岩間文孝(渋谷ファンイン) ・畠山礼光(KKリコー) ・七澤淳子(ふりーふらっと野毛山)	シンポジウム パネリスト	・辻幸志(NPO法人こうべユースネット) ・鈴木仁(渋谷ファンイン) ・中野啓一(小田原でこぼこの家)
分科会	①青年活動～Reスタート～ ②はじめの一步～居場所ってなかに～ ③子どもがいきいきする居場所 ～放課後・フリースクール・子どもの参画～ ④今、就労支援！ ⑤「してあげる論」からの脱却 ～援助を考える・失敗もありさ～ ⑥若者と話そう！若者と話そう！	分科会	①行政施策と子ども・若者の支援 ②障がい児・者の居場所はどこ？ ③イマドキの関係づくり事情 ④青少年に関わる大人って？ ⑤しゃべりBar“居場所”
2007 年(H19) 2/10(土)～12(月・祝)		2011 年(H23) 2/19(土)～20(日)	
テーマ	出会い！発見！無限大∞ 私達 & 若者の居場所Ⅱ～さあ新たな一歩～	テーマ	出会い！発見！私達 & 若者の居場所Ⅵ 変わりゆく青少年教育・若者支援 ～つながり、伝えていくために～
講演・ワーク ショップ等	[記念講演] 加藤和之 ー地球子どもの家ー みんなで語ろう	講演・ワーク ショップ等	[基調講演] 「青少年教育行政の戦後から現在」 高橋勝(横浜国立大学教授)
シンポジウム パネリスト	・高見啓一(NPO法人 FIELD) ・横浜市鶴見区職員 ・竹野優花(NPO法人かたりば)	シンポジウム パネリスト	・北見靖直 (国立中央青少年の家主任企画指導専門職) ・白水崇真子 (K2国際ソーシャルジャパン若年者就労支援事業総括責任者)
分科会	①居場所ってなかに ②こらば大森を訪ねよう ③居場所づくりと異世代協働の可能性 ④参加から参画へそしてアクションプラン ⑤再発見！学校という居場所 ⑥施設めぐり「百聞は一見にしかず」	分科会	①青少年育成から子ども・若者支援へ ー行政施策と住民活動の動向ー ②居場所のその先へ ー就労支援と居場所ー ③青少年施設と指定管理者制度 ー今、「公共」を問い直すー ④若者サポーター集まれ！ ーあなたの想い、聞かせてくださいー ⑤居場所ってなかに？ ワークショップ
2008 年(H20) 2/23(土)～24(日)		2012 年(H24) 2/18(土)～19(日)	
テーマ	出会い！発見！ 私達 & 若者の居場所Ⅲ	テーマ	出会い！発見！私達 & 若者の居場所Ⅷ 子ども・若者の「現代的課題を把握せよ」
講演・ワーク ショップ等	分散会 [パネリストを囲み意見交換] ・飯田正二 グループ ・嵯峨生馬 グループ ・中野哲宏 グループ [総括講演]永沢義弘(元邑楽公民館館長)	講演・ワーク ショップ等	[基調講演] 「激動の現代を生きる子ども・若者」 児美川孝一郎 (法政大学キャリアデザイン学部長)
シンポジウム パネリスト	・飯田正二(鶴見区生麦プロジェクト) ・嵯峨生馬(NPO 法人アースデーマネー) ・中野哲宏(福岡市子どもみらい課)	シンポジウム パネリスト	・嘉悦登 (NHK Eテレ青春リアルチーフプロデューサー) ・永松正則 (横浜市立十日市場中学校地域交流事業担当)
分科会	①今だから確認したい！居場所ってなに？ ②若者de語ろう！若者to語ろう ③市民参加型の地域づくり～今日からできる企画ワークショップ～ ④野毛山動物園であそぼうー ～身近な地域資源に目を向けて～	分科会	①我がまちにFitした子ども・若者支援 ②つながり～イマドキのリアル～ ③居場所を支える組織マネジメント ④子ども・若者支援と地域社会への再生 ⑤近すぎない・遠すぎないコミュニケーション
2009 年(H21) 2/21(土)～22(日)		2013 年(H25) 2/16(土)～17(日)	
テーマ	出会い！発見！ 私達 & 若者の居場所Ⅳ	テーマ	出会い！発見！私達 & 若者の居場所Ⅷ 青少年の居場所、その先へ
講演・ワーク ショップ等	[基調講演] 横浜から発信する青少年の居場所作り 横浜市子ども青少年局青少年育成課職員	講演・ワーク ショップ等	[基調講演] 「知りたい！平成を生きる子ども・若者」 萩原建次郎(駒澤大学教授)
シンポジウム パネリスト	横浜市各区事例 ・保土ヶ谷区ハピスク スタッフ ・中区ことぶき青少年広場スタッフ ・鶴見区「まちの力」で育む青少年育成モデル事業関係者 ・磯子区元気推進委員 ・都筑区青少年プラザ館長	シンポジウム パネリスト	・岩永牧人 (NPO法人ユースポート横浜理事長) ・今田麗 (元居場所づくりフォーラム実行委員長)
分科会	①私の居心地のいいトコロ ～若者が語る活動事例集～ ②居場所という拠点をどうつくる？ ～居場所作りのハードウェア～ ③スタッフ育成のコツと工夫 ～ユースワーカーの実際～ ④こんな所が“居たい所” ～居場所作りのソフトウェア～	分科会	①現代を生きる子ども・若者 ②若者主体の地域活動の現場 ③20 代からの居場所 ④つながり～イマドキのコミュニケーション～ ⑤居場所ってなかに？

➤ 歴代青少年委員座談会



青少年委員会座談会

「青少年委員会10年のあゆみ ―たくさんの価値観・人と関わる中で見つけたもの― 」



■出席者

森 正憲さん（第1～5期委員）
櫻木 萌季さん（第6期委員）
木村 衣里さん（第9～10期委員）

■コーディネーター

七澤 淳子（第1～5期担当職員）
早川 惟子（第9～10期担当職員）

■青少年委員会とは

青少年交流センターの設置趣旨である「青少年の居場所づくり・自立支援」の一環として、長期的なかかわり（委員会活動のすべて）から青少年が社会性を学ぶ場・機会。学校や職場の関係とは異なる、共通の目標を持つ年齢や環境・価値観の異なる委員たちの関係性から、協調性や思いやりの心を育て、自分の良さを知り、伸ばし、また自分の課題を知り克服できるきっかけを、自分自身で作り上げる場である。

【主な活動と役割】

- ・ 青少年に対するロビーワークや運営に関する助言
- ・ 青少年向けの事業の企画、運営
- ・ センター事業への運営補助
- ・ 定例会
- ・ 宿泊研修 他

【委員の対象年齢】

中学生から24歳までの青少年

■座談会の趣旨

今回は、青少年委員会の10年間を初期、中期、現在と3つに分け、それぞれの時期に活動していた（している）青少年委員3人に、活動について語ってもらった。ゼロからのスタートだった初期、ある程度活動の方向性や形が決まってきた中期、現在。それぞれに楽しさ、面白さがあり、また苦労があった。その中で見つけた「気づき」は何だったのか。そしてこれからの青少年委員会に向けて、伝えたいこと等を話してもらった。

◆森 正憲さん 30歳 社会人
(第1～5期委員)

○私の居場所
その時に居る場所全て

○私にとってふりふらとは
もう一つの母校



◆櫻木 萌季さん 25歳 社会人
(第6期委員)

○私の居場所
交流センター（ふりふら）
三浦半島

○私にとってふりふらとは
第2の家

◆木村 衣里さん 18歳 学生
(第9～10期委員)

○私の居場所
私が私らしくいられるところ

○私にとってふりふらとは
パワーと元気をもらえる場所



■ふりーふらっと野毛山（以下、「ふりふら」）に来たきっかけ。委員を始めたきっかけ。

木村：「夏期青年ボランティア（以下、「夏期ボラ」）に参加しました。ボランティアの時に委員会の活動を見て、同年代だけでなく色々な人たちと関わってみたいと思ったのと、委員が子どもたちと接する様子が自然ですごくいいと思ったんです。教員志望なのでもっと子どもたちと関われたらいいなあと思い委員に入りました。

森：僕は、ふりふら開館前から横浜ボランティア協会（※注：開館当時の運営団体）の事業にボランティアとして参加していたので、ちょくちょく遊びに来ていました。委員会発足時に職員から声をかけられて参加しました。

櫻木：僕は、浪人生時代に自習室を利用してだんだんとスタッフと親しくなり、時間がある時にイベントの手伝いをしたりしていました。受験終了後、スタッフに声をかけられたのと社会教育に関心があったので委員会に参加しました。

早川：発足当時は何も決まっていなかったと思うのですが、どんな活動をしていたんですか？

森：「委員会を知ってもらおう！」ということが一番でした。101号室の壁面に写真とプロフィールを貼ったような…「何かあったら委員に声かけて！」と。ふりふらも開館直後で「施設をどう作っていかうか」という時期だったので、委員もロビースペースをどういう風にしようかということにも関わっていました。テレビゲームのこととか…。

七澤：当時ロビーにあったテレビゲームは子どもから大学生まで人気で。でも、順番などでトラブルが頻繁にあったからスタッフ間でも意見が分かれていたので、委員に諮ってみようということになって。私は「いいんじゃない」と思っていて、委員は「いい」と言うと思っていたのに全員が「テレビゲームは良くない！」と。アレ？という感じに…この時、私も新人だったので「青少年は難しくておもしろい！」と勉強になりました（笑）。

■異なる年代、さまざまな価値観に揉まれる中で

七澤：毎年人が入れ替わってさまざまな年代の人がいる委員会。印象に残っていることも、大変だったこともそれぞれ違うと思います。

森：僕はすべてがゼロからだったので、何もかもが印象深いです。考えて作り上げた「かどもっちい〜」や「きもだめし」が今でも続いているのを見ると、正直嬉しいです。



櫻木：僕は、夏休み明けに体調を崩してしばらく来られなかった時、スタッフから「〇〇君が櫻木君はいつ来るの？」といつも待っているよ」と言われたことが印象深いです。嬉しくて温かい気持ちになった。僕がその子にとって、居場所のひとつになれているのかなと思いました。

木村：「きもだめし」ですね。委員がなかなか集まらない時期で、ボランティアが手伝ってくれました。私は夏期ボラと委員会、両者のつなぎ役になれたらいいなと思っていたので、みんなでできたことが嬉しかった。ちょうど委員会での意思疎通がうまくできていない時期で、トラブルやOBたちからダメ出しされながらも頑張れた！という思い出があります。

早川：色々な考え、年齢、前からやっている人と新しく入ってきた人…委員同士の関係も難しいよね。

木村：継続の人と新しい人たちとで、なかなかうまくいかない時期があつて話し合いを設けたことがありました。その中で、分けるんじゃなくてお互いの考えを尊重しようということになって。その話し合いがあったから、今はいい関係が築けていると思います。



森：僕の時は、年長者は出すぎず大変な時には引っ張ってくれたり助言してくれて、年下の子はパワーや元気があって委員会を盛り上げてくれた。僕はちょうど中間の年齢で。それぞれの年代が役割を果たして新しい人を迎えよう！としていた。当時の委員に感謝したいです。

早川：部活の上下関係とも違って、立場は同じなんだけど経験年数によって微妙な距離感ができたり、仲間意識が生まれたり。おもしろい組織だと思います。私も担当になった時「自分よりも委員会やふりふらのことをよく知っている委員」ばかりだった。職員としてどう関わるか難しい部分もあったけど、助けられたことが多かったかな。

木村：先輩たちは経験をしてきて「この方法では上手くいかない」ということが分かっているから、どうしても“鶴の一声”的に意見が決まってしまうことがあって。理屈では分かるんだけど納得できない部分もあって…気持ちの持っていきどころが難しかった時期があった。

櫻木：僕たちの頃も、そういうことが出てしまうことがあった。「分かっている人」と「分かっていない人」みたいに分かれてしまっ。どうしても「分かっている人」の意見が強くなってしまった。

■その立場になって分かること、立場が作った新しい自分

七澤：10年間で、現役も含めて委員OB・OGは100人を超えるんだよね。改めてすごいね。社会に出ると、木村さんや櫻木君が経験したことに似たようなことがよくあって。先輩の立場、後輩の立場、それぞれの難しさがあってその中でいかにみんなでいいものを作り上げていくかが求められるんだけど、その予行練習としてみんなが乗り越えられたのなら嬉しいです。そういう中で、みんなは委員同士で気を付けていたことはある？



森：委員長として「潤滑油になろう」と思っていた。新しい委員が参加しやすい雰囲気づくり、スタッフと委員の思いを聞いて・伝えて、いかに雰囲気づくりやしっかり準備ができるかを気を付けていました。

七澤：その雰囲気は次々と委員長に受け継がれていった。年長者はいつもサポートに徹して意見を聞いてくれていて、それを見て年下の子が信頼し、憧れながら活動していく様子がそばで見ていて手に取るようにわかった。

早川：年長者の委員に対しては憧れや学び、逆に反面教師的に見たり…人生の先輩のモデルをすぐそばで見られるというのは委員会の魅力の一つだと思います。では、逆に後輩や子どもたちから影響を受けたことはある？木村さんは2年目から「次の世代を育てなきゃ」と思ったみたいだけど…。

森：年下の子たちに「活躍の場を作ってあげたい」というのは常に思っていた。自分にはない考え方をたくさん持っていたし…支えたいという気持ちが自然に湧き上がってきた。お父さん目線ですね（笑）

櫻木：僕は利用者の子どもたちからもらったことがたくさんあります。頼ってくれたり、来るの

を楽しみにしてくれたりするのが本当に嬉しかった。自分が必要とされていると思いました。

木村：1年目はがむしゃらに突っ走って、それをフォローしてくれていたのは先輩たちだった。だから、今度は自分が年下の子にそうしてあげたいなと思っています。新しい意見が言えて、それを取り入れられる委員会にしたいです。



森：「立場が人をつくる」ということかな。年下の子や後輩ができて自分がしっかりしていく、そういう場があることも異年齢集団の良さだと思う。

木村：今は、意見を言いづらい子の話を聞くように気を付けています。なかなか言えない子には個別に聞くようにして…顔を見ていると分かるんです。何となく不満気だったり。だから「どうしたの?」「思っていることがあったら聞くんよ」って。最初は周りを気遣う余裕はなかったけど、自分もそうしてもらっていたんだということを2年目になって分かりました。

櫻木：その立場になって初めて分かるということだね。僕が委員だった時に一緒に遊んでいた小学生が今、委員として活躍しているんですよ。これは感慨深いものがあります。ここでは子どもから社会人になるまで成長具合をずっと見ていられる。子どもの頃はシャイだったのに、立派に人前で話している様子を見ると嬉しくて。これが「委員会が10年続いている」ということだと思います。



■委員会の中で見つけたもの

七澤：人との関係性の中で、嬉しいことも大変だったこともたくさん経験してきたんだね。みんなが本気で向き合ってきた経験だからこそ、影響や気づきもたくさんあるのかな。

森：僕は「色々な考えがある」ということを経験をもっと知ることができた。今の仕事は学生アルバイトが100人近くいるんだけど「みんなが違う意見を持っていていいんだ」と素直に受け入れることができています。

櫻木：僕は、“自己肯定感”を持つことができました。ちょっとしたコンプレックスがあって、あんまり自信が持てなかったんだけど、ふりふらで活動するとスタッフの人たちはみんな褒めて感謝してくれるんですよ！別に褒められたくてやっていたわけではないけど、すごく自分が認められたような気がした。僕が毎日のように通っていたのは、やっぱりそこが大きい。いつも温かく迎えてくれて、見ていてくれて。居心地がいい場所だった。

木村：私は“話し合う力”がつけました。今まで部活や生徒会では、主張する一方で聞く耳を持っていなかったと気づきました。委員会を通じて、色々な意見がぶつかっても最後にはまとまっていくという過程を経験することができました。



■「小さな社会」の中で ー子ども・仲間・スタッフー

七澤：そうだね。色々な年代の人が集まるから色々な意見や考えがあって、自分が教えられる立場から今度は教える立場になって役割がどんどん広がって…まさに小さな社会だと思います。みんなは、学校や職場外でこうした社会活動に参加することについてどう考える？



森：他にもボランティア活動をしていたのですが、その活動をしてみなければ知ることができなかったことがたくさんあります。その時はあまり意識してなかったんだけど、今、30歳になって改めて「大きかった」と思うんです。自分自身の引き出しが増えたというか…だから、思いがあったら参加することを勧めたい。むしろ社会人こそ仕事以外の活動にチャレンジすることで、大きく成長できる気がするんです。

木村：私は社会に出るまでにたくさんの活動に参加したい。そこで夢を見つけたり、逆に現実を見せつけられたり。いずれも将来に繋がると思う。単位のためにボランティア活動をする子が増えているけど、最初は単位のためでも、やりがいを見つけて続けることができれば成長できると思う。人のために時間を使うことは、結局自分のためになるんだと思う。



櫻木：大学のサークルでは同世代の人にしか会わないけど、ふりふらでは子どもから高齢者まで、話すだけでなく一緒に体験することができた。それが自分の考えを広げることにつながっています。ふりふらでは違う学校の子たちが一緒にドッジボールしたり、遊んだり話を聞いてくれるお兄さん・お姉さんがいたりする。それがとても羨ましいし、子どもにとっても色々な人と関わることはいいことだと思う。

僕の地域では同じ学校の子としか遊ばなかったのが、近くに同じような場所があったら良かったのと思います。

早川：来ている小中学生たちにとって、ふりふらはどんな場なんだろうね。

櫻木：僕は「話を聞いてくれる人を求めているのかな」と感じました。同世代や友だち同士では話せないことも、微妙な距離感だからこそ話せる人っていますよね。そういう人が子どもの頃に周りにいると、気持ちが楽になれるんじゃないかなと思います。

木村：子どもたちは自分の存在意義を確かめたいのかな、という風に思うことがあります。ふりふらには私たちボランティアもいるし、スタッフは悪いことをすればちゃんと叱ってくれるし、いいことをすれば褒めてくれるし。自分のことを見ていてくれる存在っていうか…怒りっぱなしじゃなくて、何が悪くてどうしたらいいのかまでフォローできて、そういう環境の中で育つことは大切だと思います。

早川：では、今度は「年上の存在」であるスタッフはみんなにとってどんな人たちだった？

木村：すごい大きな存在。最後は必ず助けてくれる。きもだめしの時「もう限界！」と思ってしまっ。そうしたらセンター長から「お前にとっての成功は何なんだ」と言われて。「みんなが最初に考えていた目標って何？子どもたちを楽しませたいと思って始めたんじゃないの」と言われ、そうだ！また頑張ろう！思うことができた。

櫻木：僕のことを認めてくれた存在です。交流センターで撮った写真とか子どもからもらった手紙とか、もらった賞状とかをランダムに貼ったノートを今も大切にしています。

森：時に師匠であり、先生であり、仲間であり…色々な表情を見せてくれた存在でした。館長にもたくさんの影響を受けました。20代の初めにスタッフの皆さんたちと出会えて本当に良かったと思っています。

■委員や青少年たちへ。そしてこれから作り上げていきたい「青少年委員会」。

森：みんなの話を聞いて思うことは“過去にこだわらなくていい”ということ。作ったものはいつか壊れていく。だからどんどん壊して新しいものを作っていける場になってほしいです。今の委員、これから委員になる青少年たちに伝えたいことは「ありのままで」。チャレンジして、ダメだったらまた違うものを探していけばいいんです。こういうことを言う自分はオジサンになったなあと思います（笑）。

櫻木：委員のみんなには、ぜひ日常的に子どもたちと遊んでほしいですね。委員は利用する青少年の代表だと思うので、普段の様子や子どもたちが考えていることを見て、活動に生かしてほしいです。そして、僕は子どもたちに「一緒に遊んでくれてありがとう！」というメッセージを送りたい（笑）。子どもと遊ぶ時、いつも自分も子どもだった時の楽しい気分に帰れるんです。そういう時間を与えてくれてありがとうと伝えたい。

木村：私は現役委員としてこれからのことを考えると、委員だけでなく、ふりふらに來ている色々な立場の青少年が関われる場を作っていく委員会でありたいです。あとは今日、森さん、櫻木さんと話して、とても気持ちも楽になったし委員会をもっと頑張るぞ！という気持ちになれました。何かあれば相談できる人、頼れる人がいるんだと心強く思います。

七澤：あらためて「青少年委員会」という場が、“人との関係性”の中でたくさんの価値観に触れながら影響を与え合って、自分自身を見つけていく場なんだと思いました。それはスタッフが作ったのではなくて、この10年間で関わってくれた委員のみんながそういう場にしてくれたんだと思います。これからも、委員会やふりーふらっとがそういう場であり続けることを願って…木村さん、早川さん、よろしくお願いします！



➤ 青少年委員会のあゆみ

年表

歴代委員ショートメッセージ



青少年委員会10年のあゆみ

【H15年 第1期】委員長：森正憲 副委員長：中島由晴 担当職員：七澤

委員数 19人 内訳) 中学生3人、高校生8人、大学・専門生4人、社会人4人	
トピック	・第1回定例会【10月】 開館1周年記念事業実行委員と、愛称選定委員を委員から選出 ・部会制度発足【11月】 大人数が効率的に活動できるように「広報部会」「行事企画部会」「センター部会」に別れて活動 ・テレビゲーム設置についてのアンケート【12月】 予想に反し、委員からは「ゲームは置かない方がよい」との意見が！

【H16年度 第2期】委員長：森正憲 副委員長：中島由晴、大石碧 担当職員：七澤

委員数 10人 内訳) 中学生1人、高校生1人、大学・専門生3人、社会人5人	
トピック	・広報紙第1号発行！【9月】 ※この年は計3号発行 委員内で名称を募集し「君にふらっと☆」に決定！ ・ゆう杉並中高生運営委員会と交流【10月】 ・主催イベント「かどもっちい〜」【12月】 155人ものが参加！門松づくりと年賀状づくり、もちつきをおこないました。

【H17年度 第3期】委員長：峰尾真維 副委員長：大石碧、荘司優子 担当職員：七澤

委員数 8人 内訳) 中学生1人、高校生2人、大学・専門生1人、社会人4人	
トピック	・主催事業「ワイワイおやつタイム」開始！ 第1回目はクッキー。このあと毎月継続する人気事業に発展。 ・TVK「Hi! 横浜編集局」に出演。中田横浜市長からの取材を受ける【1月】 ・ゆう杉並中高生運営委員会【1月】 今年は横浜に招いて、委員がみなとみらい・中華街を案内しました。

【H18年度 第4期】委員長：大石碧 副委員長：柏木元樹、山本和音 担当職員：七澤、福田

委員数 11人 内訳) 高校生4人、大学・専門生3人、社会人4人	
トピック	・夏休みイベント「きもだめし」史上最長コースに！【8月】 ・宿泊研修【10月】 ハロウィン準備で徹夜… ・ハロウィンパーティー開催【10月】フェイスペイントに挑戦！のべ74人が参加。 ・野毛山動物園「ふらっとたんけん隊」引率補助【12月】 ・お別れ合宿実施【3月】 ボーリング大会&寿司パーティーで大盛り上がり。 ・ゆう杉並「ACTIVE FESTA」見学【3月】

【H19年度 第5期】委員長：金子晴香 副委員長：浜辺隆博、三宅空也 担当職員：阿久津、七澤

委員数 20人 内訳) 中学生1人、高校生4人、大学・専門生12人、社会人3人	
トピック	・過去最大！委員が20人に！！ ・広報紙「君にふらっと☆」第10号発行【8月】※この年は3号発行 ・お別れ合宿【3月】 深夜の卓球大会で大盛り上がり！ ・卒業企画「わいわいお弁当タイム」実施【3月】 はじめて外に出る事業に挑戦！

【H20年度 第6期】委員長：小田島春星 副委員長：櫻木萌季、重田友恵 担当職員：山田、高橋、遠藤

委員数 22人 内訳) 中学生1人、高校生2人、大学・専門生16人、社会人3人	
トピック	・「わいわいおやつタイム」が大人気。【6～3月】 各回定員12人のところ、毎回平均14人の参加がありました。集大成としておやつタイムレシピ集も発行。 ・中学生夏期青年ボランティアの募集。 初めて中学生の夏期ボラを受け入れたので、青少年委員が事前研修や活動の引率を行い、振り返りも行いました。 ・ゆう杉並「中高生運営委員会」の皆さんを招いて交流会【11月】 一緒に昼食(カレー・ナン)を作り、意見・情報交換をして、野毛山動物園へ。 ・タイムカプセルイベント実施 未来の自分に向けて手紙を書いてもらい、2年後に参加者に郵送しました。

【H21年度 第7期】委員長：浜辺隆博 副委員長：金子晴香、井料顕仁 担当職員：山田、菊池

委員数 23人	内訳) 中学生2人、高校生7人、大学・専門生11人、社会人3人
トピック	・ふりふら夏祭り開催【7月】 雨にもかかわらず大盛況。コーディネーターさんの協力で、浴衣着付けコーナーも。 ・小学生対象の茶道お点前体験【9月】 交流センター利用団体「萌木の会」さんの協力で、実現。 ・横浜開港博に参加【9月】 「携帯電話」というテーマで、高校生・大学生世代と大人世代でディスカッション ・ふりふらフェスタ2010【3月】 模擬店、カードゲーム大会、スポーツ大会、クラフト等盛りだくさんの内容で開催。子どもたちの楽しい春休みの思い出に。

【H22年度 第8期】委員長：三宅空也 副委員長：橋本宇宙、船越まどか 補佐：室井信一 担当職員：菊池、岸

委員数 22人	内訳) 中学生2人、高校生11人、大学・専門生7人、社会人2人
トピック	・青少年委員宿泊研修 in 野島青少年研修センター【6月】 ・夏期青年ボランティア事前研修会にてアイスブレイキング担当。【7月】 ・ふりふら夏祭り開催【7月】 夏期青年ボランティアと一緒に。焼きそば、じゃがバターなど大人気。 ・広報誌を2号発行。第20号【10月】、第21号【1月】 ・主催事業「きもだめし」 今年のテーマは、「本当にあった怖い病院」交流センターが一夜限りの病院に・・・ ・3月11日に東日本大震災が発生。 春休みに予定していた「センター感謝 Day」は中止。31日まで臨時休館に。

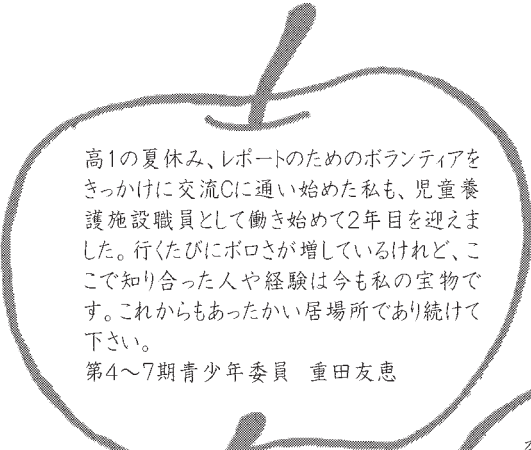
【H23年度 第9期】委員長：石木田諒 副委員長：三宅空也、室井信一 担当職員：阿久津、早川

委員数 24人	内訳) 中学生2人、高校生16人、大学・専門生5人、社会人1人
トピック	・新規委員、継続委員、Co、職員で交流会。1年間よろしくお願いします！【6月】 ・青少年委員主催の夏祭り【7月】 ヨーヨーつり大人気。お客さんがいつのまにかお店の人役に・・・ ・主催事業「きもだめし」参加者171人【8月】 ・青少年委員宿泊研修 in 野島青少年研修センター【11月】 コミュニケーションやファシリテーション、キャンドルファイヤーの研修を行う。 ・ゆう杉並施設見学&中高生運営委員会の皆さんと交流会【3月】 大いなる刺激を受ける。

【H24年度 第10期】委員長：橋本宇宙 副委員長：信藤優、室井信一 担当職員：早川、関、古矢

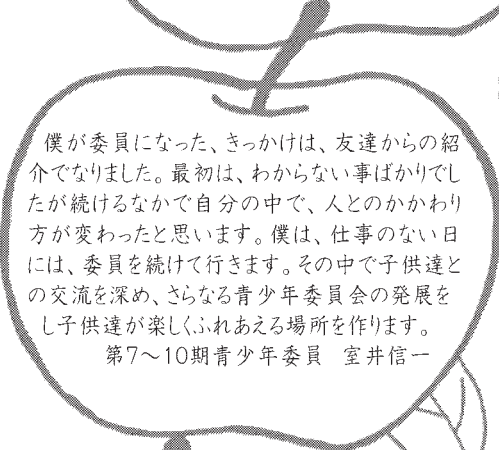
委員数 11人	内訳) 中学生1人、高校生6人、大学・専門生4人、社会人0人
トピック	・緑のカーテン（ゴーヤ・朝顔）を作るため種まき。【5月】 ・主催事業「きもだめし」テーマは『洋館』【8月】 ・宿泊研修で、チームとしての合意形成研修を行う。夜中まで話し合い（おしゃべり）【8月】 ・野毛山動物園、野毛山荘、野毛山公園、と連携しのイベント「動物園劇場」に出展。【9月】 青少年委員は広報紙つきの焼きそばを販売！ ・「目安箱」設置！【9月】 話し合いを重ねて、意見や要望に対する回答を行いました。思っていたよりなかなか大変・・・ ・ふりふらハロウィン【10月】 職員も仮装して、フェイスペイントして、ハロウィンを思いっきり楽しむ。 ・主催事業「かどもっちい〜」【12月】 ・「わいわいおやつタイム節分編」恵方巻づくりと豆まき！委員が鬼役に！【2月】 ・ブルドッグソースさんの協力で「簡単料理教室」【2月】 いつもは教える立場の委員が料理を教えてもらい、発見がいっぱいありました。





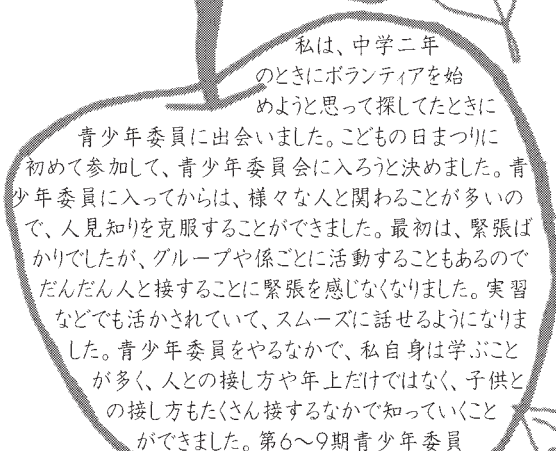
高1の夏休み、レポートのためのボランティアをきっかけに交流Cに通い始めた私も、児童養護施設職員として働き始めて2年目を迎えました。行くたびにボロさが増しているけれど、ここで知り合った人や経験は今も私の宝物です。これからもあったかい居場所であり続けて下さい。

第4～7期青少年委員 重田友恵



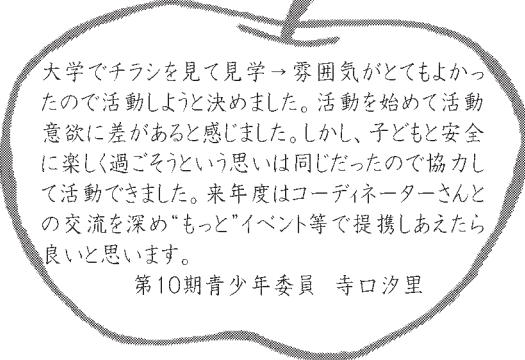
僕が委員になった、きっかけは、友達からの紹介でなりました。最初は、わからない事ばかりでしたが続けるなかで自分の中で、人とかかわり方が変わったと思います。僕は、仕事のない日には、委員を続けて行きます。その中で子供達との交流を深め、さらなる青少年委員会の発展をし子供達が楽しくふれあえる場所を作ります。

第7～10期青少年委員 室井信一



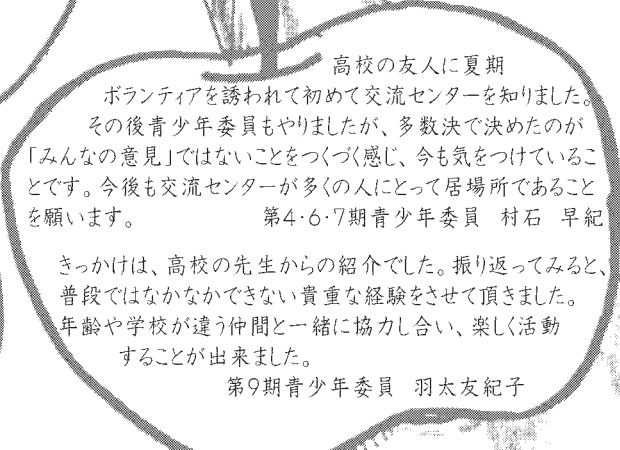
私は、中学二年のときにボランティアを始めようと思って探したときに青少年委員に出会いました。こどもの日まつりに初めて参加して、青少年委員会に入ろうと決めました。青少年委員に入ってから、様々な人と関わる事が多いので、人見知りを克服することができました。最初は、緊張ばかりでしたが、グループや係ごとに活動することもあるのでだんだん人と接することに緊張を感じなくなりました。実習などでも活かされていて、スムーズに話せるようになりました。青少年委員をやるなかで、私自身は学ぶことが多く、人との接し方や年上だけではなく、子供との接し方もたくさん接するなかで知っていくことができました。第6～9期青少年委員

船越まどか



大学でチラシを見て見学→雰囲気がとてもよかったので活動しようと決めました。活動を始めて活動意欲に差があると感じました。しかし、子どもと安全に楽しく過ごそうという思いは同じだったので協力して活動できました。来年度はコーディネーターさんとの交流を深め“もっと”イベント等で提携しあえたら良いと思います。

第10期青少年委員 寺口汐里

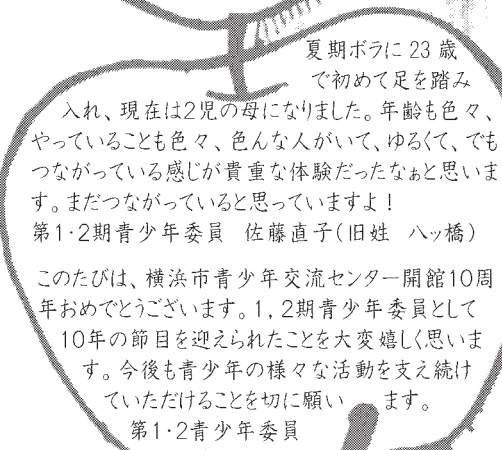


高校の友人に夏期ボランティアを誘われて初めて交流センターを知りました。その後青少年委員もやりましたが、多数決で決めたのが「みんなの意見」ではないことをつくづく感じ、今も気をつけていることです。今後も交流センターが多くの人のにとって居場所であることを願います。

第4・6・7期青少年委員 村石 早紀

きっかけは、高校の先生からの紹介でした。振り返ってみると、普段ではなかなかできない貴重な経験をさせて頂きました。年齢や学校が違う仲間と一緒に協力し合い、楽しく活動することが出来ました。

第9期青少年委員 羽太友紀子



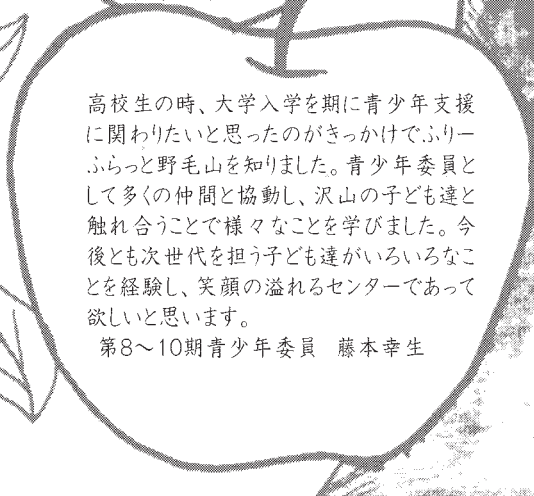
夏期ボラに23歳で初めて足を踏み入れ、現在は2児の母になりました。年齢も色々、やっていることも色々、色々な人がいて、ゆるくて、でもつながっている感じが貴重な体験だったなぁと思います。まだつながっていると思っていますよ！

第1・2期青少年委員 佐藤直子(旧姓 ハッ橋)

このたびは、横浜市青少年交流センター開館10周年おめでとうございます。1,2期青少年委員として10年の節目を迎えられたことを大変嬉しく思います。今後も青少年の様々な活動を支え続けていただけることを切に願います。

第1・2期青少年委員

中島由晴



高校生の時、大学入学を期に青少年支援に関わりたと思ったのがきっかけでふりーふらっと野毛山を知りました。青少年委員として多くの仲間と協働し、沢山の子ども達と触れ合うことで様々なことを学びました。今後とも次世代を担う子ども達がいろいろなことを経験し、笑顔の溢れるセンターであって欲しいと思います。

第8～10期青少年委員 藤本幸生

大学だけでは
出会えないいろんな世代の人たちと関
わりたと思って始めました。イベントひとつづ
くにも多くの人の協力で成り立っていると実感
できました。いろんなバックグラウンドを持つ人の
意見を尊重する姿勢が身につきました。今、
地域の中での【場】が必要とされていると思
います。センターがHUBとなって、こどもから
大人まで人をつなぐ場となってもらいた
いです！こどもたちが気軽に来れる温か
い場であり続けてください。

第5・6期青少年委員
篠森由加里

僕は、青少年委員2年目です。最初
に入った理由は学校に紹介のチラシが来
て合宿にひかれたからです。1年目では人
見知りがあり、今年は様々なイベントを通し
て自分自身の成長もでき、特におやつタイム
などで料理できるのが貴重な体験になりま
した。そしていろいろな方と知り合えてよ
かったです。

第9・10期青少年委員 信藤優

推薦入試のために
青少年委員を始めました。
活動していくと高校生なのにすごく利用者さん
や子どものことを考えていてすごいと思いま
した。職員さんがあたたかく私達の話をよく聞い
て下さるのでイベントもすごくスムーズに進んで
いると感じています。これからセンターで
ヨガ教室とかフリーマーケットとかした
いです！

第9・10期青少年委員
中川万里乃

自ら青少年の居場所に関係するイ
ベントを企画したいと思い委員をや
りました。周りの方のお力添えもあり自
分のやりたいことを達成でき、それが
以後主体的に行動する原動力とな
りました。センターには、どんな人でも
包摂する成長空間であって欲しい
です。

第6～9期青少年委員
辻悠一

やっぱり、コーディネーターさんが紹介
してくれた所からやるきっかけになっ
たのがですね。小学生の頃に遊び相
手になってくれた夏期ボラさんと遊ん
だのが楽しかったので自分もそうなれ
たらなあと思い今の自分があるすか
ね。子供達の笑顔、最高ですね！
目安箱に期待して、大丈夫ですね！

第7～10期青少年委員
望月秀夫

子どもと
何か一緒に
遊んだり活動したいと思っていて、
同級生に誘ってもらい始めました。活動し
てみて、企画を立案するのって難しいと思
いました。センターにいる人来る人は、いい人ば
かりでした！また、全体に説明したり指示したり
する経験は今役に立っていると思います。
これからは今まで取り組んできたイベントの
良いところを引き継ぎつつ、新しい企画や
イベントへのチャレンジをしてほしいです。

第5～7期青少年委員
小田島春星

私は中学三年生のときに5つ上
の青少年委員の人と交流センタ
ーで知り合い、活動しているの
を見て一緒に参加したいと思いま
した。たくさんの人と知り合うことで、
リーダーシップやコミュニケーショ
ン力がついた。たくさんの考えがあ
ることを知った。

第7～10期青少年委員
橋本宇宙

以前からボランティア活動に興味があ
り、市内で活動出来る青少年委
員に興味を持ちました。青少年委
員として活動する中で意欲的にメン
バーと向き合い、企画を最後まで
やりきる能力を培うことが出来たと考
えます。

第8・9期青少年委員 横溝知美

私が委員に
なったき
かけは高1の
時に夏期ボラをして、イベントなどを通
して委員の人と関わることで、指示の出
し方など教師を目指す私にとって勉強に
なる部分が沢山あり、委員をやってみ
たいと思いました。私は委員の活動を通
して、2つのことを体得しました。話し合
う力と自分が動くだけでなく周りを見渡
し皆を同時に引っ張っていくことの大切
さです。私は今年度の反省を来年度の活
動に活かして行きたいと思っています。

第9・10期青少年委員
木村衣里

◆青少年委員会の活動の様子



➤ 夏期青年ボランティア活動・社会教育実習生受入れ

事業紹介

実習生インタビュー

夏期ボラ振り返りシートから

夏期ボラショートメッセージ



夏期青年ボランティア活動と社会教育実習生の受入れ

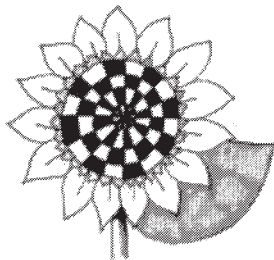
交流センターでは開館以来一貫して、青少年に、人と人の関わりの中で成長していくことを目標に、ロビーワークを通じてフリースペースの常連やセンターを利用しているグループに声をかけ、皆の協力のもと様々な事業を実施しています。

夏期青年ボランティア活動と社会教育実習生の受入れは、『スタッフ体験を通じ、様々な人との関わりの中で青年が成長できる機会を提供すること』『青年の手により、利用者の育ちの機会が充実すること』の二つの“ねらい”があります。

夏期青年ボランティア活動は、夏休みに遊びに来る小中学生に、スタッフ以外の多くの人に話し相手や遊びのサポーターとして関わってもらふことと、青年にボランティア活動の場を提供することを目標に開館当初から事業化しています。

社会教育実習生の受入れは、2008年度に交流センターが幾つかの大学に呼びかけ、試行的にインターンを受け入れたことがきっかけとなりました。翌年度から駒澤大学や湘南工科大学の教科単位取得のための実習先として位置付けられ、実習生の受入れが始まりました。

交流センターに関わるきっかけは、それぞれの事業で異なります。しかし、子どもから大人まで多くの人と触れ合い、様々な価値観や考え方に触れ、成功と失敗を繰り返しながら、人と人との関わりの中で自分の目標を確認したり気づきを得たり…と、青年たちにとっては、多くの学びがある貴重な体験活動となっています。



夏期青年ボランティア活動

【目的】

- ①ボランティア活動を通じて青年の協調性や社会性を養成する。
- ②異年齢間交流の場を提供する。
- ③青年のボランティア活動のきっかけの場とする。
- ④対象事業に参加する小・中学生にとって、年齢の近い青年ボランティアが活動をサポートすることで、小・中学生自身の成長を促す。

【実施内容】

対象は高校生以上24歳未満（H24年度）。定員40人。夏休み期間中、毎日午後1時から6時の間、3時間毎の2グループに分かれ活動する。日々の基本的な活動内容は、センターに来館する子どもたちの遊び相手になること。安全に配慮しながら、夏のあいたの子どもたちの「お兄さん、お姉さん」となり、料理教室やきもだめし等の様々なイベントの運営スタッフとしても活動する。1グループ1～6人程度。夏休み期間中に1人5日間以上活動することが条件。夏期青年ボランティア登録にあたって、ボランティア活動が初めてでも、活動のイメージを持ちやすくするため事前の説明会に参加することが必要。登録後、活動前にボランティア全員を対象に事前研修会を開いている。これは、ボランティアと一緒に活動する仲間と知り合い、自身も関わる子どもと安全に楽しく活動できるよう行っている。また夏休み期間の終了時にボランティア全員を対象に事後研修会を行い、自身の活動の振り返り、他のボランティアと気づきを共有している。

社会教育実習生受入れ

【目的】

- ①居場所での実習場所を提供することにより、青少年を支える人材を育成する。
- ②センターで活動する青少年に、異年齢交流の場を提供する。
- ③実習活動を通じて職員の指導能力を向上させる。

【実施内容】

1日6時間程度、7～14日間実習生としてセンターの日常業務（ロビーワーク、利用受付、イベント準備、事務作業等）を体験する。実習中は、必ず1日の活動の初めと終わりに、職員との打合せと振り返りを行う。活動中は随時、職員・コーディネーターがアドバイスをを行い、実習生自身の気づきを促す。子どもとの関わりだけでなく、行われている事業の企画・運営にも携わってもらい、裏方の業務も体験し、交流センターをとらした「社会」と触れてもらう。

☆ 実習生インタビュー

- ① 交流センターを実習先として選んだ理由は？
- ② 実習を通して感じたことは？
- ③ 交流センターに期待することは？

H24 年度 駒澤大学 3 年 大賀 千裕

- ① 地元で実習すると長期間実家に戻らなくてはならず、親に負担になるのが嫌だったので、学校の指定となっていた交流センターにお世話になることにした。
- ② 交流センターの存在や働きについて知らなかったが実習を通して地域、特に子供たちへの大切な居場所になっていることも学んだ。
 - ・またこの居場所づくりも容易なことではなく職員さんたちの大変な働きかけが必要であることも知った。
 - ・特に都会に暮らす子供たちの生活のようすを間近で見ること、その中にある問題や課題などに気付き、考えることができた。
 - ・教師を目指しているので、実習で学んだこともたちの問題や課題について考えさせられる機会が持てたことはいい経験になった。
 - ・学校も子どもたちを教育する上で交流センターのような学校外の地域の方々との連携を重視していくべきだと改めて感じることができた。
- ③ 他の施設に行った実習生の話を聞くと基本的に事務的な作業が多く、利用者のかたとのふれあいの時間が少なかったときいた。私はふりーふらっとのように職員さんや利用者のかたとのふれあいの時間が多かったからこそ 2 週間という短い期間の中で多くのことを学べたと思った。是非ふりーふらっとのようなあたたかな場所での実習を勧めたい。

H24 年度 駒澤大学 3 年 根本 憲

- ① 地元の名古屋市教育委員会にお願いするか、ふりふらにお願いするかを考えた時に、地理的に、また実習時期を制約されないふりふらにお願いした方が、大学生活との両立が出来ると思ったからです。また、私が受講していた社会教育実習の萩原先生が過去に調査、研究をしていた教育施設だったので、その点でも興味がありました。
- ② 様々な人が様々な環境のもとで生活をし、そこには人との繋りや居場所、環境を求めて、ふりふらに来ている人が多いということを感じました。社会教育施設は全ての人、求めてやってくる人を快く受け入れてくれる場所、施設にこれからもなってほしいです。

そして、今実習を終えて学んだことは、人はひとりでは生きていくことは難しく、笑顔や会話を共有出来る仲間の存在があってこそ自分の自分ということを改めて感じました。仲間を大切に、人に優しく義の心を忘れずに接していくことの大切さを学びました。
- ③ 今後社会教育施設に期待することは、その施設がある地域のニーズに応えた活動や役割を柔軟に進めてほしいです。また数多くの人に知ってもらえるような存在(施設)になってほしいです。

H24 年度 立教大学 4 年 川村 藍

- ① 私は大学で「学校の教育課程の教育活動を除く青少年や成人に行われる教育活動」を勉強し、居場所作りを支え青少年の社会性や気づきを育む環境を作るというひとつの生涯学習を知りたく交流センターに実習をお願いしました。
 - ② センターで青少年自身が居場所をつくり人と関わり社会性などを身につけ成長し、また新たな居場所へ進むと思いました。青少年が「学校での教育」や「センターでの自然と学ぶ場」を持つ事で悩みを持つ事もあると思いますが、人と繋がりながら成長すると感じます。
 - ③ 青少年を始め様々な年代の方がふらっと立ち寄り、1つの社会を作るというお話がとても心に残っています。センターで学んだ青少年が成長し色々な所でイキイキしながら自分の居場所を作って大人になってほしいです。それは実習に来る大学生にも言えると思いました。大学生と子ども達の交流も大切だと感じました。
-

- ① 交流センターを実習先として選んだ理由は？
 - ② 実習を通して感じたことは？
 - ③ 交流センターに期待することは？
-

H24 年度 駒澤大学 3 年 嶋原 とも子

- ① 地元の横須賀市では社会教育実習の受け入れを行っていないため、大学指定の実習先である、ふりーふらっとで実習させていただきました。
- ② 小学生や中学生との関わりのなかから、彼らがどのような思いや背景から、ふりーふらっとを利用しているのかが分かり、ふりーふらっとのような施設がどのような役割を果たしているのか、また、このような施設の重要性を初めてじっくり考えることができました。

実習後、自分自身では分からなかったが、家族や周りの方々から「変わったね」や「自信がついたみたいだね」と言われることがありました。あの濃密な 14 日間で感じたこと、考えたことが、自然と顔つきや言動に表れているのかなと思います。

- ③ なくならないでほしいです！！

お世話になった職員、コーディネーターのみなさんに会える場所、たくさんの利用者の方々と交流できる場所でありつづけてほしいなと思います。実習生にとっても帰る場所、こころの拠り所の一つになっているので、形は変わったとしてもふりふらのあたたかさが存続する場所であってほしいと思います。

H24 年度 駒澤大学 3 年 中川 雄人

- ① 私の地元(横浜市都筑区)に交流センターが近く、横浜市にもっと貢献してみたいとの思いもあり、通うにも非常に安易であったため。また、過去に代々駒澤大学の先輩方が交流センターで社会教育主事の実習先としてお世話になっており、非常に安心感がありました。萩原先生と交流センターの繋がりが非常に大きかったと感じています。

- ② 私は大学3年生時、社会教育実習の実習生として14日間滞在し、交流センターを利用させていただきました。活動している中で、人との関わりが好きな私にとって最高の居場所だと感じました。特に心に残っていることは、普段どのような施設に行っても利用者として使う立場から職員さんとして特別な立場からお仕事をさせていただき、職員さん目線で利用者さんに関われたことです。それは交流センターに来てくれている子どもからご年配の方が笑顔で、快く利用している姿を見ていると、交流センターは幅広い世代に愛されているのだなと感じた瞬間でもありました。

現在は、私は就職活動中です。社会では人とのコミュニケーション力が必要不可欠とされています。同世代の人とすぐに打ち解けることができるからコミュニケーション力があるというのではなく、様々な世代の人と仕事のやり取りをし、会話を通じて仕事をこなし、打ち解けることが本当のコミュニケーション力だと社会人の方はおっしゃいます。私の対人能力、コミュニケーション力をより培わせてくれた場所はこの交流センターの実習といっても過言ではないです。

- ③ この「ふりーふらっと」を存続させてほしいことです。交流センターをなくしてしまつては、実習先がなくなるのは嫌ですし、長年あった居場所がなくなるのは人の心の大きな穴になってしまいます。だから絶対に私が何十年後にいつでも「ふりーふらっと」に帰って来れるような居場所であってほしいです！
-

H24 年度 駒澤大学 3 年 小林 博行

- ① 私は、実家(岡山県)のどちらかといえば田舎で過ごしてきました。社会教育実習という貴重な実習が行えるということで、「私の育ってきた環境とは違った青少年活動の場を知りたい」という思いのもと、交流センターで実習をさせていただきました。
- ② 交流センターを利用する青少年が、仲間を作っていく際に自ら声を掛けて輪の中に入っていくことは容易なことではありません。「一緒に卓球でもしてみない？」といった声掛けをすること、さらには一緒に活動をすることで、一歩ずつ仲間の輪に入っていくことができるきっかけを作る、という役割の大きさを実習生として実感しました。
- ③ 交流センターでは、利用者として、ボランティアとして、どのイベントにしてもあらゆる世代の方が関わっています。そうした人との関わりを通して、より多くの「絆」が育まれることを願っています。

H23 年度 駒澤大学 4 年 鈴木 真弓

- ① 地元交流センターのような施設が無かったので。
- ② 人と関わって学ぶことが子どもの成長には不可欠であり、多くの経験が将来を広げていくと感じました。
- ③ 地域の人が繋がる場所としていつまでも存在してほしいと思います。

H23 年度 駒澤大学 4 年 根本 秀樹

- ① 地元ではなく横浜の地域環境に触れ合いたかったため。
- ② 青少年の多様な価値観や、居場所作りの大切さを感じました。実習後は将来の夢を「検事」と定め、現在は司法試験に挑戦しています。
- ③ 「ボランティアから、人生が変わった」を後輩へ！

H23 年度 駒澤大学 4 年 河合 由加

- ① 交流センターでは小学生～大学生まで幅広い「青少年」に同時に関われることに魅力を感じたからです。
- ② 同じ青少年にカテゴライズされても小学生～大学生、更には大人まで様々な年代の方々に同時に関わることができる機会はなかなかないことだと思うので貴重な機会になりました。
- ③ 後輩にはボランティアとしてでもよいのでぜひ交流センターにきてみてほしいです！

H23 年度 駒澤大学 4 年 高橋 良和

- ① 交流センターで実習を行った先輩の体験談や感想を聞き、とても楽しそうなところだと感じたので、実習しようと思いました。
- ② 色々な職員の方々や子ども達と触れ合い、自分とは違った考えや様々な経験を得ることが出来、ボランティア活動やバイト、自分の人生自体を豊かにしてくれています。
- ③ 交流センターを利用する子ども達に職員達との関わり合いの大切さをもっと実感して欲しいです。それと交流センターは人と地域を繋ぐ大切な場所なので、いつまでも在り続けて欲しいです。(僕にとっても、かけがえのない場所なので)

H23 年度 駒澤大学 4 年 石原 由紀子

- ① 一番関わりたかった中高生が多く集まる場所と聞いたためです。
 - ② 良い意味で子どもは子どもだということ。口が達者な子も礼儀正しい子も、根本にある気持ちは同じだと知りました。おかげで誰に対してもより対等に話せるようになりました。
-

☆ 実習生からひとこと

H24 年度 日本体育大学3年 白井 ちづる

私がこの施設を選んだ理由は、ホームページを見て、アットホームな環境で個性を生かせる施設だと感じたからです。

一週間という短い実習期間ではありましたが、一日一日が濃い毎日で、日常では得られない発見・知識をたくさん得ることができました。

実習を通して、今よりもっと勉強して多くの体験をし、自分自身の視野を広げ、成長していきたいという気持ちになりました。

H22 年度 社会人 浜崎 亮太

当館は幅広い年齢層の方々が利用しており、社会教育を学ぶ者としてはとても良い勉強になるかと思い実習をさせて頂きました。

この実習を通しては、地域の方々が集まれる場所の重要性、そして、参加型ではなく参画型のイベントを行っていくことが大切であるという事を学びました。若者が中心になってイベントを運営していく姿はとても印象的であり、当館の原動力になっているという事を学びました。

H22 年度 大学院生 福島 翔太

当時、横浜市に住んでいたという事もあり、当センターを選ばさせていただきました。

2週間の実習は私に社会教育主事の仕事の重みと他分野にわたる専門的な知識が求められることを知る機会になったと思います。

H22 年度 社会人 小林 直人

私が青少年交流センターを実習先に選んだのは、青少年と接することで教員を目指すものとして学べるからだと感じたからです。実習の中では青少年の希望と未来ある輝きを見ることができ最高の経験ができました。

H22 年度 社会人 飯塚 尚代

開館10周年おめでとうございます。私が実習させていただいたのは3年前になります。

実習先を決めるにあたり一度見学に伺わせていただいたのですが、日曜日にも関わらず子どもたちが年齢を問わず楽しそうに遊んでいたのが印象的でした。その笑顔に惹かれ実習が始まりましたが、居場所とはどれほど大切な様々なイベントを通して考え感じる事ができました。

職員の皆様、利用者の皆様、本当にありがとうございました。これからも変わらない居場所であり続けて下さい。

H22 年度 社会人 小椋 奈々

10 周年、おめでとうございます！ 青少年の皆さんの居場所を提供する側になりたい。実際に体験してみたことで、その思いは強くなり、現在はそういった施設を増やすべく、不動産の立場からアプローチしております！

H21 年度 社会人 千明 準

私は学校以外の場で子供たちと関わりたい、実習をさせていただきました。ふりーふらっと野毛山は、子供たちや職員の方々の笑顔で溢れていました。今後も、笑顔が交流する場として発展されることをお祈りいたします。

◆夏期青年ボランティア 事後研修会アンケートより「感想」抜粋



◆毎回の活動後に記入する「振り返りシート」から抜粋(囲いの中はスタッフのコメント)

・自分から話しかけるというよりも、多くの子どもは自ら声をかけてくれたのでうちとけやすかった。何でも話しかけてくれるような雰囲気を作っていきたいと思います。 T・I

本日は有難うございました。如何でしたかボランティア活動は…。社会に出ても様々な人がいます。壁にもぶつかります。でも常に考え行動することで問題は解決します。卓球、ドッジボールと子ども達も楽しく遊んでいました…。子ども達も良き思い出になるでしょう。若き日に様々な事を経験することは非常に良いことです。これから気楽に来てください。

・今日、久しぶりにボラに入ったんですけど、久しぶりだったからか、よくわからないけど、ちょっと態度が冷たくなった子もいて、せっかく仲良くなったのに…と思ってショックでした。もちろん、久しぶりだねって声をかけてくれた子もいたけど、なんだか寂しくなりました。 K・S

冷たくなったのではなくて、恐らく照れていたのでは…? 大人のように愛想よく挨拶ができるという訳ではないので、「まあ、テレちゃって!」くらいの気持ちで臨んでみたらどうでしょうか。子どもたちにも色々なタイプがいます。元気な子、内気な子、思ったことがうまく言えない子。おしゃべりが上手な子…。「色々な人がいるんだ、だから違いを認めて思いやりを持って接することが大切だ」ということを子ども達にもぜひ伝えていってくださいね!!

・今日はレクホールである1つのボールの取り合いになった。他の遊びを提案してみたけど、イヤという返事が返ってきた。他のボールでもダメらしい。他に何か方法がないかなあと困ってしまった。しばらく経ってから、さっきボールのことで泣いていた女の子が、違うボールを手にとり遊ぼうと言ってきた。子どもたちの中で気持ちの整理ができるのを「待つ」という気持ちも必要なのかなと思った。 S・K

今日は、「子どもの持つ力」を目の当たりにできた1日でした。泣いたり、泣かされてしまったり、ケンカしたり、仲直りしたり。子供の感情の変化に大人は戸惑ってしまうことがありますが、子どもは子どもなりに自分で納得して次に進んでいたり、色々と考えていることに驚かされますよね。子どもも大人も「社会」が同じにあるのです。待つことの気づきは素晴らしいですね。つい「目の前にあること」の解決にあせってしまいがちですが、長い目で見てこの活動の目標である「子どもたちが自分の力でできるようにするサポート」を目指してくださいね。

私は大学で学んでいる社会教育実習の一環として、夏期青年ボランティアに参加しました。普段、なかなか子供たちと接する機会が少ないので、ボランティアの一日一日がとても新鮮に感じました。今までになかった体験ができたことで、自分の視野が少し広がったように思えます。活動を通して、このセンターは利用者の方たちからとても愛されているのだと実感しました。これからも、ぜひ誰もがふらっと立ち寄れるセンターであってください。貴重な体験をさせていただき、本当にありがとうございました。

宮島佑紀

私は学校の課題として、ボランティアをしました。子どもと遊ぶのが好きで、彼らの目線になって接して見たかったので、交流センターの夏期ボランティアに参加させていただきました。

初めは子どもたちと馴染めるか不安でいっぱいでしたが、スタッフさんのサポートと同じボランティアさんとの協力ですんなり仲良くなりました。

色々な子どもたちがいるので遊ぶのは大変でしたが、子どもたちの笑顔を見るとそれを忘れ、自分まで童心にかえり一緒に楽しみました。また、私たちにもあるように

→子どもたちにも自分のペースというものがあり、それを私たちは焦らず待つのが大切なんだと接するうちに感じていきました。この夏期ボランティアで様々なことを教わり、そして、子どもたちから学びました。私にとって、とても素敵な夏の思い出と経験になったと思います。

S・R

大学へと進学し、何か新しいことを始めたいと思い参加しました。活動してとても感じたのは、子供の明るさや仲良くなる速度でした。子供から学ぶ事もたくさんあって本当に良い経験ができました。ありがとうございました。

10周年おめでとうございます！

河本詩央里

夏期ボラをやったきっかけは、妹の高校のちらしを見て、姉妹で参加しようと思って決めました。やってみて感じたことは、5日間という短い期間でも、私達よりも先に近くに来てくれたり、話しかけてくれたりしたことが嬉しかったです。あと、元気なのが印象的でした。日にちが空いても覚えていてくれて、一緒に遊んで楽しい時間を過ごせました。

丸本 亜砂美・知香

夏期ボランティアをやろうと思ったきっかけは、大学生活の中で子どもと関わる事がなかったのも、一緒に遊んでみたいと思ったからです。またその中で、料理作り等1つのことを達成するためにみんなで協力して取り組む大切さを改めて感じる事ができました。

林崎由司

時間を有効活用し色々な人と交流したいと思い参加しました。スタッフや子供達との交流の中でやりがいを感じました。25歳以上のボランティアも定期的に募集すると良いと思います。

古澤和喜

私が夏期ボランティアに参加した理由は普段はあまり関わることのない子供達と触れ合いたかったからです。このボランティアに参加して、最初は子供達どのように接したら良いか分からなく、戸惑いました。しかし、少しずつ子供達と言葉を交わすようになり、打ち解けて行くことが出来ました。夏期ボラを通して、新しい経験が出来たと思います。

狭間智紗乃

夏休みの期間を使い、同じような意志を持った仲間達が集結し、定期的に子ども達と日常の交流ができるという事が参加のきっかけです。子ども達にとっても、大きいお兄さんお姉さんと遊んだりする事ができ、良い刺激になったのではないかと思います。自分自身も、普段関わる事のない年齢の人達と遊びや活動を共にする中で、色々学ぶ事があり、良い経験、勉強となり、充実した貴重な機会でした！
ps.10周年おめでとうございます。これからの益々のご発展を期待します！そして多くの方の居場所提供や地域に根付いた場所であり続けて下さい！

坂元美輝

私は、夏休みを利用して様々な人と関わりたい。と思って、いた中、ふりーふらっとで夏期ボラとしての活動のお誘いを頂いたので参加させていただきました。子どもだけでなく、同世代の方とも交流できたのが大きな収穫でした。夏ならではの経験とともに人との繋がりを増やすことができたので参加してよかったと思います。

井料顕仁

私がボランティアを始めた理由はただ単に子どもが大好きだからです。ボランティア活動を通じて、少し自己主張が強すぎて自分勝手なことをしてしまう子や中々自分から声を掛けられず孤立してしまう子どもなどたくさんいました。その中で私が感じたことは自分の考えを子どもに理解してもらうことや押し付けけないということです。子どもには子どもの考え方があり、子どもの考えを尊重することも大切だと感じました。本当にこのような貴重な体験をさせていただきありがとうございます。とても楽しかったです。

安西将吾

ボランティアを今まで1度もしたことがなく、今年の夏こそは何かをやってみたい！と色々調べました。そこで出逢ったのが夏期ボラでした☆説明会の時、スタッフの方々の優しさと、ふりふらのアットホームな雰囲気を感じられて、ここでなら安心してボランティアができると思いました！私のようなボランティア初体験の人でも、何かできそう！と思ったのと、直感的に楽しそう！と思ったのが最大の理由です。子どもたちは、自分をみてくれる人、話を聴いてくれる人を求めていると↓

私には保育士になりたいという夢があり、子どもたちとの関わり方を学べたらいいなと思い参加しました。子どもたちは遊びの中ですぐに誰とも仲良くなれてすごいなと思いました。たくさん吸収することがあり、とてもいい経験ができました。

藤本真来

大学の授業で子どものアイデンティティ確立、居場所作りというのに関心をもち、久田先生にボランティアを紹介していただき参加しました。ボランティアを通じて幅広い世代の方と接することができ、生涯学習の場の大切さを改めて実感しました。子どもたちが室内で走り回るときに多少狭く危険なので、その限られた場所を工夫して使うということも大切なことではあるが、ある程度の場所も必要かなと思いました。

森沙央里

↑
感じました。子どもとの気持ちを受け止めながら一緒に活動していくと、子どもたちを中心にボランティアに来ている人たちとの距離もぐっと近づきました。みんなで楽しもう！という気持ちが一つになると仲良くなれますよね。そのことは今後も忘れずにしたいと思います。ふりふら、ありがとう！

李弥

◆夏期青年ボランティア・社会教育実習生の活動の様子



➤ わたしたちの居場所 ～利用者メッセージ～



そう、10年経ったのね。

交流センターのお部屋を借りて練習するようになって10年の月日が流れたことになると気が付いた。音楽学校を出てから会社勤めや音楽教室の講師を20年ほどやった。西区への引越しをきっかけにもう一度専門の音楽を勉強し直そうと個人のレッスン以外の仕事をやめた。コーラスも始めて学生時代に逆戻り。

そんな日々の中、コーラスに入っているけれどもっと上手になりたい、一人で歌曲を歌えるようになりたい、専門的な知識を増やしたい、という人が集まってきた。我が家のようなマンションの一室では長時間のレッスンや練習は無理。ということで場所探しの行き着いたところがここだった。

その後も大病のあと発声に障害の出た人、肺に影のある人など歌って少しでも体調を整えたい人までもが集まってきた。仲間だけで一年に一度発表会を行うのが楽しみになった。その会が今年で10回目を迎える。

初めはほんのお手伝いのつもりだったが、とんでもない。すぐに自分の技術をもっと磨くことが先決と気づいた。朝の空き部屋で師匠の厳しい顔を思い浮かべながらの自主トレが習慣となった。

今朝も一人で練習開始。「ん！」隣のスタジオはもう使用中の札になっている。朝からドラムも練習ね。歌い疲れて一息つくと壁越しにドラムの音が響いてくる。負けてなるものか！こっちも頑張る。

ある時、学生服姿の男の子が入っていくところに遭遇。少ししてドラムが始まった。朝から頑張っているけれど、今日って学校はないの？受付を通ってきているはずだから「今日、学校は？」なんて聞かれなかった？いつもの疑問であるが、こんな変わった時間に一人黙々と練習をする若者は意外と多い。学校も大事だが、若い人たちが誰かに邪魔されることなく、好きなことに熱中できるそんな空間があるということは、幸せではないか。ここにいれば彼らは認められ、保護されているように見える。そんな彼らは時に伸び伸びと能力を発揮する。

何年か前のライブのポスターにこんなのがあった。出場資格、「最後までみんなの演奏が聞ける人」。これには大変感動した。今は、子供から大人まで音楽を学び発表する場はいくらでもある。しかし他の人の演奏をちゃんと聞ける人は少ない。誰かの演奏をちゃんと聞ける彼らは自分たちも向上し、別の時にも人のことが考えられるようになるはず。

ある夕方、帰ろうとしていた私に小学校高学年と見える男の子が声をかけてきた。「おばちゃん、一緒に帰ろう！」一瞬びっくりしたが「いいわよ。」と言って階段を下りた。「僕ね、今卓球やってきたの。」「そう。」「はじめてだけど面白かった。おばちゃん何してきたの？」「歌の練習よ。」「楽しかった？」「うん。身体使う気持ちいいわよ。」「そっかー。僕ねいつもここに来るの。ここ大好き！あっ信号青になったから走るね！」「気をつけて！」夕暮れの坂を彼は山ほどの楽しさと共に駆け下っていった。映画のラストシーンのような忘れられない思い出。人懐こい彼に圧倒された。

誰もが対等に向き合える、それも交流センターのいいところ。

一緒にやってきた仲間の一人が嬉しい知らせを持ってきた。「歌を10年続けてきたおかげか、肺の影が消えました。」

そう10年経った。

こんな時私だって駆けて行きたい。「よかったね！」と言いながら。ただし図書館の前で滑って転ばなければ。

ここに集う人誰もが熱中時代の真っ盛りなのである。

開館10周年おめでとうございます。

6年前に私たちのサークルを立ちあげ、練習場所を探していたところ、坂道の途中で出会ったことが利用の始まりとなりました。

その時、受付のスタッフの方がやさしい笑顔で迎え入れてくださった事を今でも忘れずに覚えています。

私たちのサークル「Smile seed」の名前のきっかけでもあります。

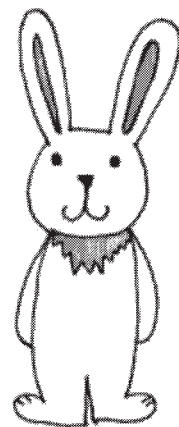
交流センターを利用していつも感じる事があります。それは、あの時とかわらない入館者を迎え入れる時のスタッフの笑顔と、そこに集う青少年の笑顔の交流です。とてもステキだなと思います。

いつの頃からか少なくなったように思う、心の風景がココにはあります。大人が子どもを、子どもが大人を、年長者が年少者を、年少者が年長者を気かけ心を通わせる、大切な時の流れを交流センターには感じる事が出来ます。

私のサークルの仲間たちは、皆が心に沢山の「笑顔の種」をつめ込んで、練習に参加してくれています。気づけば、その種たちは、沢山の「笑顔の花」を咲かせて、周囲を明るく和やかにしてくれます。花たちも幸せそうに咲いています。

交流センターに集う仲間たちも皆が私たちと同じように、心に沢山の「笑顔の種」をつめ込んでやってきているのではないのでしょうか。その証拠に、気づかぬうちに大輪の「笑顔の花」たちが満開となり、センター全体を明るく活気ある場所にしています。とてもステキで大切なことだと思います。

これからも、この交流センターでの心の交流から始まる沢山の交流が、皆のよい経験となり、お互いの成長の支えとなっていくことを願います。また、そういう場所として存在し続けてほしいと思います。





中学校の体育館の工事が終わるまで部活
で使わせて頂きました。そのおかげで無事工事
も終わり、2月26日より体育館での部活も再開
します。今までありがとうございました。これからも
よろしくお願いします。
最後に10周年おめでとうございます。

老松中学校バスケット部

10周年オメデウ！きもだめし大会が1番楽
しかったよ☆もちつき大会やフリフラでのお
祭りもとてもにぎやかで楽しかったよ〜。ぺん
きょう会は行かないけど皆でfight！これから
もシグヨロ(´ω´)

中学1年 利用者 R・N

青少年に無くてはならない施設として、
立上げたセンターがもう10周年、歴
代の職員、スタッフの皆様にお祝いを
申し上げますと共に、今後のご発展をお
祈ります。私達も毎週楽しく元気に
プレーしたり、子供達の卓球大会のお
手伝いをしています。

わかば卓球クラブ 村上

センター開所10周年、おめでとうございます！いつも本
当にお世話になっております。当方はダンス練習をさせ
ていただいて、過去2回程@楽祭にも参加させていただ
きました。多様な世代の利用する施設としてはいろいろ
大変な事も少なくないかと思いますが、親身な対応
に助けられています。今後共がんばってください！

サタデーアフロカリバーニャ 松本順

私達人形劇びっころが、ふりーふらっとで年
に一度公演させて戴くようになって、早いもの
で、今年で九回目になります。南区で主に
活動していたのですが、他の地域でもと場所
を探していたのです。YSCの転移で、こちらに
ご縁が出来、5Fの広い部屋を使用していま
す。広報の都合で少ない時も有りますが、昨
年は百人超来観しました。

人形劇びっころ 宮負恵美子



この度は、センターオープン 10 周年おめでとうございます。
私達は、昨年 1 月より活動を始め、4 月よりご縁があってこちらで練習をさせて頂いております。昨年末の @ 楽祭では初参加ながら皆様の温かい声援を頂き、楽しく踊ることができました。また交流会にて、センターの歴史、役割、多くの方々が色々な思いで係わっていることを知り、とても温かい気持ちになりました。これからも素敵な交流の場でありますように。

ボリウッドダンスサークル 高林留美子

各地の地区センターやケアプラザは利用してましたが、わかば卓球クラブに入って初めてフリーフラットの存在を知りました。小学高学年から中学生位の子供が集まるようで、職員の方は大変だと思いますが利用した子供達が大きくなって、思い出の場所として記憶に残る事と思います。私達も感謝しております。

わかば卓球クラブ 采崎明

このさき 20 年、30 年もくひょうにしてがんばって、かこの事よりも未来におかっ
てがんばって歩んで下さい。

社会人 利用者 TASHIRO

青少年交流センター十周年おめでとうございます。私達わかば卓球クラブ部員十八名楽しく健康の為頑張っています。これも偏に交流センター様のお陰です。又三月には交流センター主催の卓球大会では学生達との交流が出来若さ溢れるパワーをもらい若がり又一年間楽しく元気に卓球が出来ます。
又十五、二十周年を迎える事祈願一同センターに感謝感謝。

わかば卓球クラブ 山本義雄

交流センター10 周年おめでとうございます。小さい頃からお世話になっているこのふりふら、小学生の時はよくお祭りに遊びに来ました。優しいお兄さんやお姉さんと一緒に遊んだこと、今でも良い思い出です。そして、去年、夏期ボランティアとして子供達と触れ合いました。わたしのふりふらにまつわる思い出はまだ続きます。

利用者 須藤美咲

私は、ふりーふらっとに来たのが 4 年生の時でした。はじめて来てこんなところなのかーと思いました。一人でイスにすわっていると一人のせいしよねんいんがいつしょにあそぼ！と言ってくれてあそびました。そして今 6 年生 3 年間ここにかよいつづけてみんなと楽しくすごしています。中学校になってもできるだけこうと思います。

小学 6 年 利用者 あらえかな

10 周年おめでとうございます。
みなとみらいや野毛山の緑が見える気持ちの良いセンターで活動を始めて 8 年余り、広いお部屋で快適に制作させていただいた皆さんの素晴らしいステンドグラスの作品たちがここから誕生しました。自画自賛ではありますが(笑)これからもスタッフの皆さんの笑顔に会いに野毛山を登ってきます。よろしく！

ステンドグラスの会 栗山美佐子



私にとって交流センターとはまさに
青春の1ページです。交流センターで
どれだけ勉強したのだろう。
いや、どれだけ勉強させてもらったのだろう
か。本当にこの交流センターには感謝して
います。ありがとう。

大学1年 利用者 益子大悟

私は、8年前からフリフラに
来ていました。今は、学校の人も
来てゴミなどで汚れてしまっているのを直
す。10周年はすごく早く感じるけどこれから
も大切にして遊びに来たいです。

中学2年 利用者 山田華恋

10周年、誠におめでとう
ございます。開設当時、私は中学
生でしたが、社会人になった今でも
利用させて頂いているのは、この場所
の「居心地の良さ」があるからです。
魅力あるセンターのご隆盛を心よりお祈りしま
す。

社会人 利用者 本野恵太

当センター
には主にピアノの練習で
利用させて頂いております。こちら
は本当に開放的であらゆる方々が交流
できる素晴らしい場であると感じております。
今回十周年を迎えるということで、私としても大変
嬉しく感じております。どうぞこれからも地域の方々
の交流の場としてあり続けて下さい。
おめでとうございます。

利用者 三浦嘉成

ふりーふらっと10周年、
おめでとうございます。社会教
育分野は逆風つづきで大変と思
いますが、これからも、青少年の居場
所として、がんばってください。
「そういうあなたはオジサンでは？」という
ツッコミはなしで……。

利用者 山口義裕

夏期青年ボランティアに
参加して子どもたちとたくさんふれ合うこ
とで、人の温かさやコミュニケーションの
大切さを学びました。10周年おめでとう
ございます。これからもふりふらで色々な
交流を楽しみたいです。

利用者 佐々木香織

おめでとう！
体育館でバドミントンをやっ
たりして、楽しかったよ！！こ
れからも、よろしくね！
中学1年 利用者 M.U

交流センターの
利用者として感謝しています。

僕が落ち込んだ時に励まして頂ける居場所
としてありがたい存在です。オヤジギャクを言われて
困ったりしたけど面白かったです(笑)他の利用者
の方々もスタッフの人たちの存在はありがたかった
のでは？僕も含めて運営して頂いている事に対して
感謝の気持ちでまた遊びに行きたい。

社会人 利用者 稲守優一

「野毛の山からノーエ」

この野毛山は近所の子供達にとって
恰好の遊び場だった。そこにある「青少年
センター」を知って五年足らず、今ではエッ
チラオッチラと卓球に通い小さなボールを追
う楽しみが生き甲斐になっている。

わかば卓球クラブ 神谷好治

おめでとうございます！

体育館でドッジボールやバドミ
トンなどをやって、すごく楽しかったです！その
他、一階のお座敷で友達と話などをして、とても
おもしろかったです！◎これからもずっと楽しい交
流センターでいてください！(*●ω●*)/ｼﾝ

中学1年 利用者 M・A

交流センター10周年おめでとう
ございます。私達はこの中で勉強させて
頂いて少しずつでも成長する事が出来ました。
涙と汗楽しい事。苦しい事。今思えばこの
10年交流センターと共に歩んで参りました。本当
にありがとうございました。感謝致しますと共に心よ
りお礼を申し上げます。これからどうぞよろしくお願
い致します。

尚舞会 一花満由桔

こんにちは。コール・フェンテです。
ここは優しい人達ばかりかいい所ですよ。
私達はピアノを使用していますが、不都合な所が
あれば直してくれるし、整理整頓も掃除も
いき届き、私達はそんな中で楽しく
合唱をしています。

コール・フェンテ 石川久美

毎週音楽室を
利用させていただいて
おります。いつもいつも職員の
みな様方の温かい対応に
感謝申し上げます。

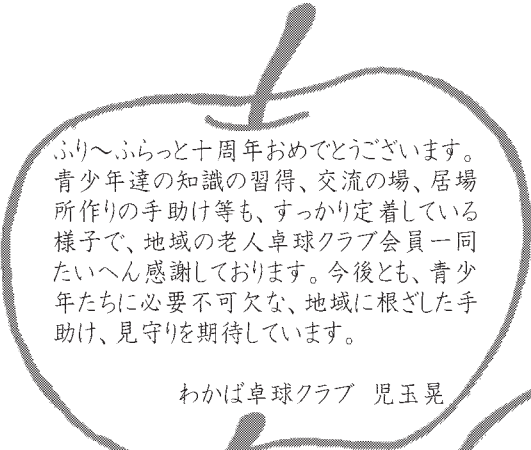
ロンディーノ 文珠川健

興奮して走り回る
小学生、悪ぶって見せる
中学生、行事を手伝ったり、
勉強に精を出す高校生や大学生、
受付に群がることも達、一般の利用も出来る、
誰でもいつでも来る事が出来る施設は素晴ら
しい、私達も負けずにパワーを貰って若さを発揮
します。

わかば卓球クラブ 村上龍爾

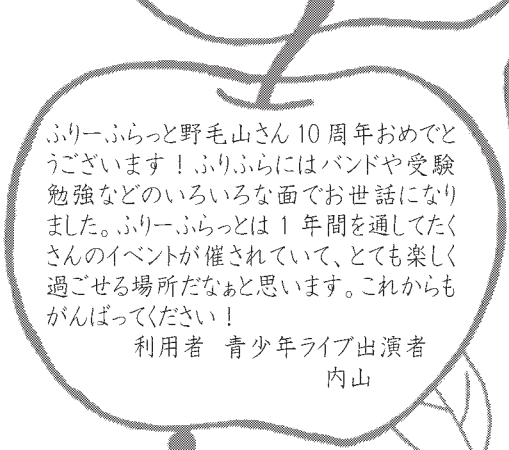
10周年！！
おめでとうございます。
交流センター以前より活動して
いるクラブよりお祝い申し上げます。活動があ
やぶまれた事もありましたが、センターの方々より心
強いサポートで今も活動できています。ありがとうご
ざいました。当センターに多くの青少年が集いもっ
と活力あふれる基地を目指しがんばりましょう！！

浜友ダンスクラブ 斉藤毅



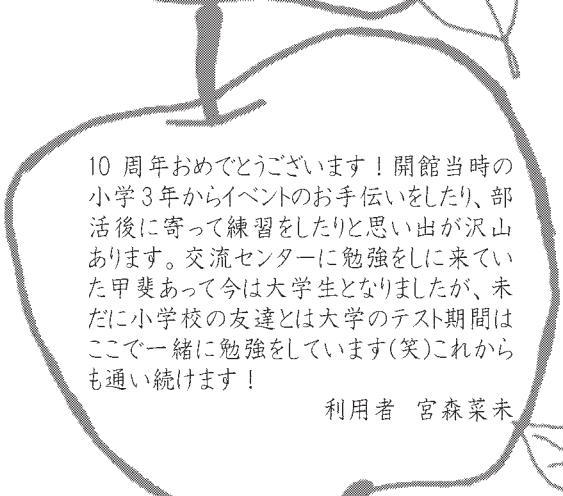
ふり〜ふらっと十周年おめでとうございます。
青少年達の知識の習得、交流の場、居場
所作りの手助け等も、すっかり定着している
様子で、地域の老人卓球クラブ会員一同
たいへん感謝しております。今後とも、青少
年たちに必要不可欠な、地域に根ざした手
助け、見守りを期待しています。

わかば卓球クラブ 児玉晃



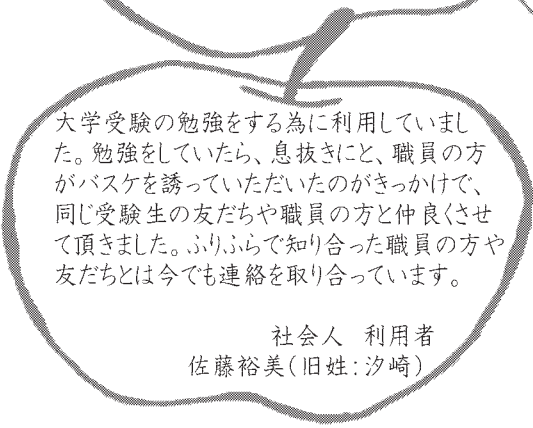
ふり〜ふらっと野毛山さん 10 周年おめで
うございます！ふりふらにはバンドや受験
勉強などのいろいろな面で世話になり
ました。ふり〜ふらっとは 1 年間を通してた
くさんのイベントが催されていて、とても楽しく
過ごせる場所だなと思います。これからも
がんばってください！

利用者 青少年ライブ出演者
内山



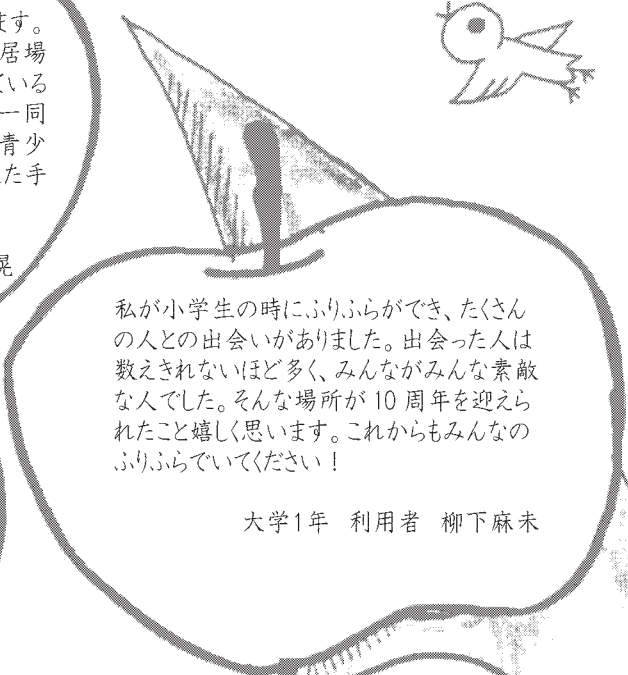
10 周年おめでとうございます！開館当時の
小学 3 年からイベントのお手伝いをしたり、部
活後に寄って練習をしたりと思い出が沢山
あります。交流センターに勉強をしに来てい
た甲斐あって今は大学生となりましたが、未
だに小学校の友達とは大学のテスト期間は
ここで一緒に勉強をしています(笑)これから
も通い続けます！

利用者 宮森菜未



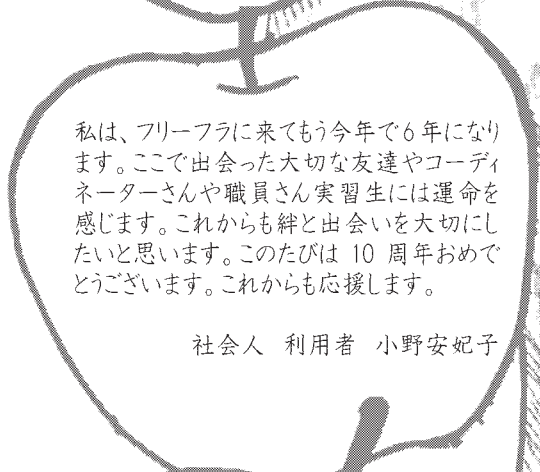
大学受験の勉強をする為に利用していま
した。勉強をしていたら、息抜きにと、職員の方
がバスケットを誘っていただいたのがきっかけで、
同じ受験生の友だちや職員の方と仲良くな
らせて頂きました。ふりふらで知り合った職員の方や
友だちとは今でも連絡を取り合っています。

社会人 利用者
佐藤裕美(旧姓:汐崎)



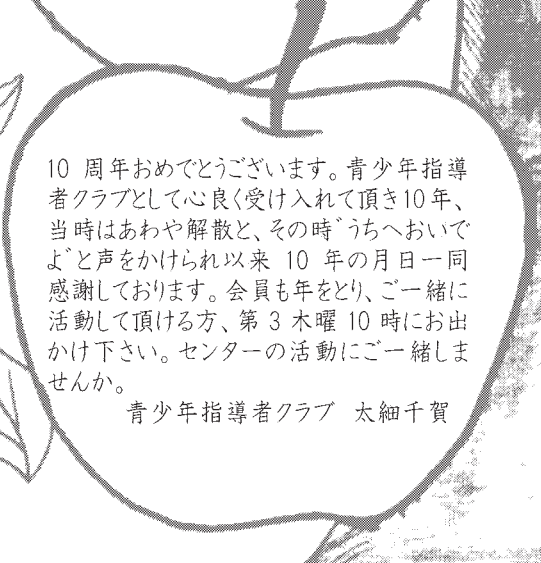
私が小学生の時にふりふらができ、たくさ
んの人との出会いがありました。出会った人は
数えきれないほど多く、みんながみんな素敵
な人でした。そんな場所が 10 周年を迎えら
れたこと嬉しく思います。これからもみんなの
ふりふらでいてください！

大学1年 利用者 柳下麻未



私は、フリーフラに来てもう今年で 6 年にな
ります。ここで出会った大切な友達やコー
ディネーターさんや職員さん実習生には運命を
感じます。これからも絆と出会いを大切にし
たいと思います。このたびは 10 周年おめで
うございます。これからも応援します。

社会人 利用者 小野安妃子



10 周年おめでとうございます。青少年指導
者クラブとして心良く受け入れて頂き 10 年、
当時はあわや解散と、その時うちへおいで
よと声をかけられ以来 10 年の月日一同
感謝しております。会員も年をとり、ご一緒に
活動して頂ける方、第 3 木曜 10 時にお出
かけ下さい。センターの活動にご一緒しま
せんか。

青少年指導者クラブ 太細千賀

お茶を気軽に楽しめようと言う事で月に二回和室を利用させて頂いています。昨年十二月のお祭りの茶会に沢山の方においで頂き嬉しかったです。先日もご自由にどうぞとお誘いして小学生が三人遊びにきて下さいました。多くの方特に若い方にもお茶の楽しみを知って頂きたい見学自由です。お待ちしております。

気軽にお茶を楽しむ会
波多野葉月

10 周年おめでとうございます。私達は2003 年から江戸祭囃子のお稽古で利用させて頂いております。こちらでお稽古を重ねた日々が、私達にとっての今なんだと改めて感じます。2012 年の@ 楽祭では、職員の皆さんがたった数週間で祭囃子を覚えられ、夢の共演をはたし盛り上がりました。

ふりーふらっとバンザイ！！

横浜やっしや鯛 櫻井ふみ江

数えきれないほど、ふりーふらっとにはお世話になりました。6 年前この場所の存在を知っておとずれ、今もお温かく迎えてくれる事にとても感謝しています。10 周年おめでとうございます。これからもたくさんの人たちの温かい居場所であってください。

Jasper 小林

10 周年おめでとうございます。昨年より横浜市青少年交流センターを利用させて頂いております。とても便利で自習室をフル活用しています。試験前などまた使いたいと思います。

利用者 鈴木佳太

このたびは 10 周年おめでとうございます。テニ4として2 年、個人的には4 年つかわせてもらってます。何時もつかわせてくださりありがとうございます。これからももつかう事は多くなりますがよろしくおねがいします。ふりーふらっと10 周年おめでとう。

テニ4 戸井田幸

ひまなので交流にきました。カードの下絵があったのでやってみたら楽しかったです。あとカレーをたべました。とても楽しいところです。

中学1年 清水海

オープン 10 周年、おめでとうございます。3 年前、私が高校1 年生の時からネタの練習の場として使わせていただいておりますが、気付けば、大会で結果が振るわない時に励まして下さったり、進路の相談にのって下さったりと私の心地良い場所となっていました。これからも大好きな交流センターでネタを磨かせていただきます！

大学1年 利用者 高松奈々

最初、このセンターに通い始めたころは、DORAMA ヨコハマ 151。横浜開港150 周年の翌年から始まった劇団は、まだ名前がありませんでした。あれから、会場の確保やアット楽祭などでお世話になりました。学校のチャイムがなるこのセンターが今、私たちの活動の拠点。これからもよろしくお願いいたします。

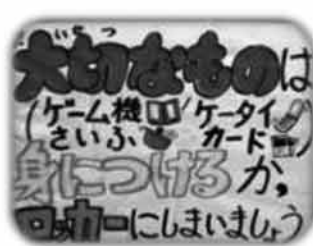
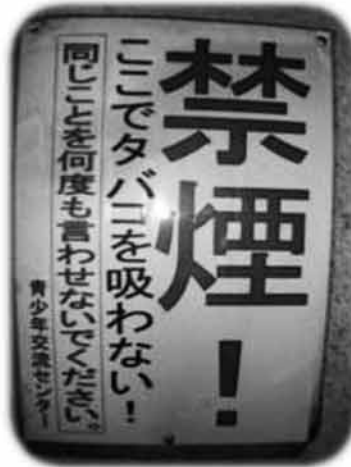
劇団演座 高細玄一

私は、1 年前からフリフラに通い始めました。今では友達と来て楽しく遊んでいます。10 周年記念はとてもおめでたいですね！

利用者 小嶋咲良

◆交流センター館内掲示物

あなたはどこに貼ってあるかわかりますか？



➤ コーディネーターの活躍

カウンターから見た風景
コーディネーターメッセージ



カウンターから見た風景

～コーディネーター日誌から見るふりふらの10年～

ふりーふらっと野毛山には、職員のほかに“コーディネーター”と呼ばれる時給スタッフがいいます。施設の予約・受付のほか、イベントの企画・運営、そして青少年の心にそっと寄り添う存在として、ふりーふらっとを支えている存在です。数年で異動になる職員と違い、比較的長く勤務するコーディネーターは、幼さが残る顔から思春期、そして大人の顔つきになるまでの青少年の成長を見続けてきました。

コーディネーターが座るカウンターは、まさに“居場所の入口”。

日々、ふりーふらっとに来館する青少年を迎え、そして背中を送り出してきました。

この章では、コーディネーターが毎日つけている日誌から「ふりーふらっとの日常」を振り返ります。

青少年の様子やスタッフの葛藤や喜びなど、スタッフがいつも大切にしてきた「かかわり」が残されていました。

※日誌は、手書きでかかれていたものをデータ化しました



1 “やんちゃ盛り”の思春期との毎日 一褒めて・叱って・追いかけて…タイヘンだ！一

有り余るエネルギーを持つ思春期世代がたくさん集まれば、イタズラ・ケンカ・トラブルは毎日発生！褒めて・叱って・追いかけてこして、毎日クタクタになりながらも私たちが理解したのは「イイ子・悪い子の境界線はない」ということ。誰もが良い部分・不安定な部分を持っています。日々揺れ動く青少年と向き合いながら、それでも「社会の一員」として歩んでいけるように、“人生の先輩”としてどのように伝え、関わるか…スタッフも日々葛藤です。

■ゴミや落書き・イタズラ…

平成17年2月×日

トイレットペーパー便器投げ入れ現場を見た、という申し入れが A ちゃんたちからあり。Bコーディネーターと職員が A ちゃんに確認。Eちゃん・Fちゃんたちとのこと。学校での様子を聞く。学校でも荒れているとのこと。A ちゃんたちに「犯人を見つけることが目的ではなく、その人たちがやめることが目的」の旨話し、注意深く見守ると話をしました。女性スタッフを中心に、みんなで協力し様子を見ましょう。

平成17年3月×日

A小など卒業式。中学生も授業が早く終わるため、人がたくさん。ゴミもひどかった！ラケットも大量に壊れた！春休み week 突入ですか…しばらくにぎやかです！

平成18年2月×日

ここ1～2週間の中学生の動き、かなり気になりました。昨日は窓に落書き、ペンキ。イタズラと呼ぶには度を超しているような気がします。

平成22年1月×日

中3男子7～8人来館。トランプでお金を賭けて遊び(3回注意)。カップラーメン3個食べ残し、ジュースこぼし箸袋細かくちぎり散らかしなど、荒らし放題で帰りました。何か恨みがあるの！？と聞きたいくらい…。

★ゴミの片付けは、毎日言ってもすぐに振り出しに戻ってしまいます。「友だち」といって気が大きくなっちゃうんだよね」「友だちの前で、一人だけイイ子になるのイヤだよね」…よく分かります。

でも、自分が散らかしたものを他の誰かが片付けている。その想像力を働かせてほしい。働かせられる人になってほしいのです。

■タバコにまつわるエピソード

平成 20 年3月×日

G君たち駐車場にてタバコ。学校でも周りがみな吸っているとのこと。根気よく言い続けるしかないか…。

平成 21 年4月×日

近所の方より。最近中学生がタバコを吸っているが、見つかってタバコを投げ捨てて、火事になるのが怖い、と話をしに見えました。→近所の見回り強化。また、火の始末についてもちゃんと教えましょう。

★青少年施設には、タバコ問題はつきもの!? 背伸びしたいのは分かるけど成長も阻害するタバコについては「絶対に見ぬふりをしない」が合言葉。「アンタには俺たちが吸ってよーがカンケーねえだろ!」と言われながらも、毎日毎日「ダメだ」を繰り返しました。

ある日、そそくさと出ていく中学生たちに“嫌な予感として”後をつけてみると、隣の公園でスパスパ。聞くと「交流で吸うと迷惑かけると思ってさ…」とのこと。あきれやら嬉しいやら複雑な気分だったことも。

近所の方たちはご迷惑をおかけしながらも、ご理解をいただき、一緒に青少年の育ちを支えてくださった存在です。

2 そばで見て、感じられる「よろこび」 一疲れが一気に吹き飛ぶ瞬間! 一

平成17年12月×日

久しぶりにJ君・K君たち顔を出す。相変わらず駐車場で喫煙。一緒にいたL君は「オレは吸ってないよー」と言う。本当にその様子で、彼は進学という目標ができ、変わった。

平成17年12月×日

L君。18 歳になるので、お父さんと車を見に行ったら嬉しそうに写メールを見せてくれ「午後からまた勉強にくるから」と取りました。…が、午後になってJ君やK君たちが来ると外でバイクをいじったり。やっぱり仲間っていると、照れくさいし、楽しい方にいっちゃいますよね。別に悪いことじゃないんだけど。

★ひとりの青少年の成長に喜んだり、また怒ったり…。

嬉しいことは、スタッフみんなで共有します。

平成17年12月×日

LやKたちが、午後からフリースペースで勉強するも、マクドナルド食べ散らかし、飲み物ほったからしで帰る!!

★彼らが大人になるスピードの速さにしみじみ…。ふりふらとスタッフはいつまでも変わらない部分を持って、みんなを待ってほしいと思います。

平成 20 年3月×日

利用者より「玄関前に怖い人がタムロしている」という連絡有。行くとG君たち卒業生7人。タバコをスパスパ。「俺ら20 歳になった。昔は交流センターのものを壊しまくった…」と。「その頃を振り返って今、どう?」と聞くと、「…毎日学校帰りに寄って、交流センターは楽しかった…」と。その後、中に入るように促しランプ遊び。大人になった彼らに、こちらもしみじみ。

平成18年2月×日

3か月ぶりにNちゃんたち来館。以前のワークルームでの悪さを反省し、「心を入れ替え、うちら、変わったから」と大変しおらしい…。レクホールは3人でしっかり掃除してくれた。(狐につままれたようでした)

3 スタッフだって迷う・悩む 一励まし合える関係が、青少年に向き合う一歩を後押ししてくれる一

■本音がチラリ…。

平成23年1月×日

今日は何事もなく終わりました。ホッ。

平成20年5月×日

昨日、ハブニング続出後、中学生賭けトランプに玄関前のタバコの注意。Bコーディネーターの自転車も腹いせに壊され、ホトホト疲れ果てた本日の遅番は、ごみを片付けない中学生たちに注意する気も起きず、いけないと思いつつも、ひたすら無関心で対応…。

■スタッフ間で常に振り返り、意見交換しながら、みんなで考えていきます。

平成18年1月×日

M君らがワークルームの窓からエアガンを撃っている、と近隣から通報。落ち着いて彼らの話を聞く。学校でも初めに疑われて、交流でも初めに疑われてムカツクとのこと(全ての悪さが俺たちではないこと)。スタッフの上から物を言う姿勢が学校と同じ。顔を見たときに「ごみを片付けろ!」と言わないで、ちゃんと自分たちの話を聞く態度をとってほしいとのこと。(そういえば、最近寄り添う気持ちを忘れてたな…)今日は卓球台を出す手伝い、ゴミも片付けてくれた。

→寄り添うことも大切だけど、なぜ自分が疑われているのかをちゃんと説明する必要があると思う。彼らからこのような言葉を聞くのは何回目か。何かあったら、「大人が悪い、すぐ俺たちのせいにする」と何度も聞いている。私たちスタッフは、上から言っている人や推測だけで物を言う人はいないはず。そこを理解し合わなければ「大人が一方向的に悪い」になってしまうのでは。

平成17年2月×日

最近、事務所内に入る子どもが増えた。職員・コーディネーター側に油断があるのでは?

平成17年6月×日

H君(中3)より。「どうしちゃったんだよ。交流はどんどん厳しくなって、前みたいな良さがなくなっちゃってるよ!」と吐き捨てるように言われ、ちょっとショック!

★いつも「これで良かったのか?」と反省する青少年とのかかわり。スタッフ間でも、互いを思い合いながらも意見交換をし、自分たちの立ち位置を確かめ合いました。

4 いつも気にかけているよ。一何か力になりたい。でも何ができるんだろうか?—

ささいなことで壊れてしまう・壊してしまう友だち関係。うまく自己表現ができない苛立ち。学校であったトラブル。家で親とケンカしたこと。複雑で、繊細で、そんな心の前に立ち尽くすしかない時があります。

■ガラスの心に触れて

平成20年2月×日

フリースペースで、中1のO君が一人を一方向的に殴る。厳重注意するも目を離すと行為を続けるため、Xコーディネーターが50分ほど彼らのそばに。途中、他人のカバンをあさったりして厳重注意。殴る彼らも、先輩からパシリにされており、その鬱憤がたまっているのか?殴られた子はニヤニヤ笑っていた。後で陰で聞いたところ、笑ってないと殴られるとのこと。今後注意深く見ていきましょう。

平成21年1月×日

Ff君。コミュニケーションがうまくとれず暴力的になってしまう様子。何かあった時は、カウンターに呼んで落ち着かせて話してみましょう。

平成20年3月×日

Pちゃん来館。近況報告してくれた。給食もおいしくて5キロ太ったと、ふつくらして可愛かった。友だちができた、と幸せそうで本当に良かった。

←★大人の都合で振り回され、小さな心はいつも傷ついていた彼女。私たちはあなたが心配だった。新しい街での新しい生活。幸せそうな顔を見せてくれ、みんなで「良かった・ヨカッタ」。

平成17年2月×日

K君来館よかった!レクホールで元気にバスケ。

↑★仲間内のトラブルで、一人で過ごすことが多かったK君。人目を避けるように早い時間に来館し、普段は反発しているコーディネーターと二人で将棋やトランプ。心細くて寂しそうな顔に笑顔が戻るように、みんなが温かく彼を迎えていました。



■受験シーズン。ふりーふらっとが一番“荒れる”頃。

平成22年1月×日

Z中のA先生来館してくださいました。3年生は、うまく志望校が決められなかった子同士が不安定でグループになっているそうです。何かあったらいつでも連絡してくださいとのことでした。

平成21年1月×日

高校前期入試。ひとまず終了。ほっとした顔です。結果は2月3日。

平成21年1月×日

Gg ちゃんやと受験モード。自ら模擬面接を申し入れてきました。みんなガンバレ。

★ふりーふらっとには多くの受験生が来館しています。「風邪をひかないように」「気分転換できるものを」と、スタッフたちは気を遣います。

また、高校受験の頃は最も荒れる時期でもあります。今まで「おんなじ」だったはずの仲間たちとの差や区別に戸惑い、揺れ動く心や仲間との関係性。受かった子、次に向けて頑張る子、残念ながら失敗してしまった子。さまざまな感情が入り乱れた難しい空間になります。

5 卒業、旅立ち、そして新しいチャレンジ！ーがんばって！いつでも応援していますー

進学や就職。春は青少年が新しいチャレンジをする季節です。通りすがりでしかない私たちスタッフに、旅立ちの前にあいさつに来てくれた背中。いつまでも応援しています。

■ホッと一息つける場所でありたい

平成19年5月×日

Ee君。将来のこと、本当は大学に行きたいんだけど親に反対されている…とのこと。受付で長くおしゃべりした。

平成22年12月×日

uちゃん、バイト前に来館。辞めたいよーと。「癒されにきた〜」とのこと。頑張っ！

平成22年9月×日

久しぶりにt君来館。バイトを始めたい、と履歴書の書き方をDコーディネーターに教えてもらっていました。高校頑張っている様子。

★ふりーふらでは甘えていても、外ではきっと頑張っ、敬語もちゃんと使っているのかも。ここではいつでも甘えていいですよ！

■ずっと応援してるよ！

平成23年1月×日

元委員のzちゃん来館。2月から1年間、中東に留学に行くそうです。みなさんによろしくお伝えくださいとのこと。

平成19年3月×日

Dd君があさってA県へ行くのでみんなによろしく伝えてほしい、と伝言預かりました。

平成21年5月×日

101号室でずっと勉強していたHh君、3年間お世話になりお陰で第一志望に合格できました、とお菓子を持ってきてくれました。また勉強にきますとのこと。



平成20年10月×日

c君来館。小学校教員試験が合格！！おめでとうございます！うれしい、うれしい！

↑★中学時代やんちゃだったC君。子どもたちの面倒を見てくれるようになり、いつの頃からか「先生になりたい」という夢を持ちました。勉強を頑張っている姿もスタッフに対してはいつまでも悪ガキのまま（笑）。ちゃんと「先生」してるかなあ。

6「ただいま！」懐かしい顔。大人になった顔。

私たちスタッフにとって「何よりのご褒美」は、ふりーふらっとに来ていた青少年が、新しい世界へ旅立ち、また帰ってきてくれた時です。頼もしい顔も、弱っている顔も、全部丸ごと受け止めていきますよ！

■一足先に、社会人になりました

平成20年6月×日

元Z中のR君来館。ずっと薦をされていて最近独立。職人6人を抱える親方になったそうです。「この仕事は信用が大事」と話してくれる姿はまぶしくて感動です。交流センター一番の出世頭ですね！

平成22年6月×日

Z中卒業生のp君。月曜日より自動車関連会社に就職決まったとのこと。

平成22年6月×日

元Z中q君、電気工事の仕事に就いているそうです。「がんばっている」と言っていました。少しやせたかな？

平成22年7月×日

r君、友だちと来館。1か月働いてお給料もらった。頑張ったから、とボーナスを1万円出してもらえた、と喜んでた。よかったよかった！仕事は大変そうでした。



★ふりーふらっとには、中学卒業後に仕事に就く子も多く来館しています。厳しい世界で、体力的にもキツイ仕事を頑張っている姿は、自分にも他人にも甘えていた姿からは想像できないほど頼もしく、そしてりりしい顔です。

以前、ペンキ職人になった青少年が、駐車場の壁を「お世話になったから」とキレイに塗ってくれたこともありました。大変な時、いつでも甘えていいですよ！ふりーふらは、夜10時まで開いているからね！

平成22年12月×日

元Z中のv君久々来館。かなりスリムに。今は防水関係の仕事をしているとのこと。

■ふるさと 一盆・暮れ・正月。そしてゴールデンウィークは「ただいま！」がいっぱい。ー

平成20年8月×日

夕方a君、帰省のついでに来館してくれました。あと1年半でお医者様ですね。あの頃と変わってないけど、とても忙しいようでした。

平成21年1月×日

元Z中のd君がつかの間の帰省で顔を見せてくれました。6月より訓練が始まるそうです。りりしく立派な自衛官です。

平成21年5月×日

××バンドのg君。3年ぶりの来館。今春大学を卒業して、今は大学院を目指して勉強中だそうです。同じバンドだったa君は就活で忙しくしているとのこと。

平成21年7月×日

××バンドのさん、大学生になりました、と報告に見えられた。「おじさんによろしく」とのことでした。テニスサークルに入り、夏休みは保育園でバイト、と楽しそう。

平成22年9月×日

s君 久々来館。横浜のホテルのイタリア料理店でシェフ見習いで頑張っているそうです！

平成19年2月×日

スタジオ利用のCo君約1年ぶりに来館。家業のお蕎麦屋さん頑張っているそうです。髪を長くしてイメチェン。

平成20年5月×日

Q君彼女を連れて来館。元気そうだった。すっかり落ち着いた様子にいささかビックリ。今高3。そのうち中学の時の仲間と来るよ！と言っていた。

平成22年4月×日

××バンドのm君n君久々の来館。すっかり大人の雰囲気。新しいバンドを作ったそうです。相変わらず後輩たちに大人気で囲まれています。

平成21年6月×日

元X中生のhさん、iさん来館。21歳の綺麗なお嬢さんになってビックリ。二人とも働いているそうです。

平成22年5月×日

Z中OBのo君がバナナップルを持ってきてくれました。甘くておいしいのを選んでもってきたから！とのこと。



平成20年9月×日

元××バンドのb君新しい友人と来館。とても元気そうで学校にバイトに体力づくりに忙しそうです。みんなで掃除、モップ掛けをしてくれました。

平成18年2月×日

Aa君とBb君が受付で談笑。Aa君は高校決まったそうです。小学生だったAa君が高校生とは！感無量です。カウンター越しに見せる子どもの顔は、いつもとは違うなあと感じます。

■なんだか親になったような気分です…

平成22年4月×日

l君今日高校入学式。新入生代表であいさつをしたそうです。あいさつ文はセンター長、職員Bさんが協力してくれました。おめでとう！すごい！成長したね。嬉しくて涙。

平成23年3月×日（高校時代に利用していた A 君から日誌に書き込み）

A です。ご無沙汰しています。久々に来ました。3月26日に結婚式をあげることにテンヤワンヤです。気づけば来てから8年くらい？経ったのに、ここに来ると色々と思い出して落ち着きます。8年前は高校の卒業式。大学の入学式・卒業式の帰りに、入社式後にも来ましたが。今年は結婚式。次はどんな時に来ようかと思いましたが…コーディネーターさんたちが退職されるようで寂しくなります。いままでありがとうございました。8年間お疲れ様でした。

★進学・就職・結婚…人生の節目に、ご縁があって偶然かわることができた私たちスタッフは、みんなの苦しい時・頑張っている時・嬉しい時を共有できて本当に幸せです。新たなスタートに乾杯！

～現役コーディネーターの声～

「君たち、道場なんだよここは。」 青柳 良

ここで働くようになり2年が経ちます。大震災直後のスタートでしたが、初めは孫世代の子たちをどう接していくか、ずいぶん戸惑いました。目の前に起きていることの根の深さと、すそ野の広がり方がよくわからなかったのです。

青少年といっても、青年と少年とでは、だいぶ違いがあります。われわれが多くの手間と時間をかけているのは、小学校6年生から中学生の少年たち。彼らとしては、学校と家との中間のこうした場所である種の気分転換をはかっているのでしょう。ただ、それをどこまでやっていか自覚出来ず、大事を引き起こしてしまうようになるのです。

ごみの放ったらかしだって、ボールの蹴とばしだって、いじめや忘れ物だって、みんな「オレじゃなけりゃ、いい」で片付けている現状ですが、そんな勝手放題の「ただ乗り」施設としてしかここを考えていないのであれば、いずれその見返りも小さな、即物的なものでしかないでしょう。もっとも世の中は広いし、自分の人生だって、ほとんどはこれからではないのかね、少年諸君よ、よく考えてごらん！

われわれも、よけいなことにエネルギーをさかずに、うまく流れるとばかりにロビーワークをしたくもなります。しかし、それもさいごは自分がつまらなくなるのです。たとえパートタイムワーカーであっても、目の前の仕事に正直に向き合って、またそれが役に立っているという手応えがなくて、世の中は色あせ、これまでの自分の生き方はなんだったのか意味のないものになってしまうでしょうからね。

君たち少年もこれから先は、人生のさまざまな時に大いに悩むことでしょう。それは、われわれもまた同じこと。老いていくにも悩みはあるのです。上り坂を行く者と、下り坂を行く者とが、うまく交わることが一番大切です。その、真剣な気持ちを持てばこそ、実りある交流が出来る「道場」なんですよ、ここは。

「出合い」 大山 冬光

交流センターは、小さなお子さんから大人の方まで毎日様々な利用者さんが来館されます。今までたくさんの方と出合い、色々な声が聞こえてきました。

その中でも中学生の存在は、とても大きなものです。

コーディネーターとして勤務し始めた頃、何を言っても「うぜえんだよ！調子にのんな！」と乱暴な言葉ばかり。どんな言い方をすれば‘会話’ができるのか悩む毎日……

そんな子達に悪戦苦闘しながら約二年、最近は少しずつ大人になっているように感じます。

ある日、常連男子グループの一人が来館。受付で名前を書き、ボソッと「昨日はありがとう……」始めは何を言っているのか分からず思い返すと、私達はただ日常的な対応をしただけ。

普段、グループで固まってはフリースペースを散らかし、生意気な態度をとっている子から‘ありがとう’なんて初めて聞きました。この言葉が、こんなに嬉しいものだとは思いませんでした。

またある日、中一グループがお菓子・カップ麺を食べ残して放置、それを見た中二男子「おまえら、それ片付けろよ。」

（えーっ！なに言ってるの！自分だっていつも片付けないじゃん……心の叫び）

先輩に言われたらやるしかない、中一グループ全員で片付け。中二グループの机は……少しゴミがある、残念。しばらくして先輩風を吹かせた子が帰る時、

「さっき注意してくれたね、あの子達片付けたよ。」

「あーそうなんだ。」と、何だか得意気？照れてる？それから、あまり散らかさなくなりました。

日々のこんな出来事にとっても温かい気持ちになり、この子達はどんな大人になっていくのだろうと今から楽しみです。

これからも交流センターでの素敵な出会いに感謝して、利用者さんと向き合っていきたいと思っています。

「子ども達よ、ガンバレ！」 瀬田 治夫

十周年おめでとうございます。よくここまでと感心する程に確立された施設で仕事ができる事、感謝しております。立ち上げ当時の苦勞がしのばれます。

私事ではありますが、近隣の東小学校、老松中学校を卒業し、言わば我が庭のような場所で最後の職場として故郷に帰ってきたような気分で勤務しております。

横浜の中心に位置し、子ども時代から慣れ親しんだ野毛山動物園、市長公舎、中央図書館、高齢者施設と充実した環境にめぐまれた場所にありますが、野毛坂を下りますと、良くも悪くも横浜の縮図のような地域もあります。

来館する子どもの中にも、様々な事情を抱えた子もおります。しかし、子どもは自らの出生を選ぶ事は出来ません。せめてスタートラインは平等であって欲しいものです。又、嵐のような天候であろうが毎日来館する子ども達、交流センターを頼っているのです。

皆、君たちの味方なんだよ、声掛け一つでも「ガンバレ」という思いを心掛けながら接しております。施設を通過点として逞しく生き抜いて欲しいと願います。こちらの誠意が伝わらない事も多々ありますが、来館を拒むのではなく、彼らに安心出来る居場所を提供するというコンセプトのもと、日々彼らと交流しております。

何年かの後、毎日こんにちは、さようならといつも明るく挨拶してくれた、自分で食べたゴミを片づけると毎回のようにな注意された事をいずれかの場所でニンマリと思い出してくれたらなど。

最後に私も還暦を過ぎましたが、彼らに接し多くの事を学び、多少成長したのではと、子ども達だけではなく当施設を利用されているすべての方々に感謝する次第です。

高山 立鼓

私がここ横浜市青少年交流センターふりーふらっと野毛山で働き始めて、約1年が経過しようとしています。

1年前から、今日までのこと。少し、振り返ってみたいと思います。

入ったばかりの頃、レクリエーションホールでの「見守り役」は、少し荷が重たかった気がします。

中学生男子の間で、ドッジボールが流行っていて、何度かボールが顔の横をカスメテ行きました。

その度にドキッとしたし、その子その子がワカラナイ毎日で、家に帰って「はああああ。。。。。」と、落ち込む日が続きました。

私も彼らがワカラナイ。でも、彼らも私が何者かワカラナイ。そんな関係だったのだと思います。

1年が経過しようとしている今になると、レクリエーションホールでの「見守り役」は、なんて事なくなっており、常連の彼らの事が、私も少しワカルヨウニなり、彼らも私の事が少しワカルヨウニなったのだと実感できます。

居場所づくりの意味。それは、私もまだ考え中です。

これからも、子ども達とかかわって行く事で、何かしらの意味や意義が見えて来る日まで。焦らずに子ども達とかかわってみようと思います。

「青少年の可能性を信じて」 寺町 克比古

キリスト教文化圏では、倫理面は教会が果たし、躰の面は家庭が、知識の面を学校が果たしている。

日本では戦前にあった地域全体で子供を守りしつけしていこうとする連携がなくなり、家庭だけで躰をしなければならなくなり、一方で、核家族・共稼ぎの家庭が増えなかなか躰まで手が回らない家庭が多くなってきている。そのため実際の躰まで学校に要求したり、介入しすぎる親が多いため結果として子供を守っていることにならず子供の健全な成長の芽をつんでいるのが現状である。

居場所としての交流センターにはさまざまな子供たちが来る。子ども達を見ているとまさにその通りで、家庭でしっかり躰を受けている子供たちもいるが、そうでない子供や様々な家庭の問題や個人的問題を抱えている子供も大勢毎日のように来る。中にはカップラーメンの食べさしや漫画を机の上下に置いたまま、整理してから帰るようにいっても返事だけでそのまま帰ったり、周りの迷惑も考えず大騒ぎしたり、レクリエーションホールでコーディネーターの制止も聞かずボールを蹴り続ける子供達もいる。

しかし青少年の成長は目を見張るものがあり、彼ら彼女たちの成長を信じ、社会的ルールを守るように根気よく言い続けていきたいと思っている。

一方で交流センターの限界を日々感じている。ただ交流センターに受け入れているだけでは問題が解決せず、家庭、学校や行政と連携して対応していく必要を痛感する青少年もいる。

ただ単に交流センターを青少年の溜り場ではなく、青少年の居場所として青少年に寛いで疲れた体と心を癒しの場であり、困ったことを相談できる場に今まで以上に近づけていけるよう努力していきたいし、青少年を信じて成長を見守り続けていきたいと思う。

「ふりふら物作り」 中谷 昭則

退職後はしばらくゆっくりしたいなと思っていたが、元来じっとしておられるたちではなく、妻が見せてくれた「青少年交流センタースタッフ募集」の案内チラシが「ふりーふらっと野毛山」に関わる始まりであった。“男子家を出ずれば七人の敵あり”とかなんとか言って、子育ては妻に任せっぱなしであった自分が子供達とうまく関われるのかと心配はあった。

でも一つ思ったのは自分の趣味でもあり、健康的な時間を過ごしていると思っているDIYや野菜作りのようなことで、子供達に関わることが出来るのではないかということであった。パソコンゲーム、カードゲーム・・・と昨今の子供達のインドア志向は、外遊びの場所が少なくなってきたり、社会の環境変化の影響なのかもと思うが少なくとも小学生ぐらいまでは、大いに外で遊び、物作りを体験させてやりたいと思った。

ふりーふらっと野毛山では毎年8月「夏休みイベント」が企画され、多くの子供達が参加する。私は初年度からそこで木工教室を担当した。ここに来て驚いたのは、多くの青少年が色々な催しの運営サポートとして活動していることであった。木工教室でも夏季ボランティアで数名がサポート役を担ってくれ大いに助かった。話を聞くと多くは小中学生のころからここに来ており今も関係を持っているとのこと、みんな良い思い出として“ふりふら”を大事にしているんだと感じた。

教室の方は数週間前から万全の準備をしたつもりでいたが、何せ新米講師の為中々思うように進まず子供達の独創(独走?)性に驚くこともしばしばであったが、初めてのノコギリ、初めての電気ドリルを使う子供達のきらきらした目は印象的であった。

ここに来る子供達のなかには我々と目を合わせず“ウッセー、バカ、シラネー、ウザー・・・”しかいわないボキャブラリー未熟児症がいるが、何かに熱中しているときは子供らしい屈託の無い笑顔をみせてくれる。

ふりふら農園での花や野菜作りを含めた“物作り”を通して少しでも多くの子供達に、楽しく熱中できる時間を持たせてやれればと思う。

「君よ 未来にはばたけ」 広瀬 信昭

コーディネーター(Co)となって2年間関わってきましたが、青少年のことが理解できているのか、わかっているのか、わかっていないのか自問自答している毎日です。

あるべき論を語れば、『褒めること叱ることの作業は、青少年とのコミュニケーションに裏打ちされた信頼関係が大事である』と言えるでしょう。しかし、現実の関わり・作業はそんな生やさしいものではありません。

(事例の一部)

ボール蹴るんじゃない

レクリエーションホールで「ボールを蹴るんじゃない」(ボールを蹴るのは禁止されている)→子ども達とりわけ男子中学生は、無視し蹴り続け中々止めない。「止めろ！(一喝してやっとやめるときもある)禁止されているの知っているだろ。他の子にあたったら危ないだろ」→「俺じゃねえ」(本人なのに否定する)こんなことの繰り返しです。

ゴミをかたずけてくれたよな

1階のフリースペースなどで、特に交流センターを出る彼らの帰宅時に、(ゴミはカップ麺容器、ペットボトル、ジュース缶その他何でもあり)「ゴミをかたずけてくれたよな」→それでもお構いなく、食いばっなし散らかし放題。中にはやっとひとりぐらかたずけてくれるが…。これも毎日繰り返し。

何十年前の自分の中学生時代の姿をふと思い出すことがあります。結構悪ガキだった。もう時効ですが、雪の日、走っている車に雪のボールをぶつけて仲間とワル遊びをしたこと。競輪の無い日を狙って無断で競輪場のコースに入って、ローラースケートを仲間とやっていたこと。ある寺院に置いてある線香をわんわん焚いて逃げたり、その寺院の池の亀に石を投げつけたり、俗に言う「悪いこと」を面白がってやっていた。まだまだありますが問題がある(?)のでこのぐらいにしておきます。

そんなことを思うと、センターに通ってくる青少年とりわけ男子中学生も、人間として成長する過程であることは疑いないでしょう。

ある中学の先生から受けた研修で「子どもの実態は各家庭にある」と言われていましたが、あらゆるメディアから受ける社会的影響、学校教育、友達・先輩、地域性、そして家庭環境と、現在の子どもを取り巻く環境はきびしく複雑なものがあります。勿論、家庭環境や保護者の問題も大きいと思いますが、青少年を取り巻くすべての環境が、彼らの人間形成に大きく影響していくことは間違いないでしょう。

その人間形成と希望に満ちた未来に、センターの職員・Coが良い関わりをもって、微力ながらお役に立てることができたら、居場所としてのセンターの存在意義は果たせるのではないのでしょうか！

「うわぁ恥ずかしい」 松田 利恵

10年前、交流センターに最初にやってきたのは近くの中学の男子が数名。当時流行っていた特攻服の様な白いダボダボの上下、ジャラジャラのチェーンのネックレス、細眉、剃り込みも、茶髪もいる。(ヤンキー?)

とにかく話しかけて、と館長から言われている。おそろおそろ近づく。「こんにちは」「・・・」「中学生?」「うん」(何を話していいか分からない)困って目の前のジャラジャラネックレスを指し、「それかっこいいね。どこで買ったの?」「伊勢佐木町、おばちゃんも欲しかったら買ってきてあげようか?」「あ、いえ、大丈夫よ」「服もかっこいいでしょう、着てみる?」「あ、ありがとう、今はいいわ」第一印象とは大違い、思いがけないかわいい反応にびっくりです。

あっという間に彼らは交流センターに馴染み、それからが大変！代々の中学生が次から次と想定外、予想外のことをしてくれます。ゴミのちらかし、落書き、壁紙をむしる、けんか、喫煙、室内で花火に水鉄砲、自販機の上に登る、消火器の粉をまき散らす、火災報知器にスプレーをかけ非常ベルとともに防火シャッターを降ろす、道路を歩いている人に4Fの窓から「はげおやじ〜！」と叫び、怒った男性がどなり込んでくる、等々。私達は毎日彼らと格闘です。

そんな子達が成長するにつれ、どんどん変わっていきます。ふらっと寄ってくれて、学校や、仕事や、彼女の事などおしゃべりしていきます。こんな事あったよね、と昔のやんちゃ話になると「うわぁ恥ずかしい、迷惑かけたね」なんて言われ、感動してしまいます。現役やんちゃ組もいつかきつうわぁ恥ずかしい、と思ってくれると信じています。

交流センターは昔の横丁、うるさいオジサンやおせっかいオバサンがいて、叱られ、ほめられ、一緒に泣いて笑って見守ってくれる所、様々な年代の人とふれ合いながら社会に出て行く力をつけていく所です。子ども達の気持ちに寄り添い必要な時に背中を押してあげたいと思っています。成長した子ども達にいつでもふらっと立ち寄ってもらえるように10年後20年後も交流センターが存続しているよう願っています。

「若者達の居場所」 米山 恵美子

最近、よく言われている居場所って何だろう？

ここ野毛山にある“ふりーふらっと野毛山”(青少年交流センター)は、フリースペース・自習室・レクホールに来てくれる小中高生や一般の人々、部屋を利用するグループや個人、青少年委員達、夏期や催物ごとに参加してくれるボランティアの若者達、等々……。

私は勤めてまだ2年足らずですが、10年間という歳月が色々な人々の交流を育んできた場所であると感じます。

はじめてのレクホール(体育館)担当の時、遊びに興じながらドッジボールをしている小中学生。そんな中、二人の小学校高学年の子が、取っ組み合いの喧嘩を始めました。「お前のご生意気だと思っていたんだよ。もう我慢できない」とかで始まり、私は二人を離すことだけで精一杯でした。

またある夜、フリースペースに15～16歳位の若者5～6人が遊びに来ていましたが、直ぐに帰って行きました。ところが、しばらくして「おばちゃん、ちょっと来て」と近くの野毛山公園の入口に連れて行かれました。その若者達の中の一人が誕生日で、ケーキで真っ白になった顔を暗闇の中で見せてくれました。「おばちゃん写真撮って」と何人かに言われましたが、ちょっと尻込みしてしまい、センター長が撮ってくれました。私は交流センター利用では先輩の子供たちに先制攻撃を受けてしまったのです。そんなこんなで私と“ふりーふらっと野毛山”に来てくれる人達との交流が始まりました。

交流センターでは毎年行っている催物があります。こどもの日まつり・@楽祭・青少年ライブ・きもだめし大会・等々。青少年委員達が中心になって行われるきもだめし大会は、数ヶ月前からテーマを決めて、いわゆるお化け屋敷的なものを造り上げて来場してくれる人々の肝を抜く訳です。出来上がった会場を一日で壊してしまうのは惜しい位の出来栄えです。

昨年の青少年ライブは、クリスマスで若者達はイルミネーションが輝く街に繰り出して行って集まらないかなと少し心配していましたが、それぞれのグループのファンが集まり、一緒に歌い、踊り、聴き入っていました。あるグループがステージの上からクリスマスプレゼントとしてチョコレートを豆まきの如く投げてくださいました。たまたま来ていた小学生達が嬉しそうに拾って食べていました。

会議室や和室、演奏室やスタジオ、料理室を利用してくださるグループや個人の人々も沢山います。いつもレクホールに来る小学生が来ないのでどうしたのかなあと考えていたら、「今日はお茶を飲んだの」という事で、詳しく聞いてみると、茶の湯の稽古しているサークルが小学生と常連さんを誘って、お茶をたててくれたそうです。交流センターは、本当にいろいろな人々が交わる居場所です。

いま3月、1階フリースペースには、試験が近いので勉強に来ている学生達。その横で常連の小中学生がゲームをしたり、話合ったり、ボケーとしたり、眠ったり、カップラーメンを食べていたりしています。それぞれがそれぞれの思いでここに居ます。世代を越えて青少年を中心に交流ができたと思います。

私はまた明日から「ごみはちゃんと片付けて行きなさい」と言っているでしょう。

「レクH状況」 渡辺 和佳

レクHでは、毎日13:30～17:30一般解放して曜日により遊べる種目を決めておりボール、卓球、バドミントンの用具を用意し自由に遊べるようにしている。そのほかにテーブルサッカー、ピアノが設置されている。

常連の小中学生、中学生、に加え高校生、受験勉強の息抜きに来る受験生、大人も含め混み合うときは取り合いになる。同じ種目をやりたい人がいる場合は原則30分ルールがあるが、子供たちの対応にも個人差があり、やりたいものを人がやっているとききあきらめて1階のフリースペースに戻る子、中に入れてもらおうとする子、コーディネーターに頼る子もいるが、自分のやりたいことをはっきり意思表示させ相手に伝えるようにさせている。

受けた子供も概ね受け入れトラブルとなることは少ない。

しかし、ボールの取り合い、用具を隠す等と用具の破損は日常であり廉価の用具は導入したらしたで余計に破損しやすくなったりジレンマになっている。

そんな中バドミントンのガットを補修していたところ、中学生A君が手伝ってあげると隣に座って黙々と作業してくれたことに感激したり、中学生B君が声かけして高校生とオールコートでバスケットに興じる等年齢差を超えた交流がふりふらならではと思えた。

私がふりーふらっと野毛山に来てまだ2年であるが、子供の成長は早く初対面の時とはまるで変わってきていることと、私自身が悪ガキ中学生だった頃と同じことをして怒られながら成長していることを懐かしく感じてしまいます。

1階フリースペースのゴミ戦争はあるものの、レクHが他人への思いやり社会性の形成の場となっていること、ふりーふらっと野毛山で出会った人とののかかわりと経験が糧となり自分のなすべきことの発見と成長に少しでも役に立てればと思います。

◆コーディネーターの活動の様子





保土ヶ谷の高台から、
ふりふらを想う…。

鈴木 忠義

ふりふらでの子どもたち一人ひとり
との出会い、ふりふらでの子どもたちとの一つ
ひとつの出来事、喜んで怒って泣いて笑って…
すべてが私の人生を豊かにしてくれました。
10周年おめでとうございます。そしてありがとう。

櫻井 久美子

子どもへの一声が子どもの心をふる
いたせ、子どもが輝く、友達が輝く。
その地域が輝き、社会が輝く。
その原点が「ふりーふらっと」

中居 正威

夏は日陰に冬は陽溜りになる
路地裏、中学生が屯してマッタリしてたり
はしゃいでたり。時折見掛けるその光景に
何処か懐かしさを覚える。フッと(交流が)
蘇る瞬間でもある。まだまだ卒業できてな
いんでしょうね、キット。

川島 耕三

数年前、ふりふらへ沢田研二・裕子さんが
散歩の途中という服装でふらっと来館しました。
遠い昔、銀座ヤングメイツ、新宿ACBで、ザ・タイ
ガースのライブを見たのを懐かしく思い出しました。
私だけの嬉しかった思い出です。交流センターがしっ
かり根を張り、枝葉が“繁美”って行きますように…！

石井 まさ子

ロビーワークを大切に職員、スタッフ総
出で青少年に関わった日々が懐かしく
思い出されます。青少年主体で創る開
かれた施設として早十周年。
友情に支えられ自信に満ちた若者たち
の前途に大いなるエールを送ります。

大澤 文子



交流センター10周年、おめでとうございます。
私は平成24年に5か月間、コーディネーターとして働かせて頂きました。その間、職員の皆さまやコーディネーターの皆様に迷惑ばかり掛けておりました。それでも、交流センターの存在意義を自分なりに感得しました。
今後も折にふれ、人々に交流センターを宣伝したいと思っております。

藤井 千秋

おめでとうございます。
皆様お元気でしょうか？
交流の思い出を胸に、今はキッズクラブの子ども達などに茶道体験してもらってます。

石上 美津子

最初に“ばばあ”という言葉の洗礼を受けました。しかし何度か接する内に子ども達の求めている眼を感じる様になりました。こちらが受け入れる事で親しみを込めた“ばばあ”に感じました。
厳しい中にも優しさのあるこの場は貴重です。

高橋 宣子

10周年おめでとう。思い出しています。子供達とやった多くのイベントを！花壇でのスイカ栽培ドッジボール大会卓球大会など、一緒に活動した青少年委員の仲間とも会いたい今日この頃です。

齋藤 太美雄

創立10周年おめでとうございます。
早いですね！
船出した頃を思い出し懐かしさでいっぱいです。皆さんと過ごした思い出は大切な宝物となりました。
青少年に輝かしい未来がありますよう祈っています。

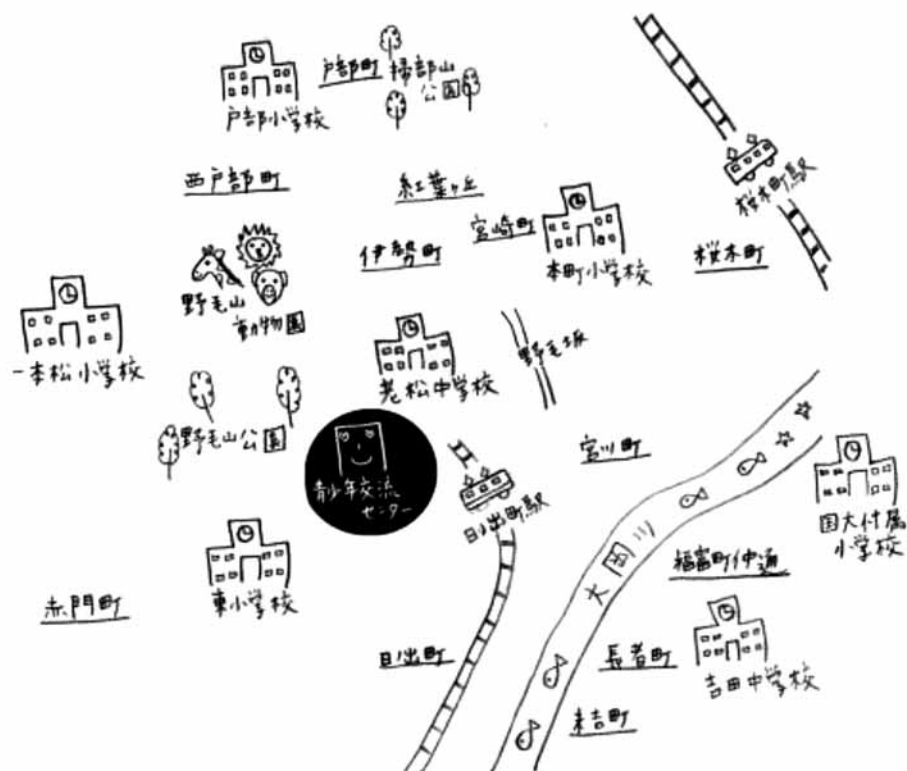
森澤 寛子

あの日、職員、スタッフ、子ども達に送られ花束と寄せ書き等をいただきセンターを辞した。
悪さをしていた子ども、悩んでいたあの子、脇目もふれず勉強していた受験生、みんな大人になったろうな。

村上 龍爾

➤ お世話になったみなさん&センター長から

関係者の声



お世話になったみなさん

【少年5団体のみなさんから】

◇横浜市青少年交流センター設立10周年おめでとうございます。

毎年春になると、入団進級式を交流センターにて実施しています。時の経つのは早いもので、10年前に入団してきた新入団員は今ではすっかり立派な指導者となって、子供達を指導しています。これからも、引き続きよろしくお願いします。

横浜海洋少年団 指導部長 新岡 久

◇野毛山の子供達が、学校帰りに気軽に、気持ちよく、ふらっと集ってる光景を見えています。学校・家族とは違った雰囲気仲間同士話してる所を職員は何気なくみていて、軌道を外した時には指導してる姿を拝見してます。この雰囲気を継続し、子供達との絆を強める事は職員皆様が弛まぬ日々の努力の賜物と敬服致します。10周年記念おめでとうございます。

ボーイスカウト横浜市連合会 会長 岩波 信夫

◇10周年おめでとうございます。光陰矢の如し、想いおせば開設時から、随分利用をさせていただきました。5団体の活動展を始め、近くでは私共の60周年記念式典の為のドリルの練習、何十回となく野毛の坂を登ったことでしょう。これからも地域に開かれた安全で安心出来る子ども達の楽しい居場所として頑張ってください。

ガールスカウト横浜市連絡協議会 会長 野本 千恵子

◇10周年、おめでとうございます。これからも青少年がふらっと立ち寄れて、仲間と気軽に交流したり、スポーツや文化活動ができる場の提供をよろしくお願いいたします。

横浜市健民少年団 団長 畑 誠一

◇横浜市青少年交流センター創立10周年誠にありがとうございます。子ども会は日頃から交流センターには大変お世話になり、ありがとうございます。交流センターの良さは、子供から大人まで誰でも気軽に立ち寄りができ、利用できることです。これからも子どもたちの明るい笑顔と笑い声の絶えない施設であって欲しいと思います。期待しています。

横浜市子ども会連絡協議会 会長 三橋 赫夫



【近くの小・中学校の先生から】

◇本校の子どもたちがいつもお世話になり、ありがとうございます。人間関係の希薄化、体験機会の減少が叫ばれる今日、子どもたちの「居場所」「交流の場」として青少年交流センターの果たす役割はとて大きいと感じています。ますますの発展をお祈りいたします。

横浜市立老松中学校 校長 横山 敏夫

◇10周年おめでとうございます。ふりーふらっとを訪問すると、生き生きとした表情の生徒に出会うことができます。老中生は幸せです。ここはかけがえのない居場所なのです。兄妹のように優しく、また友達のように楽しく接してくださる職員の皆様、本当にありがとうございます。

横浜市立老松中学校 生徒指導専任教諭 若杉 栄一

◇10周年おめでとうございます。現在、青少年を取り巻く現状は複雑であり沢山の課題があります。青少年交流センターは、人と人とのつながりを大切に、新しい地域づくりを目指されています。今まさに求められているものだと考えます。ますますのご発展を心よりお祈りしております。次世代を担う子どもたちをお願いします。

横浜市立吉田中学校 校長 出川 進

◇「かけがえのない存在」

横浜市青少年交流センター10周年おめでとうございます。また、子どもたちがいつもお世話になりまして、感謝申し上げます。先日、山梨大学の中村和彦准教授の話を聞く機会がありました。中村先生は、子どもの身体の危機とその原因を研究しています。日本がこの30年間で失ったものは3つの「間」だといっています。3つの間とは「時間 空間 仲間」です。この30年間、子どもたちの環境も急激に変化しました。「外遊びが減り、原っぱが無くなり、仲間もいなくなった。」と。まさに、交流センターは、この10年間でその「3つの間」を子どもたちに、地域に作ってくれました。これからも、子どものために、地域のために、かけがえのない存在として輝いてください。

横浜市立東小学校 校長 小林 淳一

◇このたびは、ふりーふらっと野毛山が、創立10周年を迎えたことを心よりお祝い申し上げます。本校児童は、ふりーふらっと野毛山を放課後の安全な遊び場と集団活動の場として活用させて頂いています。子どもたちの安全な遊び場が少ない中で、子どもたちの安心できる放課後の居場所として今後とも期待しております。

横浜市立一本松小学校 校長 小堀 敏明



◇青少年交流センターが10周年を迎えられたことを心からお祝い申し上げます。貴センターが地域の子どもたちの居場所、また活動や交流の場として有意義に活用され、青少年の健全育成に寄与してくださっていることに心より感謝申し上げます。益々のご発展をお祈り申し上げます。

横浜市立戸部小学校 校長 石川 純一

◇10周年おめでとうございます。交流センターは、本町小学校の子ども達にとって、気軽に集える「心の広場」のような存在だと思います。「みんながいる」「だれかに会える」……そんな交流センターに、これからも本校の子どもたちがお世話になります。よろしくお願いいたします。

横浜市立本町小学校 校長 長谷川 祐子

◇10周年おめでとうございます。いつも季節感のある楽しい企画を提供していただきましてありがとうございます。これからも、子どもたちが他校のお友達や年長者と接しながら成長できる場を与えてくださることを楽しみにするとともに、ご発展をお祈りいたします。

横浜国立大学教育人間科学部附属横浜小学校 校長 丹治 陽子

【交流センター開設を担当した横浜市役所のみなさんから】

◇10周年おめでとうございます。青少年が気持ちよく利用していただけるような施設ということで市民局もトップから担当職員まで真剣に考えました。特に、1階の青少年交流スペースにはいろいろな意見がだされたことを憶えています。愛称も洒落た形にし、その後マンション名によく使われています。一層の発展を期待しています。

(現在)社会福祉法人 横浜市リハビリテーション事業団

常務理事・事務局長 岩澤 幹夫

◇横浜市青少年交流センター10周年、おめでとうございます。前身の勤労青少年センターがその役割を終え、そのあり様の検討の結果、多くの若者が仲間と触れ合い、支援施設として新たな青少年交流施設が誕生し、今日を迎えましたことを大変うれしく思っています。今後のますますの興隆(交流)を祈っています。

(現在)横浜市泉区総務部区政推進課 課長 金子 晴由

◇10周年記念おめでとうございます。センターを設立するにあたって、他都市施設の視察での職員の方々や検討委員会での熱心に発言を頂いた青年グループの方々の姿が思い出されました。今後もこの特色ある施設を益々盛り立てて行かれることを応援いたします。

(現在)横浜市南区役所総務部税務課 職員 西山 秀幸

【かつての職員のみなさんから】

◇10周年おめでとうございます。この施設は、当初の勤労青少年センター、職員研修所（併用）、青少年交流センターと歴史がありました。この10年、関係者の不断の努力の成果として、青少年が集い、支えあい、笑顔あふれる素晴らしいオアシスとして定着しました。このような場所が、市域の至る所にあつたらいいなと思っています。

元 横浜市青少年育成協会 専務理事 井上 孝夫

◇青少年交流センター10周年、おめでとうございます。愛称の「ふりーふらっと」は青少年の心をつかんだものだと思います。様々な青少年の居場所が、地域や市域の人達と心を通わせて、もっともっと大きい輪になってほしいと思っています。特に、職員の方々のご努力に感謝しています。「青少年は希望と夢です。」

元 横浜市青少年育成協会 常務理事 岩倉 憲男

◇横浜市青少年交流センター10周年記念、おめでとうございます。3年間ほど、交流センターの仕事にかかわらせていただきました。若い方々に対して抱いていたイメージは、交流センターでさまざまな活動を行う方々を見て、ずいぶんと変わりました。学ぶべき点が多かったように思います。仕事柄、現在でも高校生や大学生とかかわることがたくさんありますが、皆さんとてもしっかりしていて、自らの若い頃は、どうだったのだろうと思うことがしばしばです。今では、とても良い経験になったと思っています。施設や関係者の皆さまの、ますますのご発展をお祈りしています。

元 横浜市青少年育成協会事業企画部 部長 遠山御幸

◇自分自身が認められ、新たな可能性が開かれ、活躍できる場はいくつになっても、誰にでも必要です。年齢も立場も違う様々な人が出会える交流センター、これからも多くの人にとって必要な居場所であると思います。

元 横浜市青少年交流センター センター長 山田 亜紀子

◇横浜市青少年交流センターの10周年、誠におめでとうございます。交流センターへ勤務している間に本当にたくさんの素晴らしい青少年に出会いました。こうした経験ができるのも交流センターならではのだと思います。こうした素晴らしい機能を持った施設が20年・30年と継続されることを祈念いたします。

元 横浜市青少年交流センター センター長 二瓶 信一

◇10周年、誠におめでとうございます。私は開館当時に職員として関わらせていただきました。センターに来る様々な世代の子ども達の成長に触れ、同時に自分も勉強させてもらった貴重な体験だったと記憶しています。交流センターのこれからの益々のご発展を祈念しております。

元 横浜市青少年交流センター 職員 福田 英司

◇10周年、おめでとうございます。わたしは2012年度、職員として「ふりふら勉強会」等に携わりました。交流センターを離れた今も、当時出会った人々や出来事を愛おしく思い出します。15周年記念誌にまた寄稿すること、楽しみにしております。

元 横浜市青少年交流センター 職員 古矢 隆之

【交流センターの建物を日々支えているスタッフのみなさんから】

◇青少年交流センター10周年記念おめでとうございます。最初からずーっと来て下さったお客様には感謝致します。今も大人の方、学生、乳母車のお子さん皆様の明るく元気な声を聞くとほっとします。これからも気持ち良く気軽に交流センターにお出かけ頂けますように心よりお待ち致しております。本当におめでとうございます。

京浜サービス株式会社 スタッフ 佐野 キエ子

◇横浜市青少年交流センター10周年おめでとうございます。サークル活動の人達や職員の方の知恵と工夫を駆使してのイベント。また農園での野菜作りと料理教室を通じて人と人との助け合い、つながり、明るく元気になれるこういう場が嬉しいですね。益々楽しい和の交流が出来ることを願っています。

京浜サービス株式会社 スタッフ 古山 茂

◇交流センター10周年、おめでとうございます。月日の立つのは早いもので昨日の様に色々な事が思い出されます。坂道を毎日自転車で上りきると、ホットして、センターにたどり着きます。スタッフや皆様のおかげで長い間勤務する事が出来ました。一月で退職しました。長い間有りがとうございました。心よりお礼申し上げます。

京浜サービス株式会社 元スタッフ 村山 重雄

◇まだ寒い二月末ですが、桜の季節が待ち遠しい今日此の頃です。交流センター10周年との事おめでとうございます。春はスイセン、チューリップ。夏はひまわり、トマトや野菜。秋はコスモスと、四季おりおりの花を、センターのスタッフの方々が一生懸命手入れして下さるので、私達はいつも気持ち良く仕事が出来事を、心より感謝致します。センターに来る人も、道を通る人もいつもきれいと喜んでいると思います。通るたびに季節の花を眺められ、おだやかな気持ちになります。今年も花を眺めながら一生懸命仕事がんばろうと思います。

京浜サービス株式会社 スタッフ 村山 よね子

◇古い建物設備の故障の多さ、大人の常識が通用しない子供たちを相手に職員の方々には大変なご苦労があった10年でしたね。裏方から見ているとよく分かります。今後も大変ですが重要な仕事ですのでがんばって下さい。

京浜サービス株式会社 スタッフ 和田 充弘

【公益財団法人よこはまユースの職員から】

◇青少年の居場所、活動場所に生まれ変わって10年。元気な活動グループ、居場所に救われスタッフの声掛けから育まれる子どもたち、これからも、子どもたち自身の育つ力を引出し応援する施設の機能をつなげたい。

常務理事 安部きみ子

◇平成17年度、当時企画課長だった私は交流センターに1年間勤務していました。楽しかった一番の思い出は、交流センターの年末の大掃除を手伝いに来てくれた青少年委員やボランティアに手作りのスパゲッティをふるまったことです。さほど美味しくもなかった筈なのに、4皿も食べてくれた青少年委員がいたことは忘れられません。うれしかったなー！これからも子どもや若者が成長できる居場所を子どもや若者、スタッフと一緒に創っていきたいと思います。

施設部長 平野 嘉昭

◇開館から10年、その半分を交流で過ごし、どれだけの人に出逢ったのだろう。街でひょっこり逢うと、あの頃が蘇るね。交流は、みんなが創った施設。みんなが支えた施設。みんなに出逢えて良かった。みんな交流に来てくれてありがとう！

総務部長 大槻 繁美

◇「そんでさぁ…。」受付カウンターでカップラーメンを食べながらスタッフと談笑している中学生。そんな日常に当初は戸惑いも。でも不思議と居心地が良く、交流Cでの1年間で自分の価値観をリセットしてくれました。

総務部事業課 キッズ運営係長 野田 由美

◇交流センターの思い出は、何と言っても東日本大震災を交流センターで体験したことです。大きな揺れが収まった後、コーディネーターさんと顔を見合わせ、無我夢中で利用者全員を市長公舎の前庭に避難させたことが思い出されます。

横浜市野島青少年研修センター センター長 伊藤 豊

◇交流センター開館して10年。月日が経つのは早いですね。今も慕ってくれる開館当時に利用していた中学3年生の女の子たちは今年25歳。当時の私の年齢と同じです。感慨深いです。人が繋がる場の交流センターと繋がりをつつまでも大切にしてくれる利用者の皆様に感謝します。

総務部事業課 事業係長 富岡 克之

◇開館から10年。子どもには私たちがどんな存在として映ったのだろう。先生でもなく、お客様を迎えるでもなく、何かと気安く声をかけてくる大人。この不思議な大人の存在が彼らの成長に何かを残していればと思う。

総務部事業課 高橋 勇一

◇10年前の青少年たちは皆大人になり、今では「友人」として私を支えてくれています。あの頃青少年だったみんな、駆け出しのふりふらと私を応援し続けてくれた居場所づくりの先輩方や先生方、そして共に頑張った仲間たち。皆さんがいたから、私も「ふりーふらっと」も、今ここに在ります。感謝！

横浜市青少年育成センター 七澤 淳子

◇様々な理由で交流センターに来る人の、それぞれの人生が、ほんの一瞬交わる場に立ち会えたことは、とても不思議なことと思います。学校とも家とも違う場所であり、今日来た子が明日来るとは限りません。一期一会。それぞれにとって意味のある出会いを作っていきたいと思います。

横浜市青少年交流センター 早川 惟子

◇交流センターは、私自身にとっても居場所でもあり、成長させてもらった場所となりました。ここで出会った方々、ここでの日々の感謝の気持ちでいっぱいです。これからも、みなさんにとっても交流センターが大切な場所であり続けていることを祈っています。

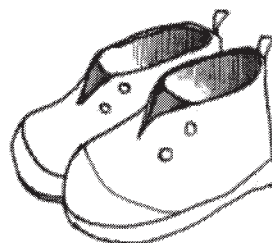
横浜市青少年交流センター 菊池 真理恵

◇交流センターに勤務して9か月。机がずらりと並び、パソコンのキーを打つ音がこだまするような会社で、OLをしていた私です。最初は戸惑うばかりでした。今、私にとって、交流センターは、衝撃と感動が波うつ、日々物語が繰り広げられるワンダフルワールドです。

横浜市青少年交流センター 関 さおり

◇横浜に生まれ育ち青少年活動を通じて成長させてもらいました。いま青少年の育ちの場である交流センターで働けることに喜びとやりがいを感じています。

横浜市青少年交流センター 本田 明



「交流センターにある資源」

横浜市青少年交流センター センター長 阿久津 強

私が横浜市青少年交流センター(以下「交流センター」という。)の施設を利用したのは、平成5年度に実施した講座の受講者としてでした。その当時は、交流センターという名前ではなく、横浜市勤労青少年センター(以下「勤労青少年センター」という。)という名称で、主に就労している青少年を対象とした施設運営をしており、20代、30代の常連の青年達がサークル活動を通じた仲間づくりの場として利用していました。

それから9年後の平成14年12月に、社会状況の変化等により、勤労青少年センターは、交流センターに転換をしました。

そしてさらに5年後の平成19年に、私は交流センターに職員として勤務することになりました。

勤労青少年センターと交流センターとを比較し明らかに違っていたのは、小学生から高校生までの世代の利用者が増えたことでした。

タ方は、小学生がロビーやレクリエーションホールで大声を上げて走りまわり、電話の音が聞こえず困ることも毎日ありました。夜はバンド活動やスポーツをする高校生達、施設の運営に携わる青少年委員のボランティア達が楽しそうに過ごしていました。

さらに、青少年施設でありながら、青少年だけに限らず、乳幼児から高齢者まで幅広い年齢層の人達が利用していました。交流センターは、まるで「小さな社会」のようで、様々な人達に囲まれた環境の中で、青少年は、多様な人達と関わりを持ちながら、成長していました。

平成19年当時の交流センターには、熟練したスタッフが、多くの青少年達と良い距離感を保ちながら信頼関係を構築しており、進路や人間関係の相談に乗ることも多々ありました。

施設運営も事業も安定していました。この当時は体験型事業を多く実施しており、これら事業の多くは、元々青少年が企画したもの等が次第に恒例事業として定着したものでした。

その後私は、人事異動で交流センターを離れ、東日本大震災が起きた直後の平成23年4月に、また交流センターに戻ってきました。

この時は、スタッフの退職や人事異動により、交流センタースタッフのほとんどが入れ替えをしたばかりでした。

まず、ほとんどのスタッフが来館する青少年の名前さえ知りません。ロビーワークをするどころか、ロビーワークという言葉も初めて聞くといったスタッフがほとんどでした。

スタッフとの会話を目当てに来館する青少年も多かったのですが、青少年達の中には、来館して自分と仲の良かったスタッフがなくなったことを知り、残念そうに帰っていく人もいました。彼らにとって、自分のことを良く知り、長きに渡って信頼関係を構築してきたスタッフの存在は、常連である程、大きかったようです。

また平成19年と23年では、青少年達の遊び方がかわっていました。青少年の平成19年当時の小中学生の間では、もちろんDSやPSPなどの携帯型ゲーム機は流行っていましたが、まだレクリエーションホールでドッジボールやバスケットボールをして遊ぶ小中学生が沢山いました。スタッフがドッジボール等を通じて青少年と交流する機会も多くありました。

しかし平成23年の小中学生の間では、仲間同士の会話も少なく、1人1人が携帯型ゲーム機でひたすらプレーしていました。またカードゲームも流行しており、カードを持っている仲間だけの限定したグループが成立していて、そこにスタッフが入り込む余地はあまりありませんでした。

また平成19年当時は、青少年とスタッフが長きにわたる交流によって、信頼関係を構築していたため、食べたゴミを散らかす小中学生や、煙草を吸う高校生がいた場合、スタッフが声掛けをすれば、ゴミを片付け、煙草の火を消してくれていました。しかし、ほぼ初対面に近いスタッフの声掛けに耳を傾ける青少年はあまりいませんでした。

救いだっただのは、来館する青少年を小さい頃から見守ってきたベテランスタッフが、少ないながらも残っていたことでした。ベテランスタッフから、青少年達の一人ひとりの性格や彼らを取り巻く環境、そして経験に基づく対応の仕方を伝えてもらえたことで、すぐには無理でも、徐々に青少年との信頼関係を築くことができたのです。

スタッフによるロビーワークの日々が始まりました。もちろん私も積極的に声掛けをしました。が、そっけない返事や無視といった反応はしばらく続きました。しかし声掛けを続けていくうちに、徐々にスタッフも青少年もお互いの名前と性格を把握するようになり、青少年とスタッフの距離が、少しずつ縮まっていきました。

青少年達が、自分と波長が合うスタッフを見つけ始めました。そして次第に青少年からスタッフに声をかけてくる回数が増えてきました。

すると、それまで青少年へのロビーワークに消極的だったスタッフも、積極的に青少年と関わるようになっていきました。青少年達が大人のスタッフを変え、そして育てたのだと思います。

この10年間で青少年を取り巻く環境は変わり、交流センターでの青少年への取り組みも変わりました。経済不況による正社員採用枠の減少等の就職難、終身雇用制度の崩壊、青少年は自分の未来像を不安定な社会生活の中で描かなければならなくなりました。

また企業の採用者数が減ったことで同期入社の仲間も出来にくくなり、かつ新人育成よりも実績を優先する企業が増えていきました。これらの要因により、青少年の居場所、特に就労後の青少年の居場所の必要性が重要視されるようになりました。

交流センターでは平成25年度から、就労した青少年を対象とする仲間作り事業を実施します。これは勤労青少年センターが以前実施していた活動に繋がるものがあります。

また低賃金や終身雇用制度の崩壊により、青少年の家族環境も不安定になり、生活保護世帯が増加し、これに伴い貧困等の負の連鎖が問題となっています。

交流センターでは平成24年度から、すべての青少年に学習機会の提供をするための無料の学習支援事業を開始しました。

また保護者が生活に追われてしまい、青少年への食生活にまで気を配る余裕がなくなったからなのか、平成19年度当時と比較し、土日1日をセンターでカップラーメンのみを食べて過ごす小中学生が増えました。このため、交流センターのスタッフが手作りの料理を、会話をしながら食事する機会を増やしました。そして、この食事の機会が増える度に、青少年とスタッフとの距離が縮まっていく実感があります。

交流センターの建物は、昭和45年に建築され、今では少なくなった大型の施設です。このため、レクリエーションホールのような体育施設やスタジオ、料理室、自習室など青少年が活動するのに十分が機能を備えています。しかし青少年が継続的に交流センターを訪れるのは、施設機能のせいだけではないと私は思っています。

実際、バンドを解散しスタジオで演奏しなくなった青少年、受験が終わり自習室で勉強する必要がなくなった青少年、そして成長しレクリエーションホールでドッジボールをする機会がなくなった青少年が、引き続き来館してくれています。そして彼らは、いつも受付やロビーにいるスタッフと、とても楽しそうに会話をしています。

交流センターには最新のパソコンやゲーム機もなければ、液晶テレビも設置していません。置いてある設備も古いものばかりです。しかし、交流センターには最新の物的資源はないけれども、そのかわりに青少年達をいつでも受け入れ、存在を認め、理解し、そして共に時を過ごしているスタッフがいます。

➤ 特別寄稿

居場所づくりの活動に期待してきたこと

神奈川大学 講師 久田 邦明 先生

居場所が教える人と社会の展望

駒澤大学 教授 萩原 建次郎 先生

居場所づくりの活動に期待してきたこと

神奈川大学 講師 久田 邦明

はじめに

わたしが居場所づくりの活動に期待してきたことは何だったのか、また、いま期待することは何なのか。これを考えたい。わたしはこれまでずっと居場所づくりの活動に伴走してきたと思っている。[＊1] とすれば、居場所づくりの活動について外側から他人事のように語るわけにはいかないのだ。タイトルの「期待してきたこと」には、そういう意味を込めた。

横浜市青少年交流センター(ふりーふらっと野毛山)とのかかわりについては、すでに二つの文章を書いている。[＊2] そこで、ここでは、広い範囲にわたる居場所づくりの活動を見渡し、あらためて「期待してきたこと」を考えることにする。なお、ここでいう居場所づくりの活動とは、地方自治体の行政施策を含む、地域活動としての居場所づくりのことだ。

以下では、このような問題意識のもとで、居場所づくりの活動への期待を三点に整理して述べる。この活動に伴走したわたしは、役に立ってきたのだろうか。

1 地域活動を変えること

わたしが居場所づくりの活動に期待したのは、まず第一に、これによって住民が、地域の住民活動を変えるようになることだ。

居場所づくりの活動は、青少年育成の施策と活動が壁に突き当たって空転する時期に、地域で子どもや若者を育てる必要を強く意識する人びと(行政職員、住民)によって始められた。誰かが中央から号令を発したのではなく、全国各地に点在する、同じおもいをもつ人びとがそれぞれに動き出し、ひろがったものだ。このような経緯があったせいで、行政依存・上意下達・横並びとは別の創意工夫に満ちた活動になった。当初、行政では「居場所のようなもので行政が面倒を見るのか」といわれていたし、非行対策と団体育成の青少年育成活動に満足する人びとには、その意味が理解されにくかった。

居場所づくりの活動を担う、そのような人びとの姿に、わたしは、高度経済成長期のあとの青少年育成活動の可能性をみるおもいがした。それだけではない。行政依存・上意下達・横並びではないその活動に、今後の住民活動の方向が示されているのではないかと考えた。

わたしは、居場所づくりの一般的な方法論(マニュアルづくりなど)を考えたことはない。住民の意識や行政施策の手法が変わらないままで、かたちだけの居場所づくりがひろがっても、意味のある居場所づくりがすすむとは思えなかったからだ。そんなわけで、居場所づくりの活動について文章を書いたり講演で語ったりする場合には、各地の事例にことよせて書いたり語ったりするというスタイルをこころがけた。これによって、住民がそれぞれ独自に、先行事例と自分たちのところの事情とのあいだの距離を測って活動を始めることを期待した。そういう活動こそ、先に紹介した経緯で誕生した居場所づくりの活動にふさわしいと考えたからだ。当然にもこの方法では、新しい動きが一挙にひろがるとは考えられない。

それでは、たとえ限られた範囲であったとしても、居場所づくりの活動が、新しい動きを生み出す

ことになったのだろうか。いまのところ、居場所づくりの活動の全体的な状況を見て答えを出すことはできないのだけれども、一ついえることがある。

それは、居場所づくりの活動は、地縁に依拠する地域住民団体の人びとと、ミッション(使命、目的)によって結びつく市民活動団体の人びとが出会い、協力する可能性をもつ活動であり、この点からみて、今後の住民活動の方向を教えてくれるものだ、ということだ。この二つのタイプの団体は、言葉遣いや活動スタイルが異なるために、関係がなかったり反目したりしてきた。それが協力する道すじを、居場所づくりの活動が示してくれた。

二つのタイプの団体を結びつけるには、知恵とわざをもつ人がいなければならないが、そういう人が活躍する姿を、わたしは、幾つもの居場所づくりの活動のなかに思い浮かべることができる。その一つとして、ここでは、横浜市立十日市場中学校の地域交流事業を挙げておきたい。これは、二つのタイプの団体を結びつける人(よこはまユースの職員、地域住民団体のリーダー、市民活動団体のリーダー)がいたからこそ、実現したものなのだ。この事業は、居場所づくりを名乗るものではなく、中学生の地域ボランティアを支援する活動だが、「顔の見える関係」づくりを合言葉に、地域のなかに中学生たちの居場所をつくらうとする活動とみることができる。

2 行政施策の手法を変えること

第二に、居場所づくりの活動が、行政施策の手法を変えていくようになることを期待した。

居場所づくりの活動は、行政施策の手法には馴染みにくいものだ。子どもや若者がそこへやって来て、一人で居たり何人かで集ったりする事業の意義について、行政施策のことは借りて、その目的や方法や成果を簡潔にまとめるのは簡単なことではない。しかし、わたしは、居場所づくりの活動のこのような特徴に着目して、そこには、行政施策の手法を変える力があるのではないかと考えた。

少人数の子どもや若者が相手の活動は、行政効率を求める行政施策としては説得力をもちにくい。また、仮に多くの子どもや若者が集まっても、子どもや若者がそこで何を手に入れ、どのように変わったのかを第三者に説明するのは簡単なことではない。[*3] そのせいで、運良く行政施策としての居場所づくりが始まったところでも、いつ中断するか分からないという不安定な状態が続いている。

じっさい、継続する居場所づくりの事業には、児童の放課後対策や若者の自立支援のように、目的の明確な事業が目立つ。これらは、特定の目的を実現するための手段としての居場所づくりといえるものだ。その一方で、居場所づくりそのものに目を向ける活動は、行政施策として成り立ちにくい。たとえば、中・高校生世代のための居場所づくりや、社会へ適応しているかにみえても潜在的な問題を抱える若者(大学生や会社員)を想定した居場所づくりの場合、行政施策で取り上げられる可能性は低い。これを実現させようとするれば、よほど知恵を絞らなければならない。たとえば、中・高生世代のための居場所づくりの場合には、この世代の行政施策が空白領域であり、行政施策の考え方からしても何らかの施策が必要とされることを示し、居場所づくりの活動に他の行政施策に代替されない意味のあることをまとめる必要があるだろう。

行政施策が参加人数の多寡などを重視する形式主義的なものになるのは仕方のないことだろう。しかし、それに満足していてよいとは思えない。居場所づくりの活動が子どもや若者に必要であ

り、社会的に意味のあるものであるのならば、従来の行政施策の手法の限界を見定めて、それを乗り越えていく手立てを考えなければならない。居場所づくりの活動が、このようなことを教えてくれる。

ただ、これを追求するのは難しい。わたしは、これまで何度も行政の委員を引き受けてきたが、大まかにいって、行政施策を追認するだけで、行政施策の手法を変えることはできなかった。これは自分の力不足のせいだけでもないと思う。行政の委員の場合、報告書等をまとめると縁が切れてしまうことが問題だ。それだけではない。そもそも行政の委員という仕組みに問題がある。一言でいえば、きわめて中途半端なかかわり方しかできないことだ。一つには、多くの場合、委員にはものごとの決定権がない。もう一つには、ボランティアのような中途半端な関わり方では充分にはたらくことができない。このようなことを考えれば、委員会を招集する行政の担当部局に施策化の明確な方針があること、また、それをすすめる知恵と勇気をもつ職員がいること、これらが前提条件だろう。そうはいても、わたしのような学識経験者枠の委員ではなく、住民代表の委員の場合はまた別の関わり方があるにちがいない。

子育て広場の活動をすすめる団体などが協力して、横浜市や神奈川県とともにすすめる、市民協働事業を主題とした調査研究活動は、行政施策の手法を変えるという課題を追求するものだろう。このような活動を参考にしながら、行政施策の手法を変える可能性を考えていきたい。

3 未来の教育の姿を描き出すこと

第三に、居場所づくりの活動が、学校モデルの教育を超えた、未来の教育の姿を描き出すようになることを期待した。

学校モデルの教育は、それが歴史的な存在であってみれば、いずれ次の時代の教育へと変わっていく(教育の専門施設としての学校が無くなるというのではない)。生涯学習ということばがひろがったのは、そのさざしだろう。居場所づくりの活動は、学校モデルの教育とは別の、次の時代の教育の姿を思い描く、一つの手がかりになるだろう。居場所づくりの活動へは、このような期待がある。

わたしは、伝統社会の年中行事や祭りのときの子供仲間の小屋や若者仲間の若者宿を紹介して、居場所の説明をしてきた。そうすることが、居場所への理解を得やすいと、早い時期に気づいたからだ。しかし、自分の立場を「ときどき伝統主義者のふりをする」と語ってきたように、伝統主義者ではない。「昔の親は立派だった」などと暮らし方のちがいをみないで昔を懐かしがる伝統主義者には手前勝手な論法が目立つ。

そうはいても、現在の学校モデルの教育にとらわれないで、未来の教育の姿を思い描くには、何らかの手がかりが必要だ。まず、現在の学校モデルの教育が教育の終着点ではないことを認めて、その上で、次の時代の教育の姿を思い描く手がかりを、これまでの子どもや若者を育てる活動のなかに探る必要があるのだ。これからも考えていきたい。

居場所と呼ばれる、人が出会い交流するところは、過去から現在、そして未来にわたって、どの時代にも、人びとの暮らしに無くてはならないものだということも、あわせて確認しておきたい。

東日本大震災の被災地では、震災の直後から各所に人びとの寄り集うところが誕生した。人びとの暮らしには、命を守るための衣食住にわたる基本的な条件が必要だが、それに加えて、人

びとの寄り集うところが無くてはならないのだ。そしてそういうところが、人が変わっていくための大きな役割を果たす。支援ボランティアの手によって、中・高校生のために開設された、ほんとスペース石巻では、居場所に集まる中学生たちが、被災者のために近くの仮設住宅で、ほんとカフェという居場所を始めたという。そこが、中学生たちが育っていくところだったといえるのではないか。居場所が学校モデルとは別の教育の場になっていたということを教えてくれる気がする。

おわりに

高度経済成長期の、地域共同体(生活共同体としての地域社会)のなごりのある地域で育ったわたしは、「居場所がない」と思ったことがない。居場所に関心をもつ人のなかには、自分が「居場所がない」と感じてきた人が少なくないようだ。そういう人が居場所を求める切実さに、わたしは欠けるところがある。しかし、その代りに、居場所というものについて少し距離を置いたところからみることができる。このような位置にいることを、これからも生かしていきたい。

そういうわたしの問題意識を一言でいえば“問いとしての居場所”ということばで表現することができる。居場所をとおして、教育の在り方、行政の役割、日々の暮らしなどについて考えることができるという意味だ。[*4] これはまた“方法としての居場所”ということばで表現することができると思う。居場所づくりを目的としながらも、目的によって翻弄されないように、いつもカッコに括って考えるという意味だ。今後も、このような問題意識を忘れないようにしたい。

◇付記

- *1 1996年、日本社会教育学会の理事として「子どもと若者の居場所」というシンポジウムを企画した。その翌年から2年間にわたって東京都教育庁生涯学習部の家庭教育調査事業座長として2冊の報告書をまとめた。また、それをもとに『子どもと若者の居場所』(2000年)という編著書をまとめた。その後、2000年代には全国各地の活動を訪ねたり話を聞いたりするとともに、青少年育成の雑誌の編集や、自治体の青少年施策の委員などを引き受けてきた。
- *2 「居場所タイプの青少年施設のひろがり」『横浜市青少年交流センター開館5周年記念誌』2008年。
「横浜市青少年交流センターに期待するもの」『YOKOHAMA EYES 2010』2011年。
- *3 横浜市青少年交流センターの新旧スタッフから聴く、子どもや若者との関係の話は実に印象深く、感動的でさえある。なかでも、彼ら彼女らが大きくなって利用者でなくなったあともつきあいがあるという話は特筆される。スタッフは、親戚や近隣のおじさんおばさん、お兄さんお姉さんと似た存在という一面があるのだろう。
- *4 子どもの居場所ホワイテキャンパス(岩手県奥州市水沢区)の生みの親である大村千恵さんは、「居場所なんかいない」という高校生のことばを紹介している(NHK教育テレビ「土曜フォーラム」2006年5月6日放映)。居場所を自己目的化する活動の問題と、居場所を必要とする地域社会の矛盾を指摘することばだ。
わたしも“問いとしての居場所”、“方法としての居場所”という問題意識を忘れないようにしたいと思う。

居場所が教える人と社会の展望

駒澤大学 教授 萩原 建次郎

居場所が社会的な課題として私たちの意識の前景に浮上してきたのは、人間の生の在り様を大きく変えてしまうほどの地殻変動が、私たちの暮らしの深層で生じている結果と筆者はみている。その変動の特徴の一つは、人の手を直接介さずに、あらゆる生活場面が機能化・サービス化するという暮らしの質的変容である。そしてもう一つの特徴は、「大人になること」への道筋の不透明化、すなわち「大人」の概念自体が揺らぐという人の成長発達の時間展望の変容である。その二つの変容が何をもたらしてきたのかを考えながら、居場所のこれからを展望したい。

1. 子ども・若者の生の多面性を排除する社会

社会学者の宮台真司は中高校生への直接的な聞き取り調査を通し、都市化・郊外化する日本社会にあって、子ども・若者たちが脱社会化し、他者からの承認をあきらめ、他者なき自己を生きる道を選択し、内に負のエネルギーを増大させた存在となっていることを指摘した(宮台,1997)。この問題は人間の生における負の側面・影の側面を社会がいかに受容していくのか、という問題にかかわることである。

同時に大人の寛容さの問題にも関わるが、高度経済成長期以前の地域社会において、子ども・若者の「悪」は、大人によって暗黙の内に受容されてきたものである。教育社会学者の菊池龍三郎は、従来、地域社会には人間への深い洞察が働いており、建前では否定されるべき「負の価値」を放出させることによって、個のレベルと集団のレベルでのアイデンティティが保つことを保障してきたことを指摘する(菊池,1984)。例えば祭りには、単に地域の伝統文化の継承だけでなく、若者たちの「性」とある種の「暴力的なエネルギー」の解放といった、負のエネルギーの放出機能も担い、そのことが同時に生命の充溢感とも結びついてきたという。

このように生のもつ正負の価値をあわせもち、多様な関わり合いによる相互的かつ受苦的な営み、象徴的なく死>とく再生>を内包した意味空間を、高橋勝は「自己形成空間」と名づけている。そこでは子どもたちが多様な他者と出会い、「無意識のうちに『古い自己』の解体と、『新たな自己』の再生が進行する自己生成(Selbstwerden)のきっかけを生む場」であると指摘する(高橋,1992)。

しかし、このような子ども・若者の自己形成空間は高度経済成長期以降、情報消費社会となった現在に至るまでに大きな変化を遂げている。

思春期・青年期を専門とする精神科医の青木省三は、大人が青少年のために作った場所は「ガラス張りのように周囲から見通せる明るすぎる場、無菌状態で無影灯に照らされた近代的な手術室のような場」となっていて、かえって居心地の悪さを招いていると指摘する(青木,1996)。これは青少年に特化した空間だけではなく、都市・郊外においても、地域全体が明るく見通しのよい透明な空間となっていることと重なる。いいかえれば、そこは大人社会の生産主義と機能主義(できるかできないか、役に立つか立たないか)のまなざしが浸透し、「無駄」とされるものは極力排され、効率的に機能することだけが重視された空間である。これは子ども・若者の居場所が社会問題と

して浮上してきた80年代の社会構造とも呼応している。彼らが居ようとする場所の隅々まで機能主義のまなざしが浸透し、「ただ居ること」の場所さえ認められにくくなったことと重なる。宮台が指摘した「内に負のエネルギーを増大させた子ども・若者たちの生の在り様」を裏返せば、生のあいまいさや多面性を受け止める場、存在承認の場を排除してきた機能主義社会の問題にぶつかるのである。

そのような中、90年代中頃以降の少年犯罪の質的变化が見られるようになったといわれている。それは「非行型」「遊び型」といわれる犯罪から、「自己確認型」と呼ばれる存在承認への深い欲求に裏支えされた犯罪への変化である(影山,2001)。

例えば、1995年、阪神淡路大震災が起こった同年に地下鉄サリン事件が起こる。事件を引き起こしたとされるカルト的宗教団体の元信者からは、「精神の拠り所がこの社会にない」「営業成績で常に比べられる毎日のなかで、いったい自分という存在価値はどこにあるのか」といった自己の存在価値への問いかけが入信のきっかけであったことなどが語られた。それは97年に神戸連続児童殺傷事件を起こした14歳の少年が「犯行声明文」に書いた、「透明な存在としてのボク」という言葉が、大人たちに衝撃を与えたのも同様である。少年は「せめて空想の中だけでも自分の存在を認めてほしいのです」と語り、少年犯罪の質が「自己確認型」へと変わったという指摘がなされる大きなきっかけとなった(影山,2001)。このように、若者の居場所のなさや負のエネルギーの表出、存在承認への希求は表裏一体である。

一方、かつての子ども・若者の自己形成空間であった地域は、彼らにとって学校・塾と家を結ぶ“通り道”と化してきている状況にある。そこでは安易に彼らを地域に戻そうとしても、これまで見てきたように自己形成空間としての機能は期待できない。その意味で子ども・若者の自己形成空間の創生には、学校・家庭・地域以外の第四の場としての青少年施設や公民館をはじめとする社会教育・生涯学習(関連)施設、児童館などの公共施設や、プレーパーク、フリースペース、コミュニティ・カフェといった市民主導の手作りスペースなど、多様な場やその担い手が重要な意味と役割を持つ時代に突入している。それらの場を支える人々の存在意義を浮き彫りにする意味で、かつて地域共同体を子ども・若者の自己形成空間たらしめてきた「社会的親・兄弟」、「社会的おじ・おば」といえる人々の人間形成の視座からの意味を確認しておく必要がある。

2. 現代の社会的な親・兄弟、社会的おじ・おばの存在意義

情報消費社会化、産業社会化する以前の地域には、子どもの社会的規範や人間関係のモデルとなり、子ども・若者の社会的成長の支えとなる社会的親・兄弟、社会的おじ・おば(例えば駄菓子屋のおばちゃん・おじちゃん、子ども組や子ども会の世話人、若者組や青年団の先輩たち、郷土芸能の指導者、お寺の和尚さん、近隣の世話焼きなおじさん・おばさんなど)の存在が欠かせなかった。「教育的な大人」とは異なる、このような大人が地域に多様に存在していたことが、子ども・若者に人間理解への奥行きと他者との共生感覚を育ててきた(青木,1996)。彼らの立ち居振る舞いは、子ども・若者を産業社会に合わせた生産性と有用性の能力発達へ仕向けようとする「教育的かわり」とは異質の関係性を生み出すがゆえに、子ども・若者にとっては「良い加減」の距離感を生み出し、「問題」を抱えた子ども・若者たちの援助装置のようなものとしての機能も果たしていた(青木,1996)。

高度経済成長期以降は、地域・学校の教育的権威が衰退し、家庭が教育家族化してきた経緯からすれば(広田,1999)、子ども・若者を取り巻く身近な大人との関係性は「教育的かかわり」へと限定されてきたともいえる。そうした状況において、あらためて大人と子ども・若者の教育的かかわりを相対化し、広く人間形成の視座から、彼らの生を承認しつつ、「共に自己形成の途上にある異世代として」(高橋,2002)共に歩む他者の存在が求められている。それはまだ十分に社会的承認と制度的保障を得られていないが、関係の豊かさへ転換するような新たな社会的親・兄弟・おじ・お婆的存在は、子ども・若者の囲い込まれた生を解きほぐしていく重要な存在である。その意味では青少年交流センターのように、青少年施設職員やスタッフ、ボランティアもまた、この時代の新たな社会的親・兄弟・おじ・お婆的存在ともいえるのではないだろうか。

3. 「一人前」になる筋道が見えない社会

ところで、冒頭で居場所が社会的課題となる背景に、「大人になること」への道筋が不透明化しているという時間展望の問題を指摘した。この問題も自己形成空間の変容過程と深く連動している。

かつての農耕型社会であれば地縁・血縁の特定の社会関係に規定され、「大人になること」はその共同体を維持継承するための力量と立ち居振る舞いを身につけること、すなわち「一人前になること」であった。そこでは共同体のなかで求められる可視化可能で、伝達可能な共通のスキルと通過儀礼が一人前の内実を支えてきた。例えば「俵一俵担げるか」「目上に対してしっかりあいさつできるか」といった可視化や明文化可能な力量や規範から、農作業や漁といった労働場面での協同行為を通じて、そこで求められる関係性や共通感覚が存在していた。そうした一人前モデルの伝承伝達の間として子ども組や若者組・若集宿といった場が設けられ、地域コミュニティ全体で子ども・若者を大人へと育て上げていく仕組みが用意されていたのである。

そうした一人前への育て上げの仕組みは、高度経済成長期を経て、工業型社会へと社会構造が転換することで、大きく変容していくことになる。1970年代半ばには高校進学率が90%を超え、子ども・若者の育ちの場は学校教育へと大きくシフトする。それに伴い、地域コミュニティが子ども・若者の育て上げの舞台から後退していく。一方、地域コミュニティそのものも、都市部への人口流出やニュータウン化に伴い、大人の地縁ネットワークを衰弱させていった。それは同時に子ども・若者が一層地域コミュニティで育つ機会から遠ざかることを意味し、暮らしに根ざした一人前のモデルとの出会いの喪失を意味していた。彼らにとって身近に経験する大人といえば親と教師、塾の先生といった教育的まなざしを湛えた他者であり、工業型社会が要請するのは、絶えず更新し続ける技術と情報に対応する、天井のない個体能力の発達と習得であった。その意味で河合隼雄が指摘するように、社会の進歩にともない、そのつど認められる「大人」の定義が変化し続ける、「大人になることのおずかしさ」を抱えた社会となった(河合,1996)。

こうした事態は90年代半ば以降に、情報消費社会化が加速度を増すなかで一層顕在化する。インターネットを通じての匿名の他者とのつながりの増大や自己選択的消費行動の増大、経済活動のグローバル化による人口移動の流動化は、顔の見えるかかわりあいと社会経験の質を変容させた。生きられた社会の抽象化、他者の顔の喪失が同時進行で起こった結果、一人前に成ることの具体性を失い、何をもって「大人」と成るのかという基準も一層見えなくさせている。

それは同時に、他者と共同体からの具体的な支えを失った自己愛的人間を生み出している。その内実は「空虚な自己」であり、手すり（足場（共同体））を失った浮遊化した自己とならざるを得ない（影山,1999）。

その意味では子ども・若者に先行する世代であっても、自らの立ち位置をつねに模索せざるをえず、他者からの手ごたえのない世界の中で自己が浮遊化する時代状況の中に生きているのである。

4. 生涯各期と世代間のつながりの意味

哲学者の中村雄二郎は、ライフサイクル（人間の生涯のプロセス）をめぐり、次のような指摘をしている（中村,1999）。

（本来人間の生について、私たちは）誕生から成年、婚姻、年祝いを経て死に至るライフサイクルの全体をさまざまな通過儀礼によって分節化しつつ、有意味化してきた。

文化のシステムがそのようなものとして十全に機能しているところでは、ひとの一生の各時期はそれぞれに、全体のなかで意味づけられ、価値づけられる。したがってそこでは、人生の特定の時期—たとえば生理的、身体的にもっとも力があり、活動力、生産力がもっとも高い壮年期—だけに価値と意味が集中するということはない。

先に触れたように、かつて日本全国各地の村落には、地縁で結ばれた社会的親による仮親制度をベースとした子育て習俗と地域共同体が存在した。そこでは若者宿を拠点として、地域の大人たちが若者を一人前に育て上げて行く仕組みが存在しており、防災防犯活動、宗教行事への参加と参画、村の政治参加、仕事や家庭生活のスキルの獲得、自然資源を乱獲しない、自然と共生する知恵の伝達といったことなどが地域活動の中に暗黙のうちに埋め込まれていた。

また、生涯各期に応じた各世代間の有機的つながりの仕組みとして、7歳頃から加入する子ども組、15歳頃から加入する若者組、その後は壮年組、老年組などが伝統的な地域共同体には存在していた。このように人の生涯各期（子ども期・青年期・壮年期・老年期）は、さまざまな節句行事や祭り、通過儀礼、所属集団などで意味づけられ、人生各期が独自の意味を持ちつつも、互いに補い合う関係に満ちていた。自然が四季折々を彩りながら巡っているように、産業社会化以前の暮らしでは、生涯各期いずれもが独自の色彩を持ち、巡りあう生の円環（ライフサイクル）で成り立っていたことが見て取れる。

しかし、近代社会の有用性の原理、生産性の原理でライフサイクルが支配されたとき、子ども期や老年期が（女性、障害者とともに）軽視され、壮年男性をモデルとした有用性と生産性の一元的な価値で生がとらえられるようになってしまったと中村はいう。伝統的な地域共同体の解体に伴って、世代継承のライフサイクルと生涯各期のライフサイクルの双方が解体に瀕している状況からすれば、「居場所づくり」というのは、ライフサイクルと包括的な人間形成の場を新たな形でつなぎなおす、世代を通底した課題であることが見えてくる。

5. 居場所のこれから—青少年と大人が共に育つ小さな社会の創造へ—

文化人類学者のレイヴとウェンガーが明らかにしたように、子ども・若者は一人前になっていく過程で異世代と共に場に参加しながら、そこに憧れや役割モデルとなる対象を身近に見つけたり、具体的な状況の中で物事の意味を学んでいく(レイヴ、ウェンガー,1993)。

私たちが生きている個別具体的な他者とのかかわりなしには自己の存在感もアイデンティティもつかみえないのと同様、この世界で「一人前」となっていくには、何よりも、具体的な他者とのかかわりと具体的な状況への参加の機会が不可欠だ。とくに複雑性と予測不可能性に満ちた現代にあっては、多様な他者とのかかわりが織り成す具体的な状況や場それ自体を創り出すことと、そうした場へ参画する機会が求められる。

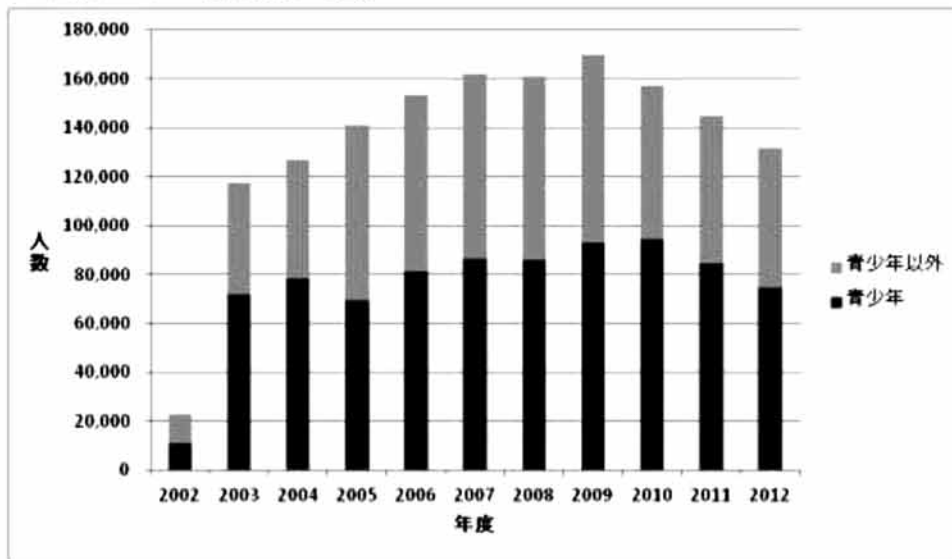
そうしたなかで子どもと若者を共に同時代を生きるく共同生活者としてとらえなおすことが求められる(高橋,2011)。彼らを発達途上の未熟な存在とみなすのではなく、子ども期、青年期を生きる彼ら独自の力に気づき、時に彼らの力に学び、互いに補い合いながら、一緒に小さな場をひらいていくことが、今、世代を超えて求められているのではないだろうか。

引用文献・参考文献

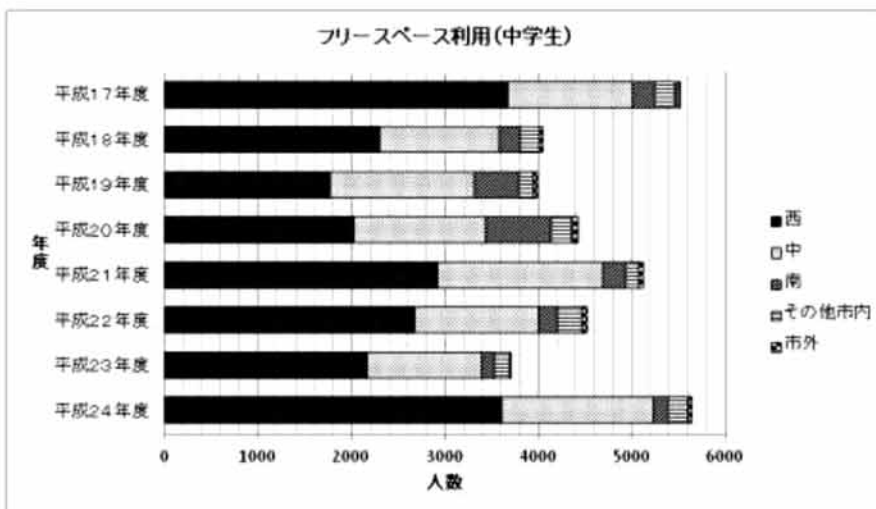
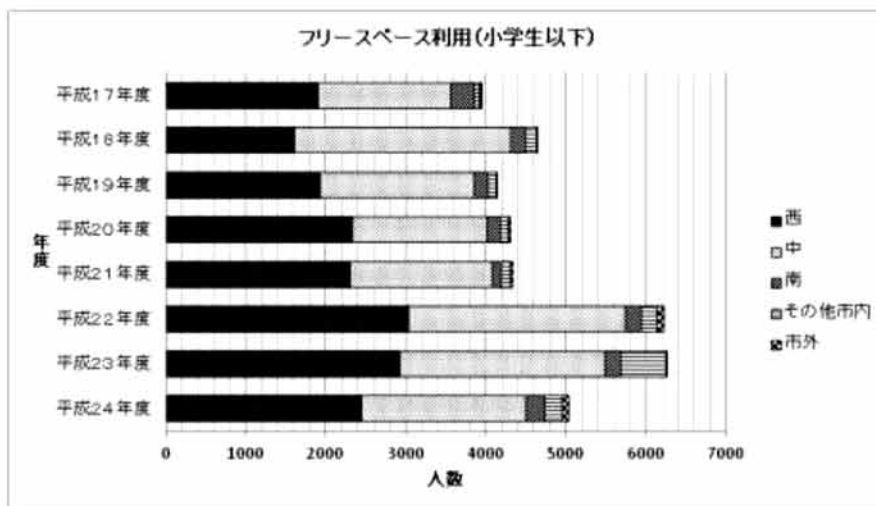
- 青木省三 1996『思春期ころのいる場所』岩波書店
- 影山任佐 1999『「空虚な自己」の時代』NHKブックス
- 影山任佐 2001『自己を失った少年たち』講談社
- 河合隼雄 1996『大人になることのおずかしさ』岩波書店
- 菊池龍三郎 1984「地域の教育力の分析の視点に関する一考察」『日本生涯学習学会年報5号』
- 高橋勝 1992『子どもの自己形成空間』川島書店
- 高橋勝 2002『文化変容の中の子ども』東信堂
- 高橋勝編著『子ども・若者の自己形成空間』東信堂
- 中村雄二郎 1999『死と生のレッスン』青土社
- 萩原建次郎・田中治彦 2012『若者の居場所と参加』東洋館出版
- 萩原建次郎 2013「青年期の「居場所」支援」長崎勤他編『社会性発達支援のユニバーサルデザイン』金子書房
- 萩原建次郎 2013「ひきこもり」日本発達心理学会編『発達心理学事典』
- 広田照幸 1999『日本人のしつけは衰退したか』講談社
- 宮台真司 1997『透明な存在による不透明な悪意』春秋社
- レイヴ、ウェンガー 1993『状況に埋め込まれた学習』産業図書

資料編ー1

◆交流センター利用者数の推移

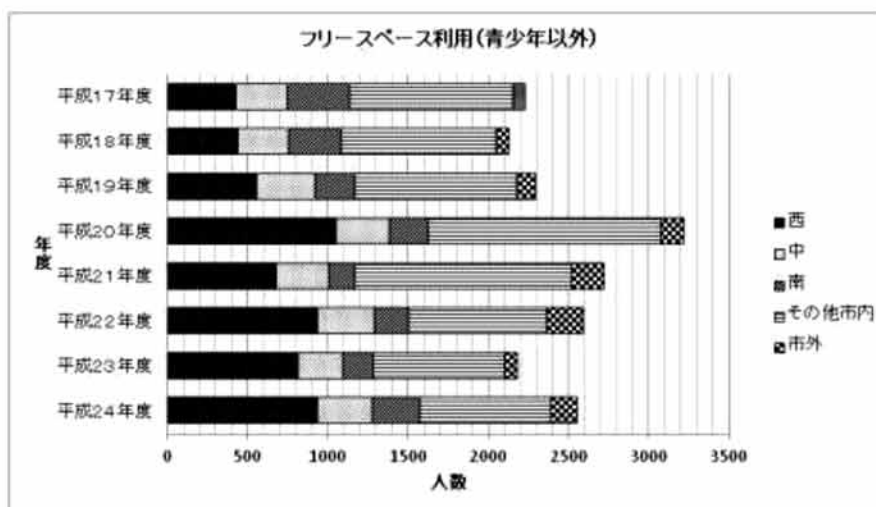
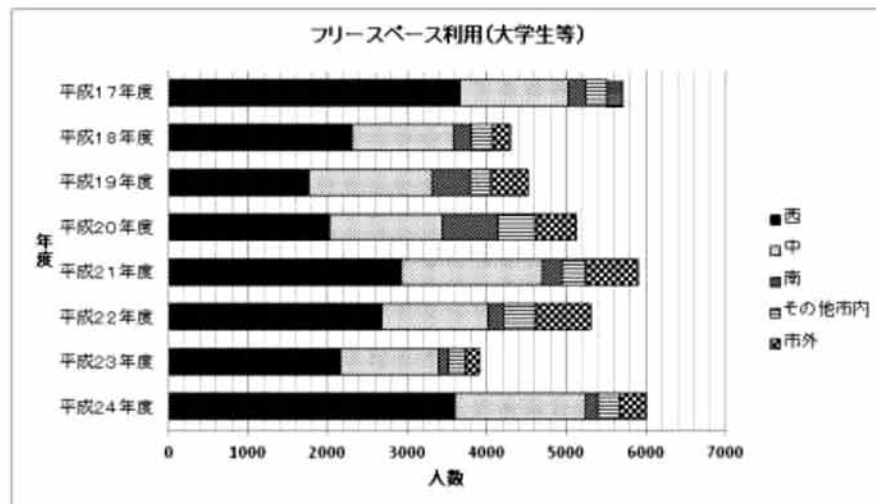
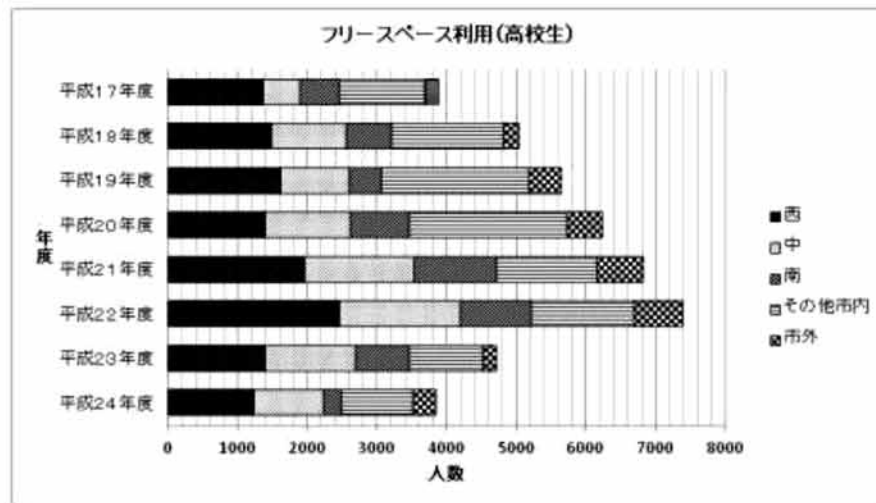


◆フリースペース利用者数推移



資料編ー2

◆フリースペース利用者数推移



資料編-3

◆新聞、雑誌掲載記事、出版物

神奈川新聞 2009年2月22日号
「青少年の居場所づくり」全国フォーラム
2009について



SANKEI EXPRESS 2012年7月2日号
南三陸町のジュニアリーダーと、関東の青少年の交流イベントに、青少年委員会から3人が参加しました。委員会活動の紹介等を行いました。



「居場所論」や施策を整理・統括し、若者の参加による新しい社会づくりへの展望について、研究者や実践者によって著された本です。第6章「青少年センターでの居場所づくり」を、元職員の七澤が、交流センターの取り組みや事例をもとに執筆しました。

タイトル	若者の居場所と参加—ユースワークが築く新たな社会—
著者	田中 治彦・萩原 建次郎 編著
出版年月	2012年4月
発行	東洋館出版社

「ふりーふらっと野毛山」年4回程度発行している交流センターのイベント案内。主に近隣の4つの小学校に配布。発行部数各号2,500部程度。

[illegible]

春号 4月27日発行

2013年10月10日
2013/10/17
2013/10/17

ふーふらっと野毛山



だんじり園地がまだ多く残っています。
 今年度園地センター（ふーふらっと野毛山）では、
 園地からいろいろなイベントや展示を企画して楽しんでいただいております。
 これら、たくさんのおこにちやうけしてあよう！





夏休みのイベント

お楽しみ抽選会
 抽選券の購入に限り、抽選は、10月10日、17日、24日の3回抽選を行います。抽選は、抽選券の購入に限り、抽選は、10月10日、17日、24日の3回抽選を行います。

お楽しみ抽選会
 抽選券の購入に限り、抽選は、10月10日、17日、24日の3回抽選を行います。抽選は、抽選券の購入に限り、抽選は、10月10日、17日、24日の3回抽選を行います。

8月のイベント

ふーふらっと野毛山



お楽しみ抽選会
 抽選券の購入に限り、抽選は、10月10日、17日、24日の3回抽選を行います。抽選は、抽選券の購入に限り、抽選は、10月10日、17日、24日の3回抽選を行います。

お楽しみ抽選会
 抽選券の購入に限り、抽選は、10月10日、17日、24日の3回抽選を行います。抽選は、抽選券の購入に限り、抽選は、10月10日、17日、24日の3回抽選を行います。

お楽しみ抽選会
 抽選券の購入に限り、抽選は、10月10日、17日、24日の3回抽選を行います。抽選は、抽選券の購入に限り、抽選は、10月10日、17日、24日の3回抽選を行います。

お楽しみ抽選会
 抽選券の購入に限り、抽選は、10月10日、17日、24日の3回抽選を行います。抽選は、抽選券の購入に限り、抽選は、10月10日、17日、24日の3回抽選を行います。

お楽しみ抽選会
 抽選券の購入に限り、抽選は、10月10日、17日、24日の3回抽選を行います。抽選は、抽選券の購入に限り、抽選は、10月10日、17日、24日の3回抽選を行います。

お楽しみ抽選会
 抽選券の購入に限り、抽選は、10月10日、17日、24日の3回抽選を行います。抽選は、抽選券の購入に限り、抽選は、10月10日、17日、24日の3回抽選を行います。

夏号 7月7日発行

【土曜】ふりーふらっと野毛山 2011/10/29

ふりーふらっと野毛山

ふりーふらっと野毛山（横浜青葉青年交流センター）では、4年連続で人気を集める秋のイベント「ふりーふらっと野毛山」を開催いたします。秋のイベントで盛りだくさん1日で、家族連れで楽しむことができます。また、ふりーふらっと野毛山には、ふりーふらっと野毛山というおもしろいキャラクターも登場します。ぜひ、ふりーふらっと野毛山へ遊びに来てください！

ふりーふらっと野毛山の秋のイベント

ふりーふらっと野毛山

ふりーふらっと野毛山（横浜青葉青年交流センター）では、4年連続で人気を集める秋のイベント「ふりーふらっと野毛山」を開催いたします。

●10月 10日（土）（10月10日）

●11月 10日（土）（10月10日）

（10月10日）

●12月 10日（土）（10月10日）

●12月 10日（土）（10月10日）

●12月 10日（土）（10月10日）

●12月 10日（土）（10月10日）

●12月 10日（土）（10月10日）

●12月 10日（土）（10月10日）

●12月 10日（土）（10月10日）

●12月 10日（土）（10月10日）

●12月 10日（土）（10月10日）

●12月 10日（土）（10月10日）

●12月 10日（土）（10月10日）

●12月 10日（土）（10月10日）

●12月 10日（土）（10月10日）

●12月 10日（土）（10月10日）

●12月 10日（土）（10月10日）

●12月 10日（土）（10月10日）

●12月 10日（土）（10月10日）

●12月 10日（土）（10月10日）

●12月 10日（土）（10月10日）

●12月 10日（土）（10月10日）

●12月 10日（土）（10月10日）

●12月 10日（土）（10月10日）

●12月 10日（土）（10月10日）

●12月 10日（土）（10月10日）

●12月 10日（土）（10月10日）

●12月 10日（土）（10月10日）

●12月 10日（土）（10月10日）

●12月 10日（土）（10月10日）

●12月 10日（土）（10月10日）

●12月 10日（土）（10月10日）

●12月 10日（土）（10月10日）

●12月 10日（土）（10月10日）

●12月 10日（土）（10月10日）

●12月 10日（土）（10月10日）

●12月 10日（土）（10月10日）

ふりーふらっと野毛山

ふりーふらっと野毛山（横浜青葉青年交流センター）では、4年連続で人気を集める秋のイベント「ふりーふらっと野毛山」を開催いたします。

●10月 10日（土）（10月10日）

●11月 10日（土）（10月10日）

●12月 10日（土）（10月10日）

●12月 10日（土）（10月10日）

●12月 10日（土）（10月10日）

●12月 10日（土）（10月10日）

●12月 10日（土）（10月10日）

●12月 10日（土）（10月10日）

●12月 10日（土）（10月10日）

●12月 10日（土）（10月10日）

●12月 10日（土）（10月10日）

●12月 10日（土）（10月10日）

●12月 10日（土）（10月10日）

●12月 10日（土）（10月10日）

●12月 10日（土）（10月10日）

●12月 10日（土）（10月10日）

●12月 10日（土）（10月10日）

●12月 10日（土）（10月10日）

●12月 10日（土）（10月10日）

●12月 10日（土）（10月10日）

●12月 10日（土）（10月10日）

●12月 10日（土）（10月10日）

●12月 10日（土）（10月10日）

●12月 10日（土）（10月10日）

●12月 10日（土）（10月10日）

秋号 9月27日発行

[illegible]

冬号 12月9日発行

Dec 24, 2012
(Monday, 祝)
13:30-16:00

年末騒音 ライブ

～赤いアイツのプレゼント～

freedom
ELVIS LAGOON
GAKEGULU
マカロニ
Back-end
カリソメ音め

at
横浜市青少年交流センター
(ふりーふらっと野毛山)
4階レクリエーションホール

青少年ライブ(出演する青少年が作成)



横浜青少年交流センター夏休み
【ふらっとカフェ】
ゆかた
浴衣を着て花火を見に行こう!

「浴衣を着て花火を見に行きたい!」だけと浴衣の着方がわからない...
そんなあなたに交流センターが浴衣の着付けをお手伝いします!

★日時 7月15日(日)、16日(月) 両日とも14時～ ※1F受付までお越しください
★場所 横浜市青少年交流センター
★所要時間 約10分・浴衣・袴持ち込み可 当日参加OK、参加無料

ふらっとカフェ(浴衣の着付け)

参加費無料! / 事前申込み不要! / 7月25日(水)開始!

ふりふら勉強会

お兄さん、お姉さんといっしょに勉強しませんか?

横浜市青少年交流センター(ふりーふらっと野毛山)では、
お兄さん・お姉さんが、みんなに勉強を教えてください!
ぜひ、お気軽にご参加ください!



★学校の授業がなんだか難し...
★宿題が分からないから焦って...
★勉強をする意味が分からない...
★定期テストに向けた勉強がしたい...
★勉強のこつ、勉強のこつ、得意なことなど
誰かに相談したい...

そんなあなたのための勉強会です!
ひとりでも、お友達と一緒にでもOK!
途中からでも参加できます!

●日 時: 毎週水曜日 16:00～18:00 第7月25日(水)が第1回目になります。
●場 所: 横浜市青少年交流センター(ふりーふらっと野毛山)
(住所: 横浜西区老母町25)
●内 容: ・学校の予習/復習のお手伝い
・宿題やテスト勉強のお手伝い
●対 象: 小学生～中学生
●持 ち 物: 教科書などの勉強道具、筆記用具をお持ち下さい。
●申 込 み: 不要です。当日直接会場へおいで下さい。
●お問い合わせ: 横浜市青少年交流センターまでお問い合わせ下さい。
tel:045-241-0073 fax:045-242-0959



主催: 公益財団法人 よこはまユース

ふりふら勉強会 実施案内

9月の
ワイワイおやつタイムは……

ほくほく
ふわふわ



「さつまいも蒸しパン」です♪

ふりーふらっと野毛山では、毎月第二日曜日に「ワイワイおやつタイム」
をおこなっています。青少年委員のお兄さん・お姉さんと一緒におやつを
つくってワイワイたべよう!

ワイワイおやつタイム「蒸しパン」
日時: 9月9日(日) 14:00～16:00
対象: 小学生 先着12人
参加費: 150円(当日もってきてください)
持ち物: エプロン、三角巾、手ふき
申込方法: 電話(045-241-0673)または窓口で。

横浜市青少年交流センター(ふりーふらっと野毛山)

ワイワイおやつタイム 参加者募集



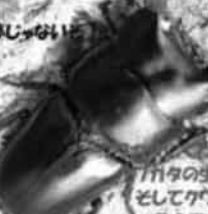
ツリゲンジノ親子体験塾 07

クワガタ・カブトムシ研究会

(国産オオクワガタ編)



人気のオオクワガタを
幼虫の状態で成虫になるまで
飼育ビンを使って育てます。
大事に育てれば
ビッグサイズも夢じゃない!



「くわがたの生虫、飼育テクニック、
そしてクワガタのとり方も
教えてもらえます！」
みんな申し込もうぜ!

日 時：平成 29 年 7 月 22 日 (日) 10:00～12:00
会 場：横浜市青少年交流センター (ふりーむらっと野島 5 階 501)

申込方法：甘藷ハチマキに住所、氏名、学年、電話番号等を
記入のうえ、7 月 1 日 (金) 郵送でお申込みください。

あて先：〒220-0032 西区巻物町 25 横浜市青少年交流センター

参加費用：1. 〇〇〇円 (予金スト、幼虫 1 匹・飼育ビン 1 本通付)
●他市の参加ではオスメス又は基欠金入。高らかしらぬて7歳からし。

定 員：横浜市内在住の親子 50 組
※参加希望の場数は、抽選となります。

主催：横浜法人地青少年育成委員会 支援課
〒210-0002 横浜みなとみらい 25
横浜青少年交流センター
TEL: 045-451-4674 FAX: 045-242-0428
E-MAIL: tsurigenji@yafcc.jp
URL: www.yafcc.jp/yafcc/yafcc_07.htm




夏休みにクワガタを幼虫から飼育するイベント。飼育法のアドバイスも。

園長さんの案内で 動物園をたんけんしてみよう。
みんなの知らない動物たちのコトや
ふん入ることができない
動物園のワラ側を見ることが出来るかも！?

野毛山動物園 大塚展のレクチャーガイド

たんけん隊

参加者募集!

平成12年 12月2日(土)・9日(土)・16日(土)・23日(土)
10:00~12:00 (昼食とも前日・内野?)

募集人員 中学生以上、小学 児童 20人(11月14日(火)~15日)
※中・小学生以上は2名を1組とし、大人2名の参加が必要だ。
※ 集合 10:00——集合場所は、大塚駅南口(大塚駅南口バス停)
※ 解散 12:00——解散場所は、大塚駅南口(大塚駅南口バス停)
(12月2日は、大塚駅南口(大塚駅南口バス停) 解散は11時、23日は、大塚駅南口(大塚駅南口バス停) 解散は12時)

参加費 無料

内容 ●10:00 大塚駅南口より動物園についてレクチャー(お弁当を食べてからレクチャー)
●10:30 大塚駅南口より動物園へ移動(大塚駅南口バス停)
●11:00 大塚駅南口より動物園へ移動(大塚駅南口バス停)

※12月2日は、大塚駅南口より動物園へ移動(大塚駅南口バス停) 解散は11時、23日は、大塚駅南口より動物園へ移動(大塚駅南口バス停) 解散は12時

ガイド 横浜国立大学付属動物園長・野村 大 監
申込み方法 電話にて、参加希望日・人数・学年・電話番号を
申込み先へ連絡(11月14日(火)~15日(水)受付)

【申込み・問合せ】045-331-0000
横浜国立大学付属動物園センター(大塚駅南口バス停)
横浜国立大学付属動物園 2F TEL 045-341-0475

※12月2日は、大塚駅南口より動物園へ移動(大塚駅南口バス停) 解散は11時、23日は、大塚駅南口より動物園へ移動(大塚駅南口バス停) 解散は12時

野毛山動物園の園長さんのガイドで園内を回るイベント。

たくさんの「出会い」と「経験」が待っています！
第10期 横浜市青少年交流センター
青少年委員募集！！

横浜市青少年交流センター
 (ふりーらとと野毛山)
 って、どんなところ？



青少年委員って、どんな活動？



横浜市青少年交流センター(ふりーらとと野毛山)は、青少年文化・交流活動を支援し、青少年の社会性・自立性を高める、「青少年の居場所」を設けています。

毎日、学校帰りの小学生や中学生、バスケやバドミントン活動をしている高校生、放課中の大学生や社会人、サークル活動している大人たち、ボランティアをしている専業主婦など、たくさんの方が集まっています。誰もがふらふらと足を寄ることで参加できます。

青少年委員とは、青少年の声をセンターの運営に活かす、イベントの企画、運営を行うことを通して「青少年の居場所」をより豊かにしていくことです。

学校だけでは学べないことのない、卒業生からは4歳までの年長の通う幼稚園とともに学び、遊び、育ち、成長し、思い、思いを分かちあえる場です。希望を出して一歩踏み出せば、新しい世界が広がることに驚嘆しない、みんなの心に定着する場所になっています。

募集要項

●対象 業：横浜市内在住・在学・活動中の小学生から24歳(平成24年4月1日現在)までの青少年で、次の条件にふさわしい者

●応募者の代表として、すべての青少年が参加出来る「居場所」を創出する活動、参加が出来る活動

●活動：毎月1回以上参加出来る活動

●参加したい活動内容、いつか参加したい活動などふらふらと参加出来る活動

●募集人数：20人

青少年委員の主な活動
(平成23年度実績)

・「まちイベント」(伊豆山・浜島、豊原町、横浜)で中学生が活動し、活動内容の発表活動

・活動報告や市民館での発表、ボランティアセンター主催イベントへの参加

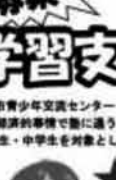
・活動報告やボランティア活動の活動報告

・意見交換

・ボランティア活動している子どもたちへの呼びかけ、呼びかけなど

公益財団法人よこはまユース・横浜市青少年交流センター(ふりーらとと野毛山)

青少年委員募集案内



募集!

あなたの時間と気持ちを ほんの少しだけ子どもたちのために

学習支援ボランティア

横浜市青少年交流センター「ふりーもらっと野毛山」では、学校の勉強についていけない、経済的事情で塾に通うことが難しい等、さまざまな理由で学習に困難を抱えている小学生・中学生を対象とした学習サポートを行います。

●活動内容●

内容：小学生を対象とした学習サポート
国語・算数の宿題や、得意なことや好きな科目を教えるなど、子どもに合わせた活動を行います。

会場：横浜市青少年交流センター
所在地：横浜市青葉区新田町2-1
 地下鉄青葉線「新田町」駅より徒歩15分
 地下鉄有明線「有明」駅より徒歩15分

日時：毎週木曜日 18:00～19:00
18:00～18:30は希望者による個別学習の時間です。

対象：18歳以上（高校生は不可）

●申込み方法●

①本会ホームページから活動希望者登録用紙をダウンロードまたは電話、Fax または Email でお申込み下さい。Email の場合は氏名を「学習ボランティア」として下さい。

②申込み用紙がボランティア協議会へ届いたら、必ず、活動の予定は活動費（交通費）も2割戻すので！

お気軽にお申し込みください!

【問合せ：事務局】

横浜市青少年交流センター「ふりーもらっと野毛山」(横浜・青葉区・有明)

電話：活動費返金係 045-241-2074 / 募集係・事務局 045-241-2075

受付時間：9:00～24:00（24時間） FAX 045-241-2076

E-mail: ta-f@city.yokohama.jp

主催：公益財団法人こども未来コース



ふりふら勉強会 ボランティア募集案内

ふりーふらっと 10

横浜市青少年交流センター開館 10 周年記念誌

発行日 平成 25 年 3 月 24 日

発行者 公益財団法人よこはまユース

横浜市青少年交流センター

〒220-0032 横浜市西区老松町 25

印刷 有限会社ワコー

〒241-0022 横浜市旭区鶴ヶ峰 2-20-8

藤巻ビル 102

